

---

# 平沢唯の幼なじみ ～高校生活～

アクセラ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

平沢唯の幼なじみ ～高校生活～

### 【Nコード】

N0749Y

### 【作者名】

アクセラ

### 【あらすじ】

けいおんのストーリーをベースとした小説です。

平沢唯の幼なじみの黒田翔平（くろだ しょうへい）は今年から男女共学になった桜ヶ丘高校に入学した・・・が入学式初日から唯に振り回されて高校生活が始まる。

他の登場人物はもちろん、何名かのオリキャラも登場します。

ヒロインは唯です。 作者が好きなため 笑

基本は原作の流れで進みますが変更点も多々あり初心者なので文章がおかしいところもあると思いますが、それでも大丈夫な方はご覧になってください。

## 平沢唯の幼なじみ（前書き）

シリリリリリ

どでかい目覚まし時計の音で目が覚めた。

「ふああゝ・・・朝か・・・」

いつもと変わらない一日が始まると思ったが今日は違った。そう、  
今日から俺は高校生なのだ。

## 平沢唯の幼なじみ

「おはよ〜」

自室のある二階から一階のリビングに降りると母さんと一ツ年下の妹の晴香はるかが朝食をとっていた。

「今日からいよいよ翔平も高校生ね」

かあさんが言うと妹の晴香も、

「でも全然かわんないね〜」

と少しからかってくる。もう慣れていることなので適当に受け流しながら朝食をとりだす。

朝起きたのが7時なので時間に余裕があるから朝食をとり洗顔をすませてボーっとテレビを眺めていた。

ふと時計を見ると8時を少し過ぎている。どうせ学校までは歩いても20分もかからないけど高校生活初日ということもあり家を出ることにした。

「んじゃ行つてきますわ」

「はあ〜い、気をつけてね」

と母さん。

お気に入りのキャンパススニーカーを履いている途中、妹の晴香の声が響いた。

「あつ！！お兄ちゃん忘れてたっ！！」

結構大きな声だったためかなりびっくりした。

「なんだよ」

「唯さんが一緒に学校行こって昨日言ってたよ。お兄ちゃんに伝えようと思ってたの忘れてた〜！」

晴香が申し訳なさそうに言っている。

「マジかよ・・・ ってかちゃんとあいつ起きてんだるか」

平沢唯<sup>ひさわ 唯</sup> は俺の幼なじみで幼稚園から今まで同じ学校を出ているし、しかも家は隣である。かれこれ10数年間、唯を見てきて分かるのはとてつもなく天然でドジだということ・・・

親同士も仲がいいのでおいていたりしたら後で何を言われるか分かったもんじゃない。

「わかったよ。迎えに行けばいいんでしょー」

と、言いながら家を出てすぐ隣の平沢家のチャイムを押す。  
この時点で俺の頭の中でこの後の流れが出来上がっていた。まず唯の妹の平沢憂<sup>ひさわ 憂</sup>

が出てきて、お姉ちゃんは今起きたとこだと伝えられ唯が家から出てくるのをしばらく待たされ、時間ギリギリに学校に着くというシナリオが。

ガチャ、とドアが開いて予想どおり憂が出てきた。

「あ、翔平さん おはようございます」

姉の唯とは違い家事全般をこなし勉強も出来るできた妹である。

「おはよ、憂ちゃん。唯はもう起きてるかな？」

すると憂は少しうつむき言わずらそうに、

「その・・・お姉ちゃんは・・・」

(・・・・・・はあ・・・・・・)

それを見ておおかた検討はついたので、

「外で待つてるからなるべく早く出てくるように言っというて」

と、憂にお願いし外でイヤホンを装着し音楽鑑賞を始めた。

しばらくして携帯を開くと8時30分になっている。さてよ・・・

たしか新入生は8時50分までには

教室に入っつけてなつてたな・・・ やばいじゃん!!

バツと立ち上がった瞬間に平沢家の玄関が開き幼なじみの唯が飛び出してきた。

「翔ちゃんごめ〜ん！ 寝坊しちゃった〜!!」

てへへ〜と頭をかきながらこっちに走ってくる。

「翔ちゃん言うな、早く行こう！マジで時間やばいつて！」

すると唯は、

「うーん、あ、翔ちゃん制服すごく似合ってるね」

始まった・・・今の状況を分かっているのだろうか・・・まあ今に始まったことじゃないけど入学式

当日から遅刻という事態はなんとしても避けたい。

「とにかく急ごう！」

「ああ、翔ちゃん待って」

二人で走り出した。

それから15分後8時50分ギリギリに学校に着き昇降口のクラス表の前に唯と立っていた。

「ま、間に合った・・・ハア、ハア・・・」

朝一からの運動はきつい・・・隣で唯も疲れきっていた。

「もう私うごけないよ」

俺は唯がよっかかってくるのを引き離しながら、

「とりあえずクラスどこか見て早く行かないと・・・」

クラス表の周りにはまだ10数人新入生がいた。とりあえず間に合いそうだ・・・良かった。

俺はクラス表を眺める、1年2組・・・他に知っている人がいないか名簿を見ていく。



するととなりで唯が、

「あ！私も2組だ！翔ちゃん一緒だよ」

と抱きついてこようとする。

「いやいや！やめろよ唯！」

あわてて唯を引き離す。

昔からこれだ・・・心の中では分かっているのに年頃だからか若干顔が赤くなっている。

「もういいじゃん、昔は普通にしてたのに」

ぶうくと唯がふくれる。それは幼稚園の時くらいならまだ分かる・・・が中学、高校生になってもその当時のまま抱きつくことするのはいかなものか・・・と心の中で思う。

「とりあえず教室に行こう。唯も2組なんだろ。あと翔ちゃんやめて」

「そうやって照れるんだから翔ちゃん」

さっそく翔ちゃん出てきた・・・時間が時間なので教室に急ぐことにした。

教室に入るともうすでに席はうまっていた。

「うおーい、翔平おはよー！時間ギリギリじゃん」

小学校からの親友の山崎健太<sup>やまさき けんた</sup>が俺に気づいて声をかけてくる。

「早く起きたんだけどね・・・」  
と、となりの唯に視線をながす。

「あ、翔ちゃん今私のこと言ったでしょ！」  
唯がまたふくれる。

「あら、唯と翔平じゃない。おはよ」

反対側からまた聞いた声がした。振り返るとおなじく小学校からの付き合いの

<sup>まなべ のどか</sup>  
真鍋和が立っていた。

「のどかちゃん！同じクラスだったんだね」

唯が今度は和に抱きつく。 やれやれ・・・

それから健太と和と話をしているうちに放送が流れて新生入生は講堂に召集がかかった。

あらためて校内を歩くとかなり広い。学校に入るときは時間のことしか頭になくそんなに見てなかったからか・・・

そこから1時間入学式が始まり校長先生のながいながいお話が始まった。

ふとまわりに目を向けると和が校長先生の話を真面目に聞いている。

（和は昔から真面目だからなあ）

次に反対を見ると健太が校長先生に顔をむけて目をつぶっている。しかもまったく微動だにしないのがまたすごい。

(・・・健太また腕を上げたな・・・)

俺は呆れながらさらに視線を向けると唯がいた。

唯は目を輝かせながら周りをきよろきよろしている。

しかも明らかにメガネをかけた髪の長い女の先生が唯をマークしている。

(・・・唯は高校生になっても相変わらずか・・・)

そんなことを考えてるうちに校長先生のお話も終わり長い入学式が終わった。

新入生がぞくぞくと講堂から自分のクラスに戻っていく中俺も歩いていた。

ちなみに健太は入学式が終わると同時に先生に連れて行かれた。まあ理由は見当つきまくりだけど・・・その時後ろから聞いた声でした。

「翔ちゃん、これ可愛いでしょ」

振り向くと唯が髪に桜の花をつけていた、というより前髪をとめているピンに花びらをつけていた。

「翔ちゃんはやめろって。へえ、いいじゃん」

すると唯は、

「えへへ　でしょ」

満面の笑顔で嬉しそうに笑っている。

よくよく考えると唯が昔から変わった所はほとんどないような気がする。

「あら、早く教室に行かないとホールルーム始まっちゃうわよ」

和が向こうで呼んでいる。

その後ろを健太がやつちまった。オーラを出しながら落ち込んでいく。

「翔ちゃん、早く行こうよ」

唯が俺の腕を引っ張る。

「分かったから引っ張るな、そして翔ちゃんはやめて」

そして4人で走り出す。

こうしてあわただしく桜ヶ丘高校での学校生活が幕をあげた。

## 平沢唯の幼なじみ（後書き）

1 話目は以上で終わりです。

初心者なので表現がおかしいところも多々あったと思いますが、早く慣れていきたいと思えますので  
よろしく願います。

2 話目からはいよいよ他の桜高軽音部のメンバーも登場しますので  
お楽しみに！

1 話目で出できた登場人物の紹介をします。

黒田 翔平 （くろだ しょうへい）

平沢唯（ひらさわ ゆい）の幼なじみであり、住んでいる家も隣ど  
うしでその付き合いは長い。

天然な唯をさまざまなところでフォローする保護者的な存在で唯か  
らはよく頼られる。

本文中には出てないが小さいときから父親とバイクをいじっていた  
のでバイクが趣味で、中3の春から父親の知り合いが経営するバイ  
クショップでバイトをしている。

少し茶色がかったストレートヘアで、普段はコンタクトをつけて  
いるがメガネの時もある。

ちなみに4月2日が誕生日で入学式の時点では普通自動二輪免許を  
取りに自動車学校にも通っている。

唯の抱きついてくるところや、昔から『翔ちゃん』という呼んでく  
ることが最近の悩みである。

平沢 唯 （ひらさわ ゆい）

翔平の幼なじみであり昔から色々なことでフォローしてもらっている。

茶色の少しくせがあるセミロングヘアで前髪を2本のピンでとめてあることが多い。

性格はかぎりなく天然でけっこうドジなうえゴロゴロするのと可愛い物が大好きというもので妹の憂によく世話をしてもらっている。

翔平のことはとても頼りにしていて心のなかでは好きという気持ちがあるものの、それがどういう感情かよく分らずにいる。

山崎 健太 （やまざき けんた）

翔平や唯とは小学校からの付き合いで親友でもある。

黒のストリートヘアに青ぶちメガネといういかにも優等生っぽい感じであるが樂するところはとことん樂するなど実際は不真面目な部類に入る。

性格は明るくアクティブで適当にやってもそこそこの結果を残すなど要領はいい。

小学生のころからサッカーをしており、高校でもサッカー部に入る。

真鍋 和 （まなべ のどか）

同じく小学校からの付き合いで翔平と同じく唯の保護者的存在である。

黒のショートヘアに赤ぶちのメガネで成績優秀なまさしく優等生である。

唯の日頃の言動を見て翔平への好意を分かっており静かに見守るといった大人っぽい性格をしている。

平沢 憂 （ひらさわ うい）

唯の妹で家事全般をこなし、姉である唯の世話もする出来た妹である。

翔平たちの1つ年下で中3で、昔からの付き合いで翔平のことを唯と同じく信頼している。

また、翔平の妹の晴香と大の仲良しでよく黒田家にも遊びに来ている。

## けいおん部始動！！（前書き）

桜ヶ丘高校に入学した翔平と唯、それに健太に和。  
入学式から2週間経ち学校生活にも慣れてきたところであるがまた  
また今度はクラブ活動をめぐりトラブルがおこる。



けいおん部始動！！

入学式から早くも2週間が経ち学校生活にも慣れ、1年生のほとんどは放課後のお楽しみ・・・そうクラブ活動を始めていた。

そんな中ある日の放課後、翔平は自分の席につき趣味のバイク雑誌を読んでいた。

ふとさつきからずっと聞いた声が、

「うーん・・・、うーん・・・」

とうなっていた。その相手が誰かは翔平にはすぐに分かり最初は聞こえないふりをしていたが和の声でその理由が分かった。

「あら唯、何を悩んでるの？」

「あ、和ちゃん！ 実はどこのクラブに入るか迷ってた」

と唯は明るい笑顔で言う。

「ちょっと唯、あんたまだどこのクラブに入るか決めてなかったの！？他のみんなはとつくのとうに決めて活動を始めてるわよ」

若干あきれた様子で和が唯に言っている。

見ると唯は机の上に白紙の入部届けをひろげている。

「でもでも・・・私運動オンチだし、文化系のクラブもよく分からないし・・・」

唯は目を点にして和に返す。和はため息をつきながら、

「はあく・・・こうやって二ートが出来上がっていくのね」

「部活やってないだけで二ート!?」(ガーン!)

そこでなぜか和から翔平に話がふられた。

「ちょっと、翔平からもなんとか唯に言ってあげてよ」

「・・・はい?」

俺は突然のふりに雑誌から目を離し、とまどいながら斜め後ろを向く。ちなみに俺の席の右斜め後ろが唯の席なのだ。

「翔ちゃんはなんのクラブに入っただの?」

唯もすごく気になる様子で俺の方を見てくる。

「翔ちゃんは言うなって。俺も何も入ってないけど・・・」

さっき二ートとか言葉が出たこともあり気まずい・・・特に何とかが言ってやってよとふられたわけなので余計に気まずい。和はそれを聞いてまたため息をつき唯と翔平に言う。

「とりあえず唯は入るクラブを早く決めなさい・・・。翔平もね」

「はい」「俺もか・・・」

和はそれを聞くと教室から出て行った。和は生徒会に入ったらしく放課後は毎日忙しそうにしている。

「翔ちゃん、何かしなくちゃいけない気はするんだけど何したらいいか分かんないよ」

唯は目を潤ませながらこっちに寄ってくる。和に怒られたのが結構こたえているみたいだ。

「はあ……とりあえず掲示板にクラブの紹介があつたから見に行こうか」

俺は雑誌を閉じて立ち上がり、5分後には唯と掲示板の前に立っていた。

（こうしてみると結構色んな部活があるのね）

と、俺は思っていた。隣にいる唯はというと目を輝かせながら、

「わ、茶道部、料理研究部……おいしいお菓子とかたべれるのかなあ」

と、すこし……いや結構ずれた方向に進んでいった。

「まあこんだけあるんだし唯にも合うところあるんじゃない。今日はもう帰ろうぜ」

「うん。翔ちゃんありがとね！私がんばって考えてみるよ」

唯は明るい笑顔でまかせとけ、といった感じのポーズをとる。

「翔ちゃんはやめてね」

こうしてこの日は終わった。

そして翌日の昼休み、俺は席について雑誌を読んでいた。すると前から唯が、

「翔ちゃ〜ん！クラブ何にするか決めたよ〜」

「翔ちゃんはやめろって・・・」

俺は雑誌から目をあげて唯を見る。

唯はえへ〜と笑いながら一枚のクラブ勧誘の紙を見せる。そこには・・・軽音部と書いてある。

「へえ〜・・・お前楽器の演奏とかできたっけ？」

今まで唯が楽器を演奏してるのを見たことは昔カスタネットをたたいていたくらいしか見た記憶がなかったので少し驚いた。

「軽音部って軽い音楽だから簡単なことしかやらないって」

「はぁ・・・なにが出来るの？」

「口笛・・・とか？」

俺は手にしていた雑誌を落としそうになる。

「カ、カスタネットとか・・・ほら、幼稚園のときたたいてたし・・・」

最初の元気がみるみるなくなっていた唯。

「いやいや！軽音部つてのはギターとかドラムとかだぞ。カスタネットはないから・・・しかも下にギタリスト募集って書いてあるけどギターなんかひけたっけ？」

すると唯は、

「え・・・そうなの？私ギターなんて弾けないよ？」

「やつぱりな・・・まあ早く気づいてよかったじゃん。他のクラブ考えてみたらいいんじゃない？」

俺はこれでこの話は終わると思ったが予想もしない言葉が唯から返ってきた。

「で、でも先生に今日二人で見学行きますって私言っちゃったよ？」

「・・・二人って他にだれかさそつたの？だれだれ？」

「翔ちゃん・・・」

「・・・うおい！なんで俺も見学行くなってんだよ！俺は行かないぞ？」

突然のことで手にしてた雑誌をまた手から落としそうになる。

「だって一人じゃ心細くて・・・お願い、翔ちゃん辞めるって言  
に行くのついてきて」

「えええええ・・・」

「だってそんなこと言ったら白い顔の怖い人が・・・あううう・・・」

「今どきそんな人いないだろ」

「一緒にいこうよ・・・」

唯が目を潤ませながら上目遣いにこつちを見てくる。

最初は断ろうとしたけどこれをされると断るに断れない・・・。2 /

3秒悩んだ末折れた。

「わかったよ・・・」

「ありがとう！翔ちゃん」

唯はさつきとはかわりばあ〜と溢れんばかりの笑顔になる。

「翔ちゃん言うな・・・」

対象的にげんなりした感じの翔平。

そして放課後、唯と翔平は軽音部の活動している音楽室の前に立っ  
ていた。

「さあて、早く言って帰ろうぜ」

「う、うん・・・」

唯はドアの前で何度も深呼吸をしている。

「翔ちゃん・・・いくよ」

そして唯がドアノブに手をかけたとき、

「ねえ、うちの部の前で何してるの？」

「えっ？」

突然後ろから声をかけられた。声のしたほうを見る。そこには唯と同じくらいの髪の長さで前髪をカチューシャでとめた女の子が立っていた。唯はというと、

「あわわわわ・・・ちがいますちがいますちがちが・・・」

と、泣きながら右手をぶんぶん振っている。

それを見たカチューシャの子は、

「あつ！テンポが悪くて使えないドジッ子！」

（唯のこと知ってたのかこいつ。ひどい言われようだけだな。これじゃあ唯が言うのは無理だな・・・。早く帰りたいし俺が言ってしまうおう）

実は・・・と言おうとした瞬間にカチューシャの女の子が唯の手を

とってはしゃぎだした。

「あっ！　もしかしてあなたが入部希望の平沢唯さん！？」

「え、あ、はい・・・そうです」

唯が戸惑いながら答える。

「ギターすごくうまいんだってね　来てくれるの待ってたよ！」

なんか話にあらぬ尾ひれがついている・・・この時点でこの場の主導権はカチューシャの女の子に  
にぎられてしまった。

「で、君も入部希望の黒田翔平くんだね！？ささ入って入って」

「いや・・・そうじゃなくて・・・」

と、俺は本題を言おうとしたものの女の子の耳には全く入ってない・・・。

そうこうしているうちに、

「あううう・・・」

カチューシャの女の子に引つ張られ唯は音楽室に消えていった。

（ここまできて見捨てるのも気まずいな・・・名前も向こうには知られてるし・・・）

仕方なく俺も音楽室に入りドアを閉めた。



「みんな〜！入部希望者が2人も来たぞ〜 よ〜し、ムギ お茶の準備だ〜！」

音楽室の中にはカチューシャの子と他にもう2人、長い黒のお姫様カットで背の高い女の子と、金髪で眉の太いいかにもお嬢様といったぼわわした感じの部員がいた。

「本当か、2人も!?」

「歓迎いたしますわ〜」

とでてきたものの、背の高い女の子は俺の姿を見るとすぐにおくの準備室に隠れてしまった。

隠れたといっても壁の向こう側からちらちらとこっちを見てくる。

「あの子、どうかした？」

俺は隣にいたカチューシャの子に尋ねる。

「あ〜、澪は恥ずかしやがりやさんだからね〜。お〜い、澪！恥ずかしがらずにでてこいよ〜！」

「う・・・うん・・・」

と、もじもじしながら準備室が出てくる。  
ときおりこっちをちらちら見て恥ずかしそうにつつむく。

（変わった子だな・・・）

そうこうしているうちにテーブルの上に紅茶とイチゴのショートケーキが並び唯と俺を囲む形でみんな席に着いた。しかし高級そうな紅茶にケーキだ。

「わあゝ おいしそうなケーキゝ！」

唯は目を輝かせている。ここに来た目的を忘れたわけじゃにいだろうな……。

そこでカチューシャの子が、

「軽音部によろこそっ！私が部長でドラムの田井中律（たいなかりつ）です。律でいいよっ」

自己紹介を始める。それに習い他の2人も、

「ベースの秋山澪（あきやま みお）です……」

「始めまして。キーボード担当の琴吹紬（ことぶき つむぎ）です。ムギって呼んでください」

と、自己紹介を始めた。

「このケーキ、おいしいゝ！」

唯はケーキを頬張っている。このまま放っておけば成り行きで俺も入部することにもなりかねない。ここらで本題に入るしかない。

「いやゝゝ、今部員が3人しかいなくてさゝ。今週中にもう1人入

らないと廃部になるところだったんだあゝ！でもギターの達人の平沢さんなんか音楽上手そうな黒田くんが入ってくれてよかったよ」

何か上手そうになってどういうことだよ・・・。

しかしこの流れは冗談抜きでやばい。俺はケーキを頬張っている唯に小声で合図を送る。

（俺から言うからお前も後に続けよ？）

（う、うん・・・）

「いやそのことなんだけど、実は俺は唯の付き添いってだけであつて、入部を取り消してもらったために来たんだよ」

「えっ・・・！？」

一瞬で場の空気が凍る。

その後に続き唯が、

「私、ギターは弾けないし・・・もつと違う楽器かと思ってて・・・」

「じ・・・じゃあ何なら出来るの？」

とムギが聞く。すると唯は、

「カスタ・・・ハ・・・ハーモニカッ！」

（絶対カスタネット言おうとしたな・・・）

「あつ、ハーモニカならあるよっ！何かふいてみせて・・・」

と律が言いながらハーモニカを取り出す。こいつもこいつで何でも都合よくそんなもんもってるんだか・・・。  
その瞬間に唯は、

「ごめんなさい！吹けません！」

と、綺麗なお辞儀をしていた。

そこで今まで黙っていた秋山澪が、

「でも、うちの部に入ろうとしてたってことは音楽には興味あるってことよね？」

それに続き律も、

「他に入りたいクラブとかってあるの？」

「ううん・・・特には・・・」

唯が答える。3人はアイコンタクトをとりあっている。  
どうやら唯を説得しようとしているみたいだ。

「本当にごめんなさい・・・帰ろ・・・翔ちゃん」

「なんかホントにごめんね。今週はまだ3日もあるし他の希望者がきつと来るって」

俺は言いながら立ち上がり唯もそれにつづく。

すると・・・

「ああ！ちよつと待ったっ！」

「もう一杯お茶いかが？」

と必死になり引き止め始めた。

「でも・・・」

「クッキーとマドレーヌもあるのっ！」

「じゃあ・・・もう少しだけ・・・」

唯はまた席につく。ここまでして引き止めるとはよっぽど焦ってるんだろうか。

「ほらっ！黒田君も座った座った！」

「翔ちゃん、このクッキー美味しいよ」

律と餌付けられた唯がクッキーを頬張りながら言ってくる。やれやれと思いつながら席についた。

そこからしばらく紅茶とお菓子をこ馳走になりながら他愛のない話が続く。

「んっ、おいしい・・・ハッ、す・・・すみません！こんなにごちそうになるつもりじゃあ・・・」

さすがの唯もここらで気づいた。

「いいの、いいの」

「毎日こつやつてお菓子を食べましょう」

と、律やムギが言う。

「いやいや・・・それ軽音部じゃない・・・」

秋山さんが言いかけた瞬間机の下でドスツと音がして同時に

「~~~~っ・・・」

と痛がり始めた。俺も、心の中では同じことを思ったものの口に出したら同じ目にあつてたかもしれない。

「平沢さんは他にどんなものが好き？」

そこから律、ムギ、漣による唯への質問攻めが始まった。何とかして合う話題を見つけようとどんなものが好きかなどを聞いていく。しかしそれに対しての唯の返答は言われても返しようないものばかりであつた。

律からの、

「休みの日は何して過ごしてるの？」という質問に対しては、

「一日中ゴロゴロしてるよ 私ゴロゴロするのだいすきなんだあゝ」

ムギからの、

「他にどんなものが好き？」に対しては、

「美味しいものならなんでも」

漣からの、

「苦手なものは？」に対しては、

「私、暑いのも寒いのもにがてなんだあゝ。夏は床の上でゴロゴロして、冬は1日中コタツの中でゴロゴロするの」

(・・・ぷツ・・・くくく)

あまりに会話が成り立たない様子を見て俺はふきだしそうになった。その瞬間に机の下で律に足を思い切り踏みつけられた。

(「こ、この野郎ツ・・・」)

結局会話の糸口を見つけだすことができず3人とも黙り込んだ。その様子をみて唯は、

「あつ、あの・・・じゃあ・・・翔ちゃん行こう・・・」

と立ち上がる。それをみた瞬間、

「ああ！行かないで！ゴロゴロしているだけでいいからあ！」

「もっと美味しいお菓子持ってきますから！」

律にムギが唯を止めようとする。

(確かに廃部がかかってるからなあ)

「・・・なんかごめんなさい・・・軽い気持ちで入部するって言っ  
たから・・・期待させるだけさせて・・・なんて謝ったらいいかあ  
」

ついに唯が泣き出した。

「「「なっ！」「」」

突然のことに3人とも驚く。今まで唯を見てきてここまでマジ泣き  
してるところは見たことがない。  
もちろん俺も焦る。

「うおい！泣くなつて！？」

「私たちこそごめんなさい・・・」

「無理に引き止めて悪かったな・・・」

「ごめんね・・・」

他の3人が謝る。しかしそれでも唯は泣き止まない。3人は俺のほ  
うを見ながら目で助けを求めている。しかたなく助け舟を出すこと  
にした。

「おい、唯。軽音部の皆さんが演奏聞かせてくれるってよ」

（ええ！？）

律が驚いた顔をする。

（確かに来てくれたのに演奏見せないんじゃないや・・・やろうつ！律、ム  
ギ）

漣はやる気を見せムギもそれに続く。



「えっ！？演奏してくれるの？」

途端に唯は泣き止んだ。

こうして軽音部による演奏が始まった。曲は、『翼をください』。演奏を聴いてる最中唯は終始目をキラキラさせていた。そして演奏が終わる。俺と唯は拍手を送る。

「ど・・・どうだった・・・？」

3人がおそろおそろ聞いてくる。

「うん、いいと思うよ」

と、俺は返す。唯は拍手をしながら立ち上がり満面の笑顔で言う。

「なんか・・・どう言葉で表したらいいか分かりませんが・・・あんまり上手くないですねっ」

（ばっさりだあゝゝ！！）

3人は目を点にして唯を見ている。きっと3人も同じことを思っているだろうと思う。

しかしこの後、唯が予想もしないことを言う。

「でも・・・なんかみんな演奏してて楽しそうでした。私この部に入部しますっ！」

「「「「！！？」」」」」

この言葉にその場の空気が一瞬固まり、漣と律が唯を見ながらお互い相手の顔をつねる。横をみるとムギも自分の顔をつねっている。きつと夢じゃないか確かめているんだろっか。そして、

「ばんざーっ！っ！」

「ありがとうっ！っ！」

「これから一緒に頑張りましょうっ！っ！」

「うんっ！っ！おねがいしますっ！」

唯の手を取り飛び跳ねたりして4人（唯も含め）喜んでいる。なんにせよ唯の部活が決まってよかった。さて・・・帰るか。今日はオークションで落とした愛車のモンキーのカスタムパーツが家に届いてるはずだから早く帰ろう。

「それじゃ・・・唯、頑張れよ 紅茶ご馳走様でした、失礼します」

と、言って帰ろうとすると後ろから唯と律に肩をつかまれた。

「翔ちゃん、ストップ！」

「な～に帰ろうとしてんだよっ」

「俺の用事は済んだしもういいだろ・・・」

「よくな～っ！っ！空気よめ空気っ！っ！」

なんの空気だよ・・・。この流れからいくと入部しろということだろっか。

「翔ちゃんも一緒に入ろうよ たしか翔ちゃんいつときギターとかしてなかったっけ!？」

「そうなのか!? 黒田くんっ!？」

「なら唯の教育係としても入部するしかないな」

「歓迎いたしますわ」

他の3人も次々勧誘してくる。

「いやいや、そもそも俺バイトしてるから練習なんかあんまり来れそうにないし・・・ってか無理です」

「だめだめっ! 無理なことない!」

律が言う。この時点で流れはおおかた決まった様子だが、俺は諦めない。

「そっだ! 健太もたしかギター弾けたはずだからあいつつれてくるからさ・・・」

「翔ちゃん、一緒にやろうよぉ・・・」

唯が目を潤ませて見てくる。しかも感じからいくとさっきと同じように大泣きしそうな様子だ。

こうなってしまうたらもうどうしようもない。

（バイトもあるから部活週に2・3日出るくらいだし・・・はあ・・・）

考えた末出した結論は、

「分かったよ。やりますよ、入部しますよ」

ついに入部してしまった。この言葉に唯は、

「やったあゝ！！翔ちゃん先生これからよろしくね」

と、抱きついてくる。

「うおゝいつ！？やめろってゝ！あと翔ちゃん言っなくなっていったら」

あわてて唯を引き離す。視線をすぐ感じてその先を見ると、律とムギはニヤニヤしながらこっちを見て、澪は顔を赤くして下を向いている。俺はなんとか話題をもとに戻そうと、

「と、とにかく入部するからそれでいいんだろ？」

「よゝしっ！！部員も5人になって部費も増えることだし・・・活動開始記念に一枚っ！」

部費って・・・お前の私情じゃね？か。

律はそういつてかばんからカメラを取り出す。

「あっ・・・私のカメラ・・・」

後ろで澪がつぶやく。そうして撮られた写真には律はおでこしか写ってなく他の部員は並んでピースをして、俺はその後ろでやる気のない笑顔を出していて、現像された後唯と律にこっぴどくお叱りをうけることになる。

こうして唯と翔平を加えた軽音部は廃部の危機を乗り越え活動を開始することとなった。



## けいおん部始動！！（後書き）

2話目は以上で終わりです。

感想もよろしければどんどん書いてください

それでは2話目に登場した人物紹介をしときます。

田井中 律 （たいなか りつ）

軽音部の部長でドラム担当。秋山澪（あきやま みお）とは小学校からの親友である。

性格はかなりのおおざっぱであるが、活発でやると決めると行動にうつるのは速い。翔平たちが入部するさいに唯が翔平に抱きついているところを見て、バイトであまり部活に出てこない翔平を引き寄せるため唯と翔平をくつつけようとししばしば騒動をおこす！？

秋山 澪 （あきやま みお）

律の親友でベース担当。性格は律とは正反対で重度の恥ずかしがりやである。成績は優秀でベースの腕はかなりのもの。ここからの学校生活でこの性格が変わる！？

琴吹 紬 （ことぶき つむぎ）

キーボード担当で社長令嬢。部室にティーセットやお菓子を持ち込むなどしている。キーボードの腕はかなりのもので小学生のときにコンクールで賞をもらったことのある腕前。律が唯と翔平をくつつけようとするのを楽しく見ている。





## ギターがほしいっ!! (前書き)

軽音部に入部した翔平に唯、そして律に漣、ムギの5人による部活動が始まる。

その翌日、部長命令でギターを持ってこさせられた翔平は4人の前で弾いて大絶賛をうける。

しかし、翔平はバイトで部活に出るのは週2、3日、唯はギターを持ってもないし弾けないということではなかなかスタートが出来ない。ギターを買うためにみんなでバイトをするなど・・・はたして唯はギターを手にすることができるのか!?

ギターがほしいっ!!

軽音部に入部して早くも1週間が経つ。入部してから3回部活動に行ったもののお茶を飲んでいるだけで練習などもまったくしていない。

(こんなんで大丈夫なのか・・・?)

嫌々入部したとあつてもすこし心配になってくる。今日はバイトが休みなので部活に出なければならぬ。

「翔ちゃん!部活行く」

唯が笑顔でこっちに走ってくる。俺もカバンを持ち立ち上がり唯と音楽室に行くことにした。  
歩きながら唯に、

「お前、ギターするんだよね?ギター買わないのか?」

「あつ!わすれてたあ。翔ちゃん、ギターって5000円くらいで買えるよね?」

「無理だろうなあ。もっとするぞ多分」

「ええ、どうしよう!」

そうこうやりとりをしているうちに音楽室に着いた。ドアを開けるとすでに他の部員は席につき紅茶を飲んでいる。

「おうっ、やっと来たか〜！」

「今紅茶入れますね」

「待ってたぞ」

3人が声をかけてくる。唯はテーブルの上に置いてあるお菓子を  
見て目をキラキラさせながらいつの間にか席についている。

「翔ちゃん！早く食べようよぉ〜」

と、唯が声をかけてくる。その後に続き律も、

「さあ！しょうへーも早く座った座ったッ！！」

「へいへい・・・」

いつもと違う感じに気づいたのか漑がこっちをちらちら見てくる。

仕方なく俺も席につき、ムギが淹れてくれた紅茶をいただく。

流れでいうと今日もお茶だけで終わるパターンになりそうだ・・・。  
そろそろ何かいったほうがいいかもしれない。そう考えてる間ほか  
の4人はなぜ自分の楽器をそれにしたかの話で盛り上がっている。

律がドラムにした理由はちまちましたことが嫌いだから（まあそう  
だな）、漑がベースを選んだのは真ん中で目立つギターは恥ずかし  
いから・・・しかも話しながらその場面を想像しただけでハボフン  
ッ！と頭から煙をだして気絶した（どんだけだよ・・・）、ムギ  
は小学生の時ピアノのコンクールで賞をもらったから（まあ上手い  
もんな）・・・紅茶を飲みながら聞いていた。

ふと、漑が、

「なあ、黒田くんはなんでギターを始めたんだ？」

聞いてくる。最初あったときは話もまとも出来なかったのにだいぶ慣れてきたのかな。

「確かに気になるな、なぜだしよーへー!？」

「翔ちゃん、なんでなんで!？」

唯と律も気になる様子で聞いてくる。

「まあ・・・親から教えてもらって、やってみたら意外とできちゃった感じだな」

「普通はけっこう苦労するのにな」

「じゃあ私もきつとすぐできるよ」

漣と唯が言う。

(いやいや・・・唯、お前は楽譜すら読めんだろうけどな・・・)

「ところで唯、ギターはいつ買っただ？」

ついに漣が唯に尋ねた。

「あつ、そうか、私ギターやるんだっけ。忘れてたあ」

「おいおい、ここは喫茶店じゃないんだぞ」

漣があきれた感じで返す。律も、

「確かに唯のギターが無いとスタートできないし・・・よし明後日の日曜みんな唯のギター見に行こっ!」

と、号令をかける。その言葉に漣もムギ、唯も「おっっ!」とあわせる。

「あっ・・・でもギターってどのくらいするのかな?」

音楽室にくるまでの話を思い出したのか唯が聞いてくる。その言葉に漣は、

「まあ・・・安いやつは1万円くらいであるけどあまり安すぎてもな。5万円くらいが妥当じゃないかな?」

「まあ、そうだろうね」

最後の方は俺に確認するような感じなので俺も合わせる。

「5万円・・・!?私のおこずかい10カ月分・・・」

唯はびつくりして・・・突然とても明るい笑顔になって律に向かって、

「部費でおちませんか?」

「おちません!」

律も明るい笑顔で返す。そして俺の方をみて、

「もちろんしょーへーも行くんだぞ」

「はいっ!?俺は日曜バイトだから無理だよ」

「えっ！翔ちゃん来れないのっ！」

「しょーへーっ！空気よめ空気っ！！」

唯はがっかりした感じで、律からはブーイングの嵐が飛んでくる。でもバイトはバイトなのでしかたない。最後は漣とムギ、そして俺が唯と律をなだめる感じになりこの日の部活は終わった。

週が明けて月曜日、今日は掃除当番なのでいつもより早く8時前に俺は家を出ていた。学校に向かっている途中後ろから知った声が聞こえてくる。

「うっい翔平はよぎっすッ」

「うすっ 今日朝練か？毎日毎日ご苦労なこったなあ」

「まあなっ！……そいやあ翔平って平沢と軽音部に入ってたんだよな？」

「ああ、まあね。それがどうかしたか？」

「いやいや、昨日の日曜商店街で軽音部の皆さん見かけてさあー翔平もいるかと思ったけどいなかったからあれっ？って」

「まあ昨日はバイトだったしね」

「あゝ、そいやあ中免（普通自動二輪免許）取ったんだってな」

「おう！一発合格一発合格」

そんなことを話しながら健太と学校に歩いていった。ちなみに唯は寝坊したらしく遅刻ギリギリで教室に入ってきた。髪はボサボサですごいことになっている。それをみて健太は大爆笑し、和は苦笑いをしていた。

そして放課後・・・

部室に集合したみんなから紅茶を飲みながら日曜日の報告をつけた。

「昨日は楽しかったよね」 澪ちゃんのあの服可愛かったし。翔ちゃんも来ればよかったのに！」

「や、やめろ唯！」

「ゲーセンたのしかったしいー」

「ほんとうですね」

（いやいや・・・そこじゃないだろ・・・）  
唯をはじめみんなたのしそうに話をしている。やれやれと思いながら本題を尋ねる。

「で、肝心の唯のギターはどうなったの？」

「あ・・・翔ちゃんそのことなんだけど・・・」

唯がみんなをちらちら見ながら申し訳なさそうにしている。

「唯のギターを買ったためにみんなでバイトしようぜバイトツ！」

ここで部長が、おーッ と片手を上に上げる。

「実は唯もお母さんに無理言つて5万円前借りしたんだけど・・・そのギター、唯がとても気に入ったらしくて・・・」

律の話では状況が全く分からない。その様子を察知したのか漣が説明を始めた。

話によると、唯のギターを見に商店街にある（10GIA）という楽器屋さんに行ったのらしい。

唯は親から5万円を前借りしてギターを買おうとしたのだが、唯がすぐ気に入ったギターがあったらしくその場に座りこんでギターを見たまま動かなくなったらしい。始めて楽器を買ったときの自分と唯を重ね合わせた律がみんなでバイトをしようと言い出して今にいたるらしい。

「へえ・・・それでいったいどのくらいのギターを？」

「えーっと・・・『ギブソン・レスポール』で値段が・・・25万円・・・」

紅茶を飲みながら漣が言つたのを聞いた瞬間むせた。

「に・・・25万・・・！？ゴホゴホッ・・・」

「翔ちゃん大丈夫！？」

「しっかりしろ！しょーへー！」

「大丈夫ですかあ？」

「ご、ごめんっ！紅茶飲んだときに驚くようなことを言って・・・」



「  
唯をはじめみんなが声をかけてくる。漣にいたっては罪悪感を覚え  
たらしく謝ってくる。」

「い、いや気にすんな秋山さん。またまた『ギブソン・レスポール』  
とはとんでもないものを・・・あれは重さもそこそこあるし、ネッ  
クも太いだろ・・・まあ唯が欲しいって言うならいいんじゃない？」

「なんかみんなに悪い気がするんだけどね。でも律ちゃんがこれも  
軽音部の活動の一環だからって・・・」

またまた唯が申し訳なさそうに言う。律がそのあとに続く。

「気にしない気にしない　そういう訳だからしょーへーもよろしく  
ッ！」

「いやいや、だから俺はもうバイトしてるからさ・・・お金はその  
分だすからそれでいいかな？」

「なにおーッ！しょーへー付き合い悪いぞ！空気読め空気ッ！！」  
「翔ちゃんも一緒にしようよお」

その瞬間律と唯がブーイングを飛ばしてくる。その後またまた漣と  
ムギ、そして俺が唯をなだめる感じになってこの日は終わった。な  
んか先週の金曜もおなじ感じだった気がするけど・・・。

翌日火曜日はバイトがあるため俺は授業が終わると同時に学校を出  
る。バイトがある日はいつも唯をはじめ部員全員に伝えるがいつも

唯は、

「翔ちゃん行かないでっつ！」

袖をつかんでなかなかはなしてくれない。最後は和や健太に助けてもらい帰れるものの時間をロスしてしまう。

「やばい・・・ダツシュだ・・・」

一方、こちらは音楽室で翔平をのぞく4人が紅茶を飲みながら求人雑誌を見てバイトを探していた。

「何のバイトがいいかなあ？」

「ティツシュ配るのは？」

律の言葉に澪は自分が街頭でティツシュ配りをしているのを想像する。しかも道行く人にどうやって声をかけたらいいか分からずオドオドしている自分がでてくる。

「いや・・・むりかも・・・」

「ファーストフードはどうですか？」

とムギが言う。またまた澪はその場面を想像する。が・・・

「それも・・・無理・・・（ボフンッ）」

「澪ちゃん大丈夫っ!？」

「やっぱり澪にはハードル高かったか」

しかし澪自身もこのままではいけないと思ったのだろう。立ち上がり、

「律ッ! 私なんでもやるよっ!!」

律は澪を見て嬉しそうにクスッ、と笑う。そこで律は情報誌の一角にある短期の求人指差す。

「あ、これなんかどうだ!? 簡単な接客にお店の中の掃除なんかだつてさ! しかも3〜5人募集つて人数的にもピッタリじゃない!？」

「そ、それなら出来るかも・・・」

「え〜つと・・・ホンダウィング桜ヶ丘東。バイク屋さんかあ〜。なんか楽しそう」

「そこにしましょう!」

他の3人も賛同する。

「よしっ! それじゃあここに決まりだーっ!!」

部長の掛け声に続き3人が

「オーッ!!!」

と合わせる。こうして唯のギターを買うためのバイトがいよいよ始

まることになった。

そして土曜日AM9：20、バイト先になった場所へと唯、律、漣、ムギの4人は集合して歩いていた。

「私バイトするの始めてだし、なんかすごく楽しみだね」でも翔ちゃんも来ればよかったのに・・・」

唯が笑顔で言う。最後の方は若干口をとがらせていたが・・・。

「遊びに行くんじゃないんだぞ。他に用事があるんだから仕方ないだろっ!」

「でも緊張しますね」

漣が唯に忠告気味に言う。

「さあ!唯のギターを買うために2日間頑張るぞーッ!!」

「おーっ!!!」

律の掛け声に全員声を合わせる。

AM9：35、こちらは翔平サイド。

「じゃあ翔平くん、今日から2日間短期で4人アルバイトが入るけど君と同一年みたいだから宜しく頼むよ。もう4人とも制服に着替えて休憩室にいるからさ」

店長から履歴書が入っているであろう封筒を渡される。

「分かりました。．．．それじゃあ説明しに行って来ますわ」

「おう、頼む」

俺は封筒を片手に休憩室に向かった。

一方、休憩室では．．．

「わあゝ可愛いね！澪ちゃん似合ってるゝ」

「そ、そうかな．．．」

「ムギも似合ってるな」

「律ちゃんも素敵ですよ」

ファミレスなどでありそうな制服を着て4人ははしゃいでいた。

「おい！みんな席についとかないと．．．もう少しで店員くるぞ」

澪がいまだはしゃいでいる唯たちに声をかける。

「はあゝいい」

（さてと．．．やけに静かだな．．．）

コンコン．．．

俺はドアをノックしてドアを開ける。

「おはようございま〜す。．．．んっ．．．!？」

「おはようございま．．．って、しょーへー!？」

「あれっ!？翔ちゃんなんでここにいるの!？」

「もしかして黒田くんのバイト先ってここだったのか!？」

「あらあら．．．奇遇ですね〜」

俺はあわてて店長から渡された封筒をあけてみる。中には．．．そのとおりの名前の履歴書が入っている。

「まさかお前らとは．．．。びっくりした〜」

「翔ちゃんと一緒によかったよ」

唯が抱きついてくる。

「わ〜っ!？やめろっ!」

「知らない人ばかりだから心配だったけど知ってる人がいてよかったよ!」

「まあ．．．でも部長の私のほうが偉いんじゃない?」

漣が、ほっ．．．として言う。律は意味の分からないことを言っている。

ムギはというとそんなみんなを見てニコニコしている。

「まあ、とりあえずこの2日間お前らの担当をすることになったんでよろしく!」

そう言っていちおう担当なので連絡先が書いてある名刺をそれぞれに手渡す。

手渡された名刺を見て澪が聞く。

「黒田くんってアルバイトだよな？課長って書いてあるけど・・・」

「えっ！？翔ちゃん偉いの！？」

「なあなあ、それって部長よりえらいのか！？」

「いちおうバイトなんだけどね。まあそこは気にしないでいいからさ」

俺は中学生の時からアルバイトをしていて今ではアルバイトのリーダーと課長としてサービス関係については一通り任せられている。

「なんかいつもの翔ちゃんじゃないみたいだねー！！」

唯が目をキラキラさせながら言う。

「翔ちゃん言うな・・・もういいから仕事するぞ！？」

「・・・はーいつ」「」

今は春のイベントで店は大忙しだ。唯たちの仕事はお客さんに飲み物を出す簡単な接客と店内の掃除などである。店内は週末ということもあり込み合っている。

その中で俺はバイクの修理で入ってきたお客さんの接客をしていた。

「す、すいません・・・。よ、よろしければお飲み物がですか・・・？」

話をしているところに漣がおどしなからお客さんに聞いてくる人見知りで恥ずかしがりやの漣がここまで出来ているのはすごいと思う。

唯は人見知りとかはないものの、お客さんと仲良くなり逆に飴玉をもらったりとおかしなことになってるけど・・・。

ムギと律はあまり心配はしていなかった。ただムギが一回お客さんに出す飲み物を間違えて、休憩室でなっていたのが意外だった。

「うう・・・失敗しちゃった・・・。出来ると思ったのに・・・」

（こりやまた・・・ムギは一番心配してなかったんだけどな）

「なあ・・・ムギ、そんなに気にするなって！間違えることは俺もよくあるし・・・まあ元気だせって！」

ムギは顔をあげるが目が赤い。けっこう泣いていたんだろうか。

「ううん・・・気にしないで黒田くん。ありがとね」

そういつてムギがにつこり笑う。思えばムギとこうやって話をしたことはあまりない気がする。いつも大人っぽい感じだけどまだ子供みたいなところもあるんだなと心の中で思う。

「おう！頑張ろうぜ！」

この後はいつものムギにもどり明るく仕事をこなしていつていた。



そして時刻は12時を回ったので店長から休憩に入るよう言われたところに、

「翔ちゃ〜ん！一緒に昼食べようよ〜」

「早くはやく〜！」

唯と律が走ってきた。

「お前ら昼用意してきてんのか？」

「あつたりまえだろー　しょーへーの分もあるから早くー！」

2人について休憩室に行くとテーブルの上には色とりどりの弁当が広げられていた。

「お疲れ様です」

「あ、やつと来た」

ムギと漑が座っている。

しかしすごいおかずの種類があるのでびっくりした。

「すげえな・・・だれがこんなに作ってきたんだ？」

「え〜っとね、こっちがムギちゃんが作ってきたお弁当で、これは私が持ってきたんだよ」

えへん、と　唯が得意げに言うがどうみても唯が作ったものとは思えない。

「そんなこと言って憂が作ったんじゃないのか？」

(はうつ・・・!!)

「で・・・でもこのプチトマト私が盛り付けたんだもん！」

「唯って妹がいるのか!？」

律が聞いてくる。そしてみなでお弁当を食べたが、憂の作った料理は何度もおすそ分けで食べたことがあるので美味しいのは分かっていたが、ムギの料理もなかなかのものだった。

それからは、漣も接客に慣れたらしくおどおどすることも少なくなつたし、ムギも失敗することもなくなった。唯と律にいたつては特に心配していたが、以外にも律は真面目にそうじなどをしていた。

(裏では結構ぐちぐち言ってたらしいが) 唯にいたつては、

「えへへ、だ〜れだっ!？」

と、目隠しとかしてくるのでまいったもののなんとか2日間乗り切った。

そして2日間の日程を終え、俺は店長から預かった日当を4人に配っていた。

「1日あたり1人8000円で、2日で16000円。5人分足すとジャスト80000円だな」

俺の言葉に律も続ける。

「唯の持つてる50000円を足したら130000円か・・・。」

まだまだだな、よしまた他のバイトを探すかあ！」

すると今まで少しうつむいていた唯が、

「・・・やっぱりこれ、いいよ・・・」

「「「えっ?」「」」

「このお金はみんな、自分のために使つてよ」

そう言つて唯はみんなに返す。

「唯ちゃん・・・」

「やっぱり私、今買えるギターを買つよ」

「それでいいのか?唯」

「だって1日でも早く練習して、みんなと演奏したいもん」

そういつてにつこり笑つ。

（演奏したいか・・・まあ唯にとっては初めてやりたいって思えたことなんだもんな）

「だからまたギター見に行くのついてきてほしんだけど・・・」

申し訳なさそうに言う。

「おう!まかしとけつ!」

律が明るい笑顔で言うと、みんなも頷く。

「それじゃあまた明日ね」

「またね」

律と澪はバス、ムギは電車に乗るためここで解散となる。

「翔ちゃん帰ろうよ?」

「ああね・・・」

そいつって2人で歩き出す。しかしやっぱりさっきのことが気になる。

「なあ唯、ホントによかったのか? すごくあのギター気に入ってたんだろ?」

「ううん、でもやっぱりはやくみんなで演奏したいもん・・・エ  
アギター!! ジャカジャーン」

突然唯がエアギターを始めた。周りに通行人がいるのに・・・はあ・  
・・・。

「・・・それじゃおつかれ!」

周りの視線が痛すぎて俺は1人で盛り上がる唯をおいて歩く。

「あゝん、まってよ翔ちゃん!」

翌日月曜日。

学校が終わり音楽室・・・ではなく『10GIA』に唯のギターを見に来ていた。今回はもちろん俺もついてきている。店内に入り歩いていると、

「あっ・・・」

唯が立ち止まり一つのギターの前に座り込む。そのギターを見ると『ギブソン・レスポール』と札がかかっている。値段はそのとおり25万円だ。みんなの視線に気づき、

「あっ・・・エヘ・・・」

申し訳なさに笑う。

「ん・・・諦めなきゃいけないのはわかってるんだけど・・・」

唯は座り込んだまま動こうとしない。

「よっしゃ！またバイト・・・」

律が言いかけたときに、ムギが唯に聞く。

「唯ちゃん、このギターが欲しいの？」

「うん・・・」

「あっ・・・ちょっとまってて？」

「えっ？」

そう言うともギはレジにいる店員のもとに歩いていく。すこし不安になり俺もムギのあとにつづく。

「なにかするの？」

「ええ この間律ちゃんから値切る話を聞いて・・・私もそういうの一回やってみたかったの」

「はあ・・・」

お嬢様なので普通に懂れているというのは聞いていたがそこは懂れなくてもいいんじゃない・・・と思いながらもついていく。

「あの～すいません」

「はい、何でしょう？」

ギターを磨いていた店員がこっちを向き笑顔で答える。

「実はギターのお値段を負けてもらえないでしょうか？」

笑顔でさらっと言うムギもたいしたもんだが・・・店員が突然驚愕の表情を浮かべた。そして震える声で聞く。

「え、え、あの、ど、どのギターを・・・!？」

「え〜っと・・・」

そこでムギが困ったようにこつちを見てくる。ギターの名前が出てこないのだろう。

「ああ・・・25万円の『ギブソン・レスポール』です。ほら、あそこで女の子が座り込んでる・・・」

店員はムギをみてガクガクしながら電卓をたたく。

「えーっと・・・このくらいでいかがでしょう・・・?」

液晶には15万円と表示されている。いきなり10万円も値引きというのはすさまじい。普通ならこれで大満足だろうが・・・唯のギターの予算は5万円だ。

「もーひとこえー」

ムギが笑顔でさらに追い討ちをかける。

（すごい笑顔でとてつもなくえげつないこと言うな・・・）

店員は震える手で再び電卓を打つ。

「こ・・・これが限界です・・・?」

8万円と出ている。最初の値段と比べると実に17万円もの値引きだ。どうやらこれ以上は無理そんな感じである。

（まあ・・・しょうがないか・・・）

そこで俺は財布の中からカードを取り出し店員にわたす。

「じゃあ、むこうの女の子がキャッシュで5万は払うので・・・差額の3万はこれでお願ひします」

「えっ！？いいんですか!？」

ムギが驚いてこっちを見ている。

「まあ・・・2日間頑張ってくれたし・・・やっぱ唯も気に入ったギターの方がいいだろ？あ、でもこのことは唯には内緒な？」

「・・・はいっ」

そして唯たちのもとに戻る。

「唯ちゃん、そのギター5万円で売ってくれるって!」

「マジでっ!？」

「何!？何やったの!？」

向こうで律たちが驚きの声を上げている。一方、俺はげんなりしている店員の心のケアをしていた。

「まあ・・・これから楽器関係で必要なことはすべてこちらでお願いしますから・・・」

「は・・・はい・・・。ありがとうございます・・・」



ふとむこうを見ると唯がギターを持ってレジに歩いてきていた。

「やったあ これでみんなで演奏できるねっ！」

店を出て唯が嬉しそうに言う。

「やれやれ・・・」

「とにかくやつとスタートラインに立っただんな」

「頑張りましょうね」

「よしっ！！明日から桜高軽音部始動だー！！」

こうして本格的に部活動が始まることとなった。





ギターがほしいっ!! (後書き)

3話目はこれで終わりです。途中かなりオリジナルな話になっていきましたが最後は原作に近い形でおわりました。

では・・・次回をお楽しみにっ

## 練習開始！（前書き）

唯のギターがついに出来て軽音部の練習が本格的に始まるが・・・  
唯がギターのコードを覚えるのにまたまた翔平が苦勞する。

一方、唯はムギから翔平を好きなのか聞かれ、自分の中の翔平に対する意識が変わる！？

澪や律の性格もどんどん明らかになる4話目スタート

練習開始！

（ふあゝあ・・・放課後か・・・）

授業が終わった。今日はバイトが入ってない日なので部活に出なければならぬ。

「あら、唯。それってもしかしてギター？」

後ろで和が唯に聞いている。

「あつ、和ちゃん！違うよこれは『ギータ』だよ」

「はあ・・・なんなのそれ？」

話がかみ合わないのでも和はこっちを見てくる。

「まあ・・・ギターなんだけどね」

俺は苦笑いをしながら答える。そこに健太も入ってくる。

「いやいや、ギターだけにギータって・・・！ 翔平も名前つけていけばいいじゃん ほら、そのボールペン『ペン太』とか」

「あゝ・・・それは遠慮しとくわ・・・」

「なんで！？翔ちゃんも名前つけようよ」

「まあ・・・また今度な」

唯は、ぶうくと、ふくれる。

「あ、そくだ翔平。前出した入部届けに記入漏れがあったから生徒会室まで書きに来てもらえるかしら？」

「マジか……んじゃ行こうか」

俺は和に続いて立ち上がる。

「おしつ……それじゃあ俺も部活行きますか！じゃあな！」

「……ばいばい」「」

健太はサッカー部に入っている。自己紹介でもあったがサボる所はとことんサボるがそれなりの結果を残せる得な性格なのだ。サッカー部では1年でただ1人レギュラーでキーパーをしている。（なんでキーパーかというとあまり走らなくていいから）

「それじゃあ翔ちゃん。私先に部室行ってるね！　ばいばい和ちゃん」

「うん、また明日ね」

和も手を振る。唯はギターを背負って歩くもののヨロヨロしている。

「大丈夫かしら……」

「おーい、　転ぶなよー！」

「えへへ、大丈夫だよ」

振り返り笑顔で言い、またヨロヨロしながら歩いて教室を出て行った。

「さ、いきましょ。翔平も部活あるんでしょ？」

「ああ・・・そうね」

和について生徒会室に向かうことになった。

「んじゃあ・・・これでいいかな？」

「うん。これで大丈夫ね」

生徒会室に行つて記入漏れがあつた箇所を訂正する。

「じゃあ部活行くか・・・」

「頑張つてね。また明日」

「おう。じゃあね」

和は生徒会の業務で忙しいのだろう。机の上にはたくさんの書類がならんでいる。

生徒会室を出て校庭の部活動を遠目に見ながら3階の音楽室まで上がっていった。そしてドアノブに手をかけた瞬間、

「ちゃらーららーちゃらららー」

（んっ!?!）



あの有名なラーメンのイメージソングが聞こえてくる。ギターの音からして弾いているのは唯だと思うが……。ドアを開けると唯がギターを持ち立っていて、他の3人はそれを席について眺めていた。まあ机の上には紅茶とモンブランが並んでいるのでお茶をしていたのは間違いないが……。

「おっ！しょーへー遅かったな！」

「今お茶淹れますね」

「ああ……。ありがとね」

「あつ！翔ちゃん！かつこいいでしょ」

唯がギター（ギータ）を構えて笑顔で聞いてくる。

「まあ……。ギター持つてると感じ出るな。それよりさっきのは唯が弾いたのか？」

「うんっ そうだよ！」

また唯は同じ音を出す。初心者にしては不思議だが全く同じだ。まあその音しか出せないんだろうけど。

「唯、ギター買ってから家で練習してるの？」

「家じゃほったらかしてるんじゃないの？」

「そ……。そんなことないよっ！！」

漣と律が交互に唯に聞く。律にいたっては両手を頭の裏で組んでふ

んぞり返り言う。

「そついや、唯の家からギターの音ぜんぜん聞こえないけどな」

俺が言うと、唯は自信満々に返す。

「すごい大事にしてるんだよ？ホコリがついたら取って、鏡の前でポーズとったり・・・添い寝したり服着せてみたり写真撮ったり・・・ボーツと眺めて1日終わることもしょちゅう・・・」

最後のほうは恥ずかしそうに両手を頬にあてて首をふりふりする。それを見てめずらしく俺と律の言葉がかぶる。

「いや弾けよ」

「いやゝ、ギターってピカピカしてるからなんか触るの怖くて・・・」

唯はギター太をつつきながら言う。

「あゝ分かる分かる、そういえばギターのフィルム剥がしてないもんね・・・もしかして携帯の液晶のフィルムも剥がしてないんじゃないの？」

漑が言う。しかし携帯の画面まで見ているとは以外に観察力がすごいな・・・。

「すごいっ！何で分かったの！？」

唯はすごく驚いたように叫ぶ。漑はどう返していいかわからずため

息をつく。

「そいやーっ!!」

「あぁーっ!?!」

ギターのフィルムを剥がしてないと知ってそわそわしていた律が、唯の隙についてギー太のフィルムをビリビリはがす。唯は悲鳴をあげ、半泣きになりふらふらと部屋の隅に行き座り込む。

(ずうーん・・・)

唯の一带に黒い負のオーラが漂っている。

「いまのは100%お前が悪い」

「そうだぞ律、謝れ」

翔平と澪の攻撃が律に当たる。とくに普段大抵のことは気にしない翔平が珍しく怒ったので、律はそうとう動揺している。

「ご、ごめん唯!! ほんの出来心で・・・!!」

律が両手をバシッと合わせ謝るものの唯はぴくりともしない。困った様子で他の3人が翔平を見る。やはり幼なじみということもあり唯の扱い方は一番知ってるはずだという思いがあるのだろうか。

「しょうがないな・・・」

ため息をつき言う。

「唯、今晚ギターの練習付き合ってやるから機嫌直せって」

「……………」

「そ…そんなギターの練習で機嫌直るわけ……………」

「えっ！？翔ちゃんん家いつでもいいのっ！？」

途端に唯が目を輝かせながらこっちに走ってくる。もはやさっきまでの負のオーラは全く感じられない。

「…………直ったーっ！？」

「ねえねえ ホントに行ってもいいの！？」

「はいはい…………ギターの練習だからな？」

漣が驚いているあいだにも唯のテンションはどんどん上がっていく。そのあいだ、ムギが疑問に思っていたのか翔平に尋ねる。

「さっきも唯ちゃんの家からギターの音が聞こえないとか言ってたけど…………黒田くんの家は唯ちゃんん家から近いの？」

「ああ、近いも何もすぐ隣だしね」

「えっ！？そうなのか？じゃあ毎晩唯のギターの練習が出来るな！」

律がサムズアップをしながら言ってくる。

「あゝ無理無理。唯がくると部屋散らかっちゃうから」

「え？なんで？」

次は澪が聞いてくる。

「俺のベットの上でダイブしたりゴロゴロしたり・・・本読んだらそのままだし・・・」

「だって・・・翔ちゃんのベットうちのより柔らかいんだよっ！本も面白いのいっぱいあるし」

唯はなぜか自慢げに言う。

「へっ、なるほど」

律とムギは何でか知らないがニヤニヤしているし澪はすこし顔を赤くして下を向いている。

唯はそこで律に向かい、

「やっぱりギー太は弾くものだし・・・ただ大事にしているだけじゃあギー太もかわいそうだね・・・ありがとう律ちゃん！私やる気出てきたよ！」

ぐっと両手をグーにしてなぜか律にお礼を言う。

「そ、そうか！？唯がギターを練習するきっかけになればと思ったんだ！さすが私・・・」

「調子にのるな！」（ドスッ・・・）

漣の肘うちが律にクリーンヒットする。律は痛そうにしている。

「そつえば・・・どうやってらライブみたいな音がだせるのかなあ？」

唯がふと気になったように聞いてくる。

「ああ、アンプに繋いだら出るよ」

「前に黒田君がギター弾いたとき使ってただろ。使ってみる？」

漣がアンプをよいしょと持ってくる。早速唯はギターを繋ぎあのラ―メンソングを奏でる。

「おおー かつこいいー!!・・・でもまだこれしか弾けないけど・・・」

最初は感動したものの最後は残念そうな表情を見せる。

「アンプで音を出すのはもっと上手くなってからだね・・・」

唯はそういつとアンプからコードを抜こうとひっぱりだした。

(やばい・・・!?)

翔平はすばやく両耳をふさぐ。それを見て律とムギも耳をふさぐ。そして響く漣の声。

「唯!! 危ないっ!!」

「ほえ？」

その瞬間コードが抜ける・・・。

(ボンッ!!!!)

爆音が流れ唯はこてつと倒れる。漑は両耳をふさぎながら、

「ボ、ポリュームを下げる前にコードを抜くところなるんだ・・・」

「み、漑ちゃん・・・もつと早く言って・・・み、耳がキーンって・・・」

正面で爆音を聞いた唯は耳を押さえながら言う。

ようやく練習が始まった。

翔平もギターを出し調整をはじめ。漑、律、ムギも自分の楽器の準備をしている。その中で唯が、

「そついえばギターの弦って怖いよね。細くて固いから指切っちゃいそう・・・」

「そつだぜ!?!?! 気をつけないと指がスパーツと切れて血がドバーツとー!?!?!」

律が顔をニヤニヤさせながら手振りを交えて言う。

(またまた・・・何を言うかと思えば・・・)

俺は心の中で思ったものの口には出さない。

「きゃーっ!!」

「!？」

唯ではなく澪が悲鳴を上げて耳をおさえぶる震えている。

「あれ・・・？なんで唯ではなく澪が悲鳴を・・・？」

「い・・・痛い話はだめなんだ・・・」

言った本人の律が驚いている。唯はとことこ澪のとなりに歩いていき、

「大丈夫だよ澪ちゃん。ほら・・・ほんとに切れた訳じゃないから」

唯が出した手を見て切れてないのを確認すると澪はコホンッと咳をして、

「まあ練習していくうちに指が硬くなってくるから切れたりするとはなくなるよ。ほら、私はベースだけど・・・」

澪は自分の手を唯の前に差し出す。唯は わあゝ っと顔をキラキラさせながら澪の指を触る。

「わあゝ・・・ふにふにだあゝ・・・」

そうとうその感触が気に入ったのか触り続ける。さすがに恥ずかしくなってきたのか顔を赤くした澪が言う。

「あの・・・もついいかな・・・」



「もう少しだけ……！」

「もう練習はじめようぜ」

そこで翔平が手をパンパンたたき言う。こうなったときの唯はなかなか次の事を始められないことを知っているのだ。唯もようやく遷の指を手放しギター太を構えた。

「あ、そうだ唯、ギター始めるんだったらまずコード覚えないと。この本あげる」

遷がカバンから1冊の本を取り出して唯に手渡す。

「あ、ありがとう遷ちゃん」

お礼を言って唯がパラパラと本をめくる。遷がカバンから取り出した本はギターの入門書だが……タイトルはすごい。

『サルでも分かるギターコード』

「すごい本だな……」

俺はタイトルを見て苦笑いをしてしまった。

「唯のために買ったんだ」

「へえ……」

遷は嬉しそうに言うが、

（これで分からなかったら傷つくわなあ・・・）

と、俺は心の中で思う。そんなことを思っているうちに本をパラパラめくっていた唯の頭から、シューシュー　煙が上がり始めた。そして、申し訳なさそうに言う。

「あ・・・あの・・・まずは楽譜の読み方から教えてください・・・」

「「そこからあー!?」」

漣と俺は思わず声が出てしまう。

「まあ・・・唯の教育係はしょーへーだからな。頼むぞ、しょーへー」

律は呆れながらも腕組みをして俺に言ってくる。やはり唯の扱い方に慣れているところが入っているのだろうか。

「ええ!?俺が!?!」

「いいじゃん別に　家隣だしさ!」

「いや!関係ないだろっ!?!」

「よろしくお願いします!!翔ちゃん先生!!」

「ええっ!?!」

ここで律との言い合いが始まる・・・が、途中で唯が敬礼をして俺にお願いしてきた。パツと見た感じ、いつもの唯だがとてもやる気が感じられる気がした。

（そういえば、前にはやくみんなで演奏したいと言ってたな・・・）

唯の熱意に負けて翔平が折れる。いままで涙目で折れたことはたくさんあるが熱意で折れたのはこれが初めてだと思う。

「わかったよ。俺が教えたらー」

「ありがとう！翔ちゃん！」

「唯ちゃん頑張ってたね」

「やれやれ・・・」

唯は笑顔でとても嬉しそうにお礼を言うてくる。ムギも唯にエールを送り、澪はホッしたような様子の笑顔を見せている。さつきとはうって変わり室内の空気が明るくなった。こうして俺は唯のギター教育係になったのである。

こうしてこの日の部活はお開きとなった。

その日の帰り道。途中の交差点で澪と律は帰り道がそれる。

「それじゃあ唯がんばれよー！ばいばい」

「「ばいばい」」

次の十字路でムギも駅に向かうのでお別れとなる。

「じゃあムギちゃん、また明日ね」  
「おつかれ」

唯と翔平がお別れの挨拶をするとムギも笑顔で返す。しかしそこで翔平の方をチラッと見て、

「あ・・・唯ちゃんちょっと・・・？」

「？」

翔平にはなんだかさっぱり分からない。唯も不思議そうな感じでムギのところへ行く。

「どうしたのムギちゃん？」

「唯ちゃん。ギターの練習もだけど頑張ってね！」

笑顔でムギは両手をグーにして唯に言う。

「うんっ！！練習頑張るよ」

唯は笑顔で返す。

「ふふふ 唯ちゃんって黒田君のこと好きなんですよ？」

「へ、へ・・・ど、どうしてムギちゃん！？」

ムギの言葉に唯は顔を赤くして返す。突然の言葉に動揺しまくっている唯と对象的に、にこにこしているムギ。

「だって普段の唯ちゃんみてたら黒田くんのこと好きなのかなって」

「そ、それは……え……と……／＼／」

「頑張つてね唯ちゃん 応援してるから！」

ここでムギは翔平のほうを見る。

「それじゃあまた明日ね ばいばい、唯ちゃん、黒田くん！」

「「ばいばい」」

ムギは駅に向かって走っていった。

「唯どした？なんか顔赤くない？」

翔平は唯とムギが向こうで話しているところを見てたが、途中で唯が顔を真っ赤にして慌てたす場面では携帯をつついていたので見ていない。もちろんこそこそ話なので話の内容はもちろん知らない。

「な、な、なんでもないよ!？」

唯は相変わらず顔を赤くしてあわてたように返す。

（へんなの……）

心の中で翔平は思う。

こうして唯と並んで家まで歩いていく。唯は『サルでも分かるギタ

「コード」を見ながらコードを覚えている。

「ねえねえ翔ちゃん、Emってこうでいいの？」

「そんなのみたことないよ！？Emはこうだろ？」

唯は本を見ながらにもかかわらず見たこともないコードを覚えていく。

（やれやれ・・・大変だ・・・）

そうこうしているうちに家の前まで帰ってきていた。帰りながらだいたいのコードを教えていったがはたしてホントに唯が覚えたかは怪しいが・・・。

「それじゃあまた明日な」

俺はいつも通りの挨拶をして家のドアをあけようとしたが、

「あっ！そうだ翔ちゃん！」

「どした？」

「今日ギター教えてくれるんだよねっ！？」

確かに唯の機嫌をなおすためにそういう約束をしていた。たださつきも言ったとおり唯が来ると部屋が散らかってしまうのでそこは何とかして欲しい。

「ああ、まあ落ち着いたら来ていいよ」

「やったー　よろしくです、翔ちゃん先生！」

唯はまた敬礼をして　じゃあまたあとでね　と、いいながら家に入っていた。

（さてと・・・俺も帰ろ・・・）

唯が帰宅したのを見届けて翔平も自宅のドアをあける。平沢家にはもう電気が点いていたので憂がもう帰っているようだ。

「ただいまー・・・」

「おかえりーお兄ちゃん！今日お父さんもお母さんも遅くなるらしいから私ご飯作ってあるから」

「おっ、サンキュー」

妹の晴香が自慢げに言う。ちなみに作ってあるのはカレーだったがすごく美味しい。

カレーを頂きながら晴香に言う。

「あ、そうそう。今日夜唯がギターの練習しにくるから」

「えっ、唯さんが来るんだー　へーっ」

それを聞いてニヤニヤしはじめの晴香。

「なに？どうかした？」

「いゝや！なんでもありません ご馳走様でした」

俺の質問に対して相変わらずニヤニヤしながら受け流し食器を下げていく。律やムギ、晴香もなんか変なところで勘違いをしているのはなかるうか……。

その後は2階の自室で、少し前に中間テストの発表があったので軽く勉強をしていた。そこで、

『ピンポン』

ベルが鳴る。時計を見ると7時半を回ったところだった。

唯が来たか……翔平はノートを閉じて机に置きギターの用意を始めた。下では晴香と唯の話し声が聞こえる。そうこうしているうちに階段をトタトタ上がってくる足音がするが……

（ドスンッ！！） 「ひゃう!？」

なんか大きな音がして唯の悲鳴も聞こえる。俺はびっくりして部屋のドアを開けた。1階からも晴香がびっくりして声をあげている。

「なんだ！？なんかあった？」

「唯さん大丈夫ですか!？」

「えゝん、転んじやつたよ……」

「またかよ……。足元よく見ろよ……。まあギターには傷は入ってなさそうだしよかったな」

唯はギターを担いでいたがギターには被害はなさそうだ。普段から



唯はこの階段でよく転んでいるので俺は呆れてながらも、転んでから目をウルウルさせている唯を引っ張って起こす。

「ほらっ、しっかりしろって」

「えへへ、ありがとう翔ちゃん」

唯はお恥ずかしいと、いった感じの笑顔を浮かべるが・・・

（全くその通りだな・・・）

唯を部屋に入れてギターの練習が始まると思いきや・・・

「わっ！っ！どっぶっん！っ！」

「うおい！？やめろって！！」

俺の部屋に入った瞬間に唯がベツトに飛び込み転がり始める。いつものことだけど相変わらず唯は飽きずにとっても笑顔でごろごろしている。

「柔らかい　ごろごろごろ」

「ほらほら・・・ギターの練習すんだろ？」

まあいつものことだと分かっていたので予想はしていたけどさ・・・。翔平は、手を叩いてベツトでくつろいでいる唯に練習をするように促した。いつもの唯なら　もう少しだけ　と駄々をこねるのだが今日は少し違った。

「はいっ！お願いします、翔ちゃん先生！」

素直にいうことを聞きギターを構えた。

（やっぱり自分のやりたいことだったら頑張るな。唯が初めてやりたいて思ったことだもんな・・・）

俺は以外な唯の反応に少し驚いたものの、まあ本人がやる気を出しているのは良いことだし、こっちの方がありがたい。

「おし・・・やるか。じゃあまずE mからA mって一通りしてみよう」

「はい！翔ちゃん先生！」

こうして練習が始まる。途中、晴香が紅茶とお菓子を持ってきてくれたので休憩をはさみながら続ける。

しばらく練習をしてある程度唯が慣れたところで次のステップに進む。

「よし、じゃあこれ弾いてみようか？今教えてやったコードだけで弾けるからしてみ」

俺は即席で作った楽譜を差し出す。

「はい！！」

唯はまた敬礼をして楽譜を受け取りギター太を構えて弾き始める。

・・・ジャカジャカ・・・ 「あれっ!？」

途中で詰まる。唯は おかしいな、といった感じでギターと楽譜を見るがやつぱり分からない様子で、

「翔ちゃん先生・・・」

なんか申し訳なさそうな感じで聞いてくる。

(やれやれ・・・)

「Amはさっきやったろ・・・。覚えてるか？」

「ううん・・・忘れた」

「だろうな・・・ほらAmはこうだろ？」

「おお・・・さすが翔ちゃん先生・・・」

翔平は唯のギターを借りて実演をしてみせる。このあたりが幼なじみだから扱い方がよく分かっているという所だろうか。普通の人なら怒るか呆れるとこだが、翔平は唯が1回で覚えられるとは思っていないので最初から気長にするつもりだったのだ。

「こうだよね・・・？」

再び唯がAmを弾く。

「そうそう、おし・・・もう1回やってみよう」

「うんっ！」

俺の言葉に再び気合をいれた唯がギターを構え言う。

・・・ジャカジャカジャカ・・・ジャン

まだ上手いとは言えないけどさっき間違えたところも出来るようになってる。

「できてるできてる！それ忘れるなよ！」

「やった！できたよ翔ちゃん」

唯はよっぽど嬉しいのか部屋の中をピョンピョンはしゃいでいる。

（やっぱり・・・翔ちゃん優しいし・・・私、翔ちゃんのこと好きなのかな・・・？）

帰り道にムギからいわれた言葉を思い出し唯は、はしゃぎながらも照れていた。

「ほらほら・・・次はこつちするぞ」

翔平が次の楽譜をピラピラさせながらはしゃぐ唯を呼ぶ。

（れ、練習しなきゃ・・・）「は、はい！」

首をブンブンふりながらあわてた感じで唯は返事をする。ふと唯の目に、机の上の翔平の数学のノートが入る。

「あれ・・・翔ちゃん家でも勉強するんだね？」

「まあ・・・もうすぐ中間テストだしな」

「へっ・・・えっ！？テスト！？」

唯がとても驚いた様子で叫ぶ。とっさにあげた右手はAmのコードのポジションになっているので今度は忘れてなさそうだ。

「知らなかったのか？いつでも唯、中学の時からテスト勉強なんかしてなかったろ？」

「そっか・・・なら大丈夫だね」

「いや・・・大丈夫じゃないとおもっけど・・・」

笑顔でピースする唯に呆れて返す。唯には勉強するように注意をしてこの日の練習は終わった。

「それじゃあ、翔ちゃん今日はありがとうね！」

「まあ家でも練習しろよ」

「うんっ！私頑張るよ」

ギターが弾けるようになったのがよっぽど嬉しかったらしく、唯はあふれんばかりの笑顔で言う。

「それじゃ・・・おやすみ」

「おやすみ 翔ちゃん！」

唯は家に帰り自分の部屋で明日の準備をしていたが、帰り道のムギの言葉が頭の中に浮かんでくる。

（翔ちゃんのこと好きとか今まで考えたことなかったけど・・・好きなのかな・・・？）

カバンに教科書を入れる手を止めて唯は考えていた。

（でもでも・・・なんでムギちゃんに言われてから翔ちゃんと話すのにドキドキするんだろ・・・なんでだろ・・・？）

「は、はやく支度して寝なきゃ・・・」

唯は首をぶんぶん振ってとまっていた手を動かし始めた。



## 中間テストと追試！（前書き）

いよいよ高校に入り初めてのテストが始まる・・・が再びテストで一波乱おきる。

更新が遅れてしまいましたが5話目になります。

アニメの流れで基本は構成されていますが、所々オリジナルになっていますのでおかしくなっているとあるかもしれませんがあおきになさらずに

それでは5話目、スタート！



## 中間テストと追試！

「それでは、始め」

カリカリカリ・・・・・・・・・・

高校生になって始めての中間テストが始まった。みんな答案用紙に一斉に書き込みを始め辺りはシーンと静寂に包まれているが・・・2箇所だけそうではないところがあった。

まず1つは、俺の斜め後ろの席にいる唯である。ペンで頭をついたりしながら、

「うゝん・・・・・・・・ふゝん・・・・・・・・」

とうなっている。

（どうせ結局ギターの練習しかしてなかったんだろうな）

もう一箇所は健太の席で、しきりにつぶやきが聞こえる。

「おいおい・・・・・・・・何語だこれ・・・・・・・・」

「この木になっている果物はなんですか・・・・・・・・？ オレンジレンジです・・・・・・・・」

とても小さい声で呟いているが健太の席の周りにはくすくす笑っている。まあもともと健太もウケを狙って言っているのであるが・・・・

「はい、終わり！答案を後ろから集めて」

ようやくテストが終わり、みんなやれやれといった感じでザワザワお話を始める。

「翔ちゃ〜ん・・・全然わかんなかったよ〜！」

唯が目をウルウルさせながら俺の席に来る。そりゃあ勉強してなかったら分かんないだろうけど・・・。

「どうせギターの練習しかしてなかったんだろ？」

翔平は頬づえをついて返す。翔平の全てを見通した一言に、唯は痛いところをつかれたのか頭をかきながら笑う。

「あはは〜・・・いやあ〜勉強しようとは思ったんだよ？でもなんか試験期間中って勉強以外のことに集中出来たりしない？」

「そうそう その通り！なんか勉強する気が全く起きないんだよね・・・ってか教科書とか全部学校置いたままだし」

と、話の途中で健太が入ってくる。確かに健太は授業中もノートを書く姿勢で一つも動かず寝てるし、前々からクラスの中で置き勉強惑が出ていた。

「やっぱお前置き勉強してたんだ・・・」

「健太君、勉強しなくちゃだめだよ！」

翔平は呆れながら、唯は自分の事を棚にあげ健太に説教を始める。もともと健太はまったくこたえてないけどな。そこに和も入ってた。

「健太の周りの席の子が言ってたわよ。とてもおもしろかったって・  
・テスト中くらい真面目にしなさいよ」

すこしキレ気味の和からの説教が始まる。唯なら確実に泣き出すくらいレベルだが、健太には全く効いていない。

「まあまあ・・・俺だってやるときはやるって それより和は出来たのか？」

「わたしは・・・まあまずまずかしら」

和は自信ありげに言う。まずまずといっているが・・・あの顔は全くそうは思っていない。

（だてに眼鏡かけてるわけじゃないな・・・）

俺は心のなかで思っていた。もちろん口には出さないけど・・・。

次の日。テストも終わり続々とテストが返ってきていた。出席番号順に呼ばれて教壇に用紙をもらいに行くといった形でみんな取りに行っている。

「黒田・・・」

「はい・・・」

俺は答案をもらい席に帰る途中に視線を感じその方向を見ると、唯が席についてキラキラした目でこっちを見ている。おそらく点数が知りたいんだろうけど教えねーよ・・・。

「平沢・・・」

「は、はいっ！」

唯は緊張した様子で前に行き答案を受け取る。・・・が点数をみた瞬間目が点になりふらふらと自分の席に戻る。

（そうとう悪いんだろーな・・・）

そう思っているうちに和も呼ばれて前で答案をもらう。その点数をみて和は満足そうな表情で席にもどる。

（さすが・・・俺もコンタクトじゃなくて眼鏡にしようかな・・・）

「山崎・・・」

「はいっす！」

健太が呼ばれ前に出る。

「お前・・・すごいな満点だぞ！」

と、先生が驚いた様子で健太に答案を返す。その瞬間に教室中がザ

ワザワとなる・・・もちろん、授業中ずっと寝てるし、テスト中意味の分からないことばかりいつていた健太が満点なのは、なんで！？ となるだろう。

「いやいや・・・けっこう分かんなかったんだけど鉛筆に番号振って転がしたらそうになりました」

先生相手にカンニングを疑われそうな言葉をぺらぺら言う健太の度胸はすごい。前にもあった通り健太サボってもなぜかそれなりの結果を出せる得な性格なのだ。

たしかにテスト中の先生の監視網はすごかったのでカンニングはもちろん無理であるが・・・。

こうして次々テストが返ってきてあつという間に放課後になる。唯は先生に呼ばれ職員室に行っているの俺は一人で音楽室に向かっていた。そして音楽室のドアを開けると、

「おー！ やつと来たかしよーへー」

「お茶淹れますね」

「あれ？ 唯はどうした？」

律とムギはいつも通りの挨拶をしてくる中、澪がいつも翔平と一緒に入ってくる唯の姿が見えないのに気づいた。

「ああ、何か先生に呼ばれて職員室に行ってるよ」

「えっ・・・唯なんかあつたのかな？」

「さあな・・・まあその内来るだろ」

この後4人でそうこう話が続く。

「いやゝ！しかしやつとテストが終わって一段落だなゝ！」

「ホントホント　なんか高校入って急に難しくなりましたよねゝ」

律は大きく伸びをしながらリラックスしている様子。その時、音楽室のドアが弱弱しく開きふらふらしながら唯が入ってくる。

「おつ　唯おそ．．．．」

「まだ大変そうなのが一人いるけど．．．」

律が唯に声をかけるも途中で詰まる。漣もあまりの唯の負のオーラに圧倒されている。

なんと言ったらいいか分からない表情をしながら、唯は震える手でテスト用紙をこっちに見せてきた。

「ふっふっふ．．．．クラスでただ1人．．．追試だそうです．．．」

唯が手にしているテスト用紙の点数は12点だった。完璧に赤点である。

「うわっ．．．．」

「ほっ、ほら．．．今回は勉強の仕方が悪かったんじゃないの？」

「そうだって！！やり方かえたらきつと合格できるって！」

他の3人が一斉に唯を励まし始める。それに対し唯は、

「いやゝゝ、勉強はまったくしてなかったんだけどね」

「私の言った励ましの言葉を返せ、コノヤロー!!」

「やっぱりな……」

律が立ち上がり叫ぶ。漣はやれやれといった感じでムギも困り果てている。

「なんかテスト勉強中って他の事に集中出来たりしない？」

「あゝ……たしかに部屋の掃除とかはかどるし」

唯が言い訳みたいなことを言い始め、律もそれに流され始めたところで唯に聞く。

「たしか追試になったら部活動禁止とかじゃなかったっけ？」

「うん。追試に合格するまでは禁止だって」

翔平の質問と、それに対する唯の回答に漣をはじめみんな愕然としている。

「やっぱりな……」

「うちの学校ってそんなに厳しかったのか……」

「じ、じゃあここにいるのも見つかったらやばいんじゃない?」

たいていのことには動じない翔平は落ち着いた様子でいるが、他の3人は焦っている。

「大丈夫だよ お菓子食べに来てるだけだし」

唯は席について机の上に置いてあるクッキーを美味しそうに食べている。その顔にはさつきまでの落ち込みようは全く感じられない。

「そうかゝなら大丈夫だなゝゝゝ。ってんなわけあるかゝ!!」

「律ちゃんゝゝゝギブギブゝゝゝ」

ノリツッコミをしながら律が唯にチョコスリーパーをかまし、唯は苦しそうに律の腕をペチペチ叩いて降参している。

「とにかく! 追試は1週間後だから唯はそれまで部活動は禁止! 家でしっかり勉強すること!」

「ええゝゝゝ。漑ちゃんなんか怖いゝゝゝ。翔ちゃん」

めずらしく漑が怒る。怒られた唯は涙目になり俺に助けを求めている。

「やゝれやれゝゝゝ。だから勉強しとけって言っただろ?」

呆れて翔平が返す。ところがここで唯がみんなに質問を始める。

「じゃあそんなに言う律ちゃんは何点だったのさゝ?」

「ゝゝゝ。わたし? 私はほらゝゝゝ」

突然の唯からの反撃に律は戸惑いながらもテスト用紙を唯に手渡す。点数は87点だった。

「私くらいになるとこのくらいどうってことないのよゝ おゝほっほっほ!」



「87点・・・こんなの律ちゃんのキャラじゃないよ・・・」

自信満々で大笑いする律に、唯はがっかりした表情。

「テスト前日に泣きついてきたのは何処の誰だか・・・？」

「み、漣！　　しーっ！！」

漣の言葉に律が焦りだす。その様子を見て安心したのか唯は笑顔で律の両肩を掴み嬉しそうに、

「それでこそ律ちゃんだよ！！」

「12点のお前に言われたくないわーい！！」

とても失礼なことを言い、それに対し律も返す。

「ところで漣ちゃんとムギちゃんは何点だったの？」

「わたしは・・・ほら」

「はい、どうぞ」

唯に2人はテストを渡す。漣が92点でムギは89点だった。

「ひゃあ・・・2人ともすごいね・・・じゃあ98点の翔ちゃんが一番だね」

唯はなぜかもう一枚翔平もテスト用紙を持っている。

「ん？なんで唯がおれのテスト持つてんだ？」

カバンをみるとチャックが開いている。勝手に出したなコイツ……。

その日はなんだかんだ言いながらもお茶会だけで部活は終わった。

次の日から唯は授業が終わるとすぐ家に帰るようになった。ちなみに追試本番まで残り4日である。

「唯ちゃんと勉強できてるかな……？もし追試合格できなかったらどうしよう……」

部室の中を落ち着かないような感じで歩き回りながら漣が言う。

「大丈夫だつて！唯だつてやるときはやるよ……多分」

「多分してないな……今頃ゴロゴロしてんじゃないの」

律は最初は自信ありげに返すが途中から自信がなくなったのか声が小さくなる。律と同時に翔平もギターをつつきながら返す。

翔平の言葉に他の3人の頭に漫画を読みながらゴロゴロしている唯の姿が浮かんでくる。

「……なんか心配になつてきた……」

「まあ追試たつて同じ問題だろうから最悪丸暗記でなんとかなるんじゃない？」

3人は落ち着きがなくなってきたなか翔平だけは落ち着いている。

「……黒田君、唯のこと心配じゃないのかな？」

「まさか・・・しょーへーと唯がケンカしてるとか？」

あまりの翔平の落ち着きぶりに3人は顔をあわせコソコソ話をする。そんなことを3人が話していることも知らずこの日の部活は終わった。

次の日から2日間はバイトが入っていたため俺は授業が終わるとすぐに帰る。

「じゃあ翔ちゃん、また明日ね」

「じゃあな・・・勉強ちゃんとしろよ」

「分かってるって」

唯とは学校を出てすぐ方向が違うので分かれることになる。翔平の言葉に笑顔で唯は返すものはたして出来るのか。

次の日。いよいよ明日が追試本番である。

「・・・というわけで勉強教えて！！零ちゃん！！」

「えっ！？メール送ったときやってる言ってたじゃん！？」

「ギー太の練習とかしてたら出来なかった・・・」

結局1人で勉強できなかった唯が部室でみんなに泣きついていた。3人は困り果ててどうしようかと考えていると音楽室のドアが開き翔平が入ってくる。

「ちーす・・・あれ、どした？」

「翔ちゃん・・・勉強できなかった・・・」

「やれやれ・・・やっぱりな・・・」

唯は目を潤ませて俺に報告する。まあこのところ毎日唯の家からギターの音が聞こえていたので、ある程度分かっていたことだけど俺は呆れる。

「1人じゃあ勉強できなかったみたいなの・・・。追試は明日なのに・・・」

ムギが困った様子で翔平に言う。ここで澪が急に声をあげる。

「よしっ！！それじゃあ今日は唯の追試の勉強会をしようか！」

「そうしましょう」

「おっ！いいねそれ！唯も澪の教えてもらえば確実に合格点取れるぞ！だって澪上手いんだぜ・・・。一夜漬の術教えるの！」

「おーい！？印象悪いな！普通に教えるよ！！」

律の言葉に最初は照れてた澪だが、最後の方は焦って否定する。

「みんな・・・ありがとうっ！」

唯はすごく嬉しそうに澪の手をとってお礼を言っている。それに対して澪は若干照れているみたいだけど。その後の話し合いで勉強会は唯の家で開催されることになった。

「よしっ！それじゃあ勉強しにいくかー」

「っ「おーっ！！！」」

律の掛け声に俺以外の3人が合わせる。

「ほらっ！しよーへーも行くぞっ！！」

「えー・・・俺もなの？」

「当たり前だろ！？何気にこの中で一番点数高いんだし」

「翔ちゃんもうちにおいでよ」

途中から話には入ってなかったけどどうやら俺も人数にカウントされていたらしい。この後俺は最後の抵抗を試みたものの、結局参加することになった。

学校を出た一行は平沢家に来ていた。

「お姉ちゃんお帰り」 あっ翔平さんも・・・お友達ですか？」

「うん 軽音部の友達だよ」

玄関に入ると奥から唯の妹の憂が出てきて、あいさつをする。漣と律とムギは初対面なわけで少し戸惑っているようだ・・・が、そこはさすが憂、臨機応変に対応する。

「始めまして。妹の憂です。いつも姉がお世話になってます」

「出来た子だー!!」

その礼儀正しさに漣と律が驚く。ムギも笑顔で返す。

「さあさあ、私の部屋だよ」

唯の部屋に案内され入ると・・・まあとにかくぬいぐるみがたくさんある。

（最後に唯の部屋に入ったのいつだったかな？）

今年の始めらへんに1回お邪魔した気がするが、こんなにぬいぐるみはなかったと思う。

俺がそんなこと考えてるうちに4人はテーブルをかこみ教科書を広げていた。

「ほら、しょーへーも座った座った!!」

「はいよ・・・」

ここまでできてしまったらもう参加するしかない。俺もテーブルにくく。ここから漣を中心に唯の勉強が始まる。

「よしっ！それじゃあ時間もないから集中していこう！じゃあまず教科書の・・・」

「あゝ・・・」

「ひゃあ!？」

さあ始めようかといった感じの漑の後ろで、遠慮した感じで憂が声をかける。突然後ろから声を掛けられた漑はビックリしているが。

「どうしたの？憂」

唯が聞くと憂はもっていた御盆からお茶とお菓子を差し出し、

「皆さん、よろしければお茶をどうぞ。買い置きのお菓子で申し訳ないんですが・・・」

（ホントに出来た子だー！！）

漑と律が心の中でまた叫ぶ。

「憂ちゃんは今中学生なの？」

「はい、中三です」

今度はムギが憂に話しかけ、それに対し憂も笑顔で返す。憂の返事をきいた律も話しに入ってくる。

「じゃあ来年高校入試かー！どこの高校受けるの！？」

「えーっと・・・お姉ちゃんと翔平さんのいる桜ヶ丘高校を受けようと思ってます」

「おお！！じゃあ是非とも軽音部に・・・」

「律！まだ１年も先のことだろ」

憂が同じ高校を受けると聞いた律がさっそく勧誘を始める。漣が律に呆れたように注意し、憂はただただ苦笑いをしていた。その後、憂は下でご飯を作っていたのだろっか、失礼します と退室した。

「いやゝ・・・何て言うか・・・同じ姉妹でこんなにも違うものかね？しょーへー？」

憂が退室した後、律が唯を眺めながら突然話を振ってくる。

「ああ、こんなに違うもんじゃないかな」

「えっ？律ちゃん、翔ちゃん何が？」

唯は話の内容がよく分からないのか首を傾げている。

「憂ちゃんにいい所全部吸い取られたんじゃないの？」

「ええゝ！？ひどゝい！！」

漣の言葉でようやく話が分かったのか、唯はぶーっ、と頬を膨らませる。

その後、ようやく本題の唯の勉強会が始まった。主に漣が教科書を持ち唯に勉強を教え、たまに横からムギがアドバイスをするといった感じで勉強会は進んでいた。

その間律は唯の部屋のマンガを読んだりベットでごろごろしていたけど気がつくとい何処かに消えていた。

「それでここを2乗して・・・」



「唯ちゃん、これが公式だからこれさえ覚えとけば大丈夫よ」

「うーん・・・」

漣とムギが計算式を教えているが、唯はいまいち分かっていないのか曖昧な返事を返す。

「なあ黒田くん、こんな感じで大丈夫かな？」

唯の勉強が上手く進まないのので教え方に自信がなくなったのか漣が不安げに聞いてきた。

「うーん・・・まあ今回は時間ないし最初のほうの配点が低い問題はとりあえずおいといて最後の方の問題をしていったほうがいいかな？」

「まあそれも一理あるのかな・・・」

翔平の言葉に漣は、あれっ？ といった感じの返事を返す。

「この問2の公式は問5の公式を応用したら解けるからこの公式は覚えなくていいから・・・それで次の問6は・・・」

「はいっ！翔ちゃん先生！」

ここから翔平のほとんど無駄を省いた唯の勉強がはじまった。漣もムギもその教え方をみて驚くが、なにより驚いたのは唯が1回でほとんどの問題を解けたところだった。

「すごい・・・私が1時間以上かかって教えたところを30分で・・・」

「

「こんな勉強のしかた初めて見ました・・・」

その間も唯の勉強は進んでいく。

「これをこうして・・・こうかな？」

「おしつ、正解・・・こんなもんで大丈夫だろ」

配点の高い問題を重点的にした勉強会が終わった。

「えへへ 私ってやれば出来る子じゃん」

唯は一人で自画自賛しているが、そこで隣から漣が、おいっ といった感じで聞いてくる。

「黒田くん、・・・最初のほうの計算問題はどうするんだ!？」

「ああ・・・唯これあげる」

「鉛筆？」

「翔ちゃん、どうするのこれ？」

漣の言葉に俺はカバンから１本鉛筆を取り出し唯にわたす。漣はなぜ鉛筆?といった感じで首を傾げる。

漣に続き唯も尋ねる。

「上に番号が振ってあるだろ?最初の方は番号を選択する問題だから転がしてでた番号を書いとき」

「「ええ！？そんなんでいいの！？」」

俺の言葉に漑と唯が叫ぶ。

「大丈夫、健太からもらったもんだから」

「そっか」。健太君のなら大丈夫だね！」

その鉛筆が健太が転がして100点をとったものと知ると唯は納得した。

「唯まで・・・！？えっ？健太君ってテストで100点取った・・・？」

漑が驚いた様子で叫ぶ。

正直最後のほうは教えるのに疲れてきたので健太がテストで転がし100点をとった鉛筆を唯に渡し勉強会はおわった。ちなみに律は1階で憂とゲームをして思いつきりなじんでいたが・・・。

次の日。追試当日である。

放課後、追試が始まりその間唯以外の部員は音楽室で時計を見てはそわそわしていた・・・ただ1人翔平をのぞいては。

「もう追試始まったよね・・・唯大丈夫かな・・・？」

漑が部室の中を歩き回りながら時計をみて言う。

「や、やることはやったし大丈夫だって！」

（お前は何もしてなくね？）

律の言葉に俺は心の中で思う。

その間、よこからトプトプと音がするので振り向くとムギが、ぼおーっとしながらティーカップに紅茶を注いでいるが余裕でこぼれて机の上がすごいことになっている。

（そこまで緊張するもんかね．．．？）

また心の中で思う。

その時ドアが開き、またまた目を点にしてふらふらしながら唯が入ってきた。その瞬間、漑、律、ムギは立ち上がる。

「ど、どうだった！？唯」

律が聞く。それに対し唯はふらふらしながら返す。

「ど、どうしよう．．．律ちゃん．．．」

「まさか．．．だめだった．．．？」

次は漑が若干震えた声で唯に尋ねる。その言葉に唯は震える手でテスト用紙を上げる。

「ひ、ひゃ、100点とっちゃった．．．！！」

「「極端な子！？」」

律と澪が叫ぶ。ムギもどういったらいいかわからない笑顔を見せる。

「唯はなんでかやれば出来るんだよね・・・」

俺はつぶやくが、鉛筆に任せた序盤の計算問題が全問正解だったことにみんな驚いていて聞こえてなかった。

まあとにかく追試も終わったのでこれでまた部活が再開できるのでみんなやれやれといった感じだった。

「まあ・・・唯テスト勉強中ギターの練習してたからもうコードは全部完璧だよね!？」

澪が笑顔で唯に聞く。唯もギターを構えて笑顔で、

「えへへ　まかせて!!XでもYでもいつでもきなさい!」

（（んゝ・・・気のせいか・・・?））

唯以外の4人は思う。

「じ、じゃあ・・・これ弾いてみて?」

澪が一枚の楽譜を唯に差し出す。しかし、ギターを構えた唯はしばらくフリーズし言う。

「忘れた・・・」

一瞬部室内の時間が止まる。唯はなんとか笑ってごまかそうとする。

「ずっとXとかYとか勉強してたから・・・あははゝ・・・」

「また1からっっ!？」

ここで漣が完全に呆れて叫ぶ。

「ま、まあ・・・唯の教育係はしょーへーだからな・・・よ、よろしく、しょーへー・・・」

律もフリーズがとけて腕組みをして俺に振ってくる。ムギも苦笑いをしている。

「ええ!？おいおい・・・嘘だろ・・・!？」

「こ、ごめんね翔ちゃん先生・・・。」

がくぜんとする俺に唯が申し訳なさそうに謝ってくる。  
正直心が折れそうになったものの、今に始まったことではない。

(あゝもうこの場から逃げ出したい・・・はあ・・・)

「はいはい・・・んじゃあ、また練習するか・・・」

「あ、ありがとう翔ちゃん先生!！」

げんなりした俺に対し溢れんばかりの笑顔の唯だった。

「黒田くん優しいのね」

「やれやれ・・・」

ムギは笑顔で両手を合わせながら、漣はあきれてため息をついてい

る。

こうしてまた唯のギターの練習がふりだしにもどり、部活動は再びはじまった。

## 練習合宿！ (1) (前書き)

部室で見つけた昔の軽音部の演奏が録音されたテープを聴き、今の状況に危機感をもった漣は練習合宿をしないといい始め、合宿をすることになる。

また、あまり部活に出ない翔平をどうにか部活に連れ出そうと律とムギが練習合宿という条件を利用しある計画を立てる。

今回はシリーズものです。

話の流れは原作を元にしていますが、キャラはだいぶ変わってきます・・・6話目どうぞ！



## 練習合宿！（１）

中間テストの追試が終わり7月に入ったある日、漣は部室の中でカメラを構えていた。撮っているのは部室内にある置物や風景などである。そんななか、戸棚の上をカメラ越しに覗き込んでいた漣の目にダンボールが1箱置いてあるのを見つけた。箱には桜高軽音部とマジックで書かれている。

「なんだろ・・・？」

首を傾げながら漣が箱を開けていくと、中には昔の軽音部の学園祭などでのライブを録音したテープがたくさん入っていた。

次の日の放課後。部室では唯と律がそのダンボールの中に入っていた昔の卒業アルバムを見て盛り上がっていた。見ているのはもちろん軽音部の写真だが、そのメンバーはどう見ても一昔前のロックバンドの格好をしている。それを見ながら律は、

「ほんと、いつの時代のバンドなんだよって感じだよな！」

大笑いしている。

「う、うん・・・そうだよな」

（軽音部ってこんなイメージしかなかった私って一体・・・）

唯は言葉では律にあわせるものの、心の中では全くもってそんなイ

メージしか持ってなかった。

その時、音楽室のドアが開き漑が早歩きで入ってきた。

一方その頃翔平は体育委員会の打ち合わせがあり会議室に行っていた。会議が終わり廊下に出たところでムギに声をかけられた。

「あつ、黒田くん！これから部活に行くの？」

「ああ・・・今日はちよつとバイトがあるからね・・・」

「漑ちゃんが軽音部の大事な話があるからちよつとだけ部室に来て欲しいって言ってましたよ？」

「大事な話ね・・・？じゃあ行きますか？」

「うん。行きましょう」

大事な話となればしょうがないか・・・俺は1度音楽室を覗くことに決めムギと他愛のない会話をしながら音楽室に向かう。そしてドアを開けると・・・腕を組んで仁王立ちしている漑と、その足元に正座している律と唯がいた。律の頭には大きなたんこぶができている。

「うう・・・なんで私だけ・・・」

律は相当痛そうにしている。

「うわ・・・」

「マ、マドレーヌ食べる・・・？」

（はっ！？）

びつくりして俺はムギを見る。その後ムギの言葉でいつも通りのお茶会が始まり、かなりご立腹の漑が話を始めた。話によると9月には学園祭があるので今の状態に危機感をもった漑が夏休みに練習合宿をしようと言い出し、それに対し唯と律は学園祭はお化け屋敷がいいだの色々言い出し、ついに漑がキレたというわけだ。

「ムギも黒田くんも、もう7月に入るのに1回も合わせたことないなんてどう思う？」

「まあまあまあまあ・・・」

「まあまあ・・・」

苦笑いしながらのムギと俺の返事が全く同じになるが、回数はムギの方が多し。

「ムギちゃん6回、翔ちゃん2回・・・」

「数えなくていいから」

2人のまあの回数を数えた唯がなぜか報告する。ここで話を聞いたムギが急に目をキラキラさせ言う。

「行きましょう！私、みんなとお泊り行くの夢だったの」

「そうなんだ」

「じゃあ山にする！？それとも海！？」

ここでもうやく痛みから解放された律が張り切り始めた。

「だから！！バンドの練習合宿だつて言ってるだろ！！」

「じ、冗談だつて」

しかし再び澁に怒られ小さくなる。

「まったく・・・！それで黒田くんはどう思う、合宿？」

そこで澁から話が振られる。俺は少し悩んだものの、

「まあいいと思うけど・・・今回はちよつと遠慮しとくわ」

「ええ！？なんで翔ちゃん！？」

「どーゆうことだ、しょーへー！？」

「え、なんで黒田くん！？」

俺の返事に他の4人は一斉に俺の方を見て来る。

（おいおい・・・冗談じゃないよ！アウエー感半端ないって！）

普段はあまり焦らない翔平が久々に焦る。

「いやいや・・・さすがに女子4人に対して俺1人で合宿するのはちよつと・・・ねえ？」

そこで周りの反応を伺うものの・・・律に唯、ムギが身をのりだし言う。

「いやだめだ！軽音部の一員として絶対に参加してもらっからなー！！」

「翔ちゃんも行くようよ　絶対楽しいって」

「そうですよ　一緒に行きましょう」

「そうだよ。黒田くんも軽音部の一員なんだし・・・行くようよ！」

（・・・あれーっ!?!）

すこし間があいて澪が俺に言ってきた。澪の普段の恥ずかしがりやの事を考えればここで分かってくれると思っていたのに・・・いよいよ逃げ場がなくなってきた。ほかの4人は翔平の返事を待っているのか、ジーツ　とこつちを見てくる。

「分かったよ・・・じゃあ参加するよ」

結局いつも通り翔平が折れた。途端に部室内の空気が明るくなる。

「やったーっ!!」

「楽しみですね」

「よし!!それじゃあ計画立てようぜ!!」

翔平を除く4人がさっそく計画を立てる段取りを始めた。

「で、何処に泊まるとかそんなんは考えてあんの？」

翔平の質問に唯と律も続く。

「でもいくら位かかるんだろ・・・？」

「そうだぜ、あんまり高いときつくないか？」

その質問にさっきまでの勢いがなくなり澁が言葉に詰まる。

「それは……ムギ……？」

「はい？」

「……スタジオ付きの別荘とか……ある？」

「ありますよ？」

「（（あるんかい！？）（（

心の中で全員が叫ぶ。こうして合宿先はムギの別荘ということに決まった。

「じゃあ俺バイトあるから帰るわ。おつかれっす」

ここらで今日はバイトがあるわけで俺はカバンを持って立ち上がり合宿の計画で盛り上がる4人に言う。  
すかさず律が尋ねる。

「明日は出るんだろ？しょーへー」

「ああ、出るよ。じゃあね」

「」「」「ばいばい」「」「

「（やばい……けっこう時間たってるし……）

音楽室を出た瞬間俺はダッシュでバイト先に向かった。

その頃音楽室では4人が合宿の計画を立てていた。

「まったく・・・しょーへー週に2、3回しか部活に出てないかな」

律が困ったように言っているとムギや漑も言う。

「そうですね・・・でも黒田くんも色々頑張ってますし・・・」  
「まあ入部するときに無理いつて入ってもらってるからな・・・」

ムギと漑は、唯のギターを買う為にバイトしたときに見た翔平の忙しさを見るとなかなか強く出れないみたいだった。

「翔ちゃん頑張ってるもんね」

唯も紅茶を飲みながら翔平を援護する。すると律が何か思いついたのか漑とムギに集合をかける。

「唯、ちよつと待つてて・・・」

「えっっ！？なになに。私にも教えてよ」

「後で教えてあげるから・・・」

漑もムギも不思議そうに律のところに向かう。唯は「ぶー」と頬を膨らませている。

「なんだよ？律」

「へっへっへ・・・いいこと思いついちゃってさ」

漣の質問に律は明らかになにか企んでいる笑顔を見せる。

「えっ？なにになに？」

ムギはこの状況からなにか思い当たることがあるのか、ワクワクした感じで聞く。

「唯ってしょーへーのこと好きじゃん？2人が付き合っちゃったらしょーへーも部活に出るようになるんじゃない！？」

「ええ！？な、何言ってるんだ律！？まだ私たち高1だぞっ！？お付き合いするのはお互い成人してからで・・・／＼／＼／＼」

「漣は考えが古い！」

律の言葉に漣が顔を真っ赤にして反論するものの律に押し切られる。この手の話では律が漣よりも1枚も2枚も上手だった。ムギはノリノリなかんじでにこにこしているわけで、ここの主導権は律とムギが握ってしまった。そして律とムギが唯の方に笑顔で振り返る。漣は見えてられないといった感じで真っ赤になっていた。

「なんだったの？私にも教えてよ」

唯がふてくされた感じで口をとがらせて尋ねる。それを見て、律は笑顔で計画を実行し始める。



「なあ唯？しょーへーのことどう思う？」

「えっ？翔ちゃんがどうかしたの？」

「唯ってしょーへーのこと好きなんだろう？」

「へ、えっ！？」

ニヤニヤしながら律の言葉に唯は手にしていたマドレーヌを落とすようになった。ここでムギが口を開く。

「前にもいったでしょ 普段の唯ちゃん見てたら黒田くんのこと好きなのかなあゝって？」

「ム、ムギちゃん・・・それはその・・・えゝつと・・・／／／」

「ほらほらゝ どうなんだ唯？・・・あっ！そういえば1組の子がしょーへーのこと好きだと言ってたような・・・！？」

「ええ！？そ、そうなの？／／／」

顔を赤くしてあたふたしている唯に律はニヤニヤしながら追い討ちをかける。もちろん話はとっさに作ったウソであるが唯には相当効いているみたいだった。ムギもそれに続く。

「唯ちゃん、黒田くんのこと好きなの？」

「ムギちゃん・・・」

唯は顔を真つ赤にしながらムギを上目遣いに見る。言葉では言っていないもののその状況からして結論は明らかだった。完全に流れをつかんだ律とムギは着実に計画を実行していく。

「唯、頑張らないと他の子にしょーへーとられちゃうぞ!？」

「そ、それはイヤだけど・・・そんなこと今まで考えたことないし・・・私どうしたらいいのかわかんないよ／＼」

「大丈夫!唯ちゃんを応援してあげる」

ムギが両手をグーにして唯に言う。こうして律の計画は順調に進み部活そっちのけで今後の計画作りが始まった。澪は顔を真つ赤にして話には参加していないけど・・・

「お、おい律!あくまでバンドの練習合宿なんだからな!？」

「分かってるって」

やっこの思いで澪が律に釘をさすものの律はニヤニヤしながら返す。ホントに分かっているのかどうなのか・・・。

こうして・・・翔平がバイトをしている間に水面下で計画は着実に組み立てられていき・・・そして夏休みに入り合宿の日がやってきた。

もちろん翔平は律たちがそんな計画を立てていることなど知る由もない。



## 練習合宿！ (2) (前書き)

軽音部一行バンドの練習合宿で琴吹家の別荘にきていた。表向きはバンドの練習合宿だが・・・律たちの計画がいよいよはじまる！？

なんか長くなってきましたが・・・次の話で合宿編は終わるはずですよ。

では・・・7話目どうぞ！

## 練習合宿！ (2)

練習合宿当日の朝、翔平は荷物とヘルメットを持ち玄関で靴を履いていた。両親は昨日から出張でいないわけで妹の晴香だけが玄関に来ていた。

「それじゃあ行ってくるから」

「行つてらっしゃい！お兄ちゃん・・・あれ、バイクで行くの？」

「ああ、ちよつとバイト先に用事あるし、そこから駅近いからバイク置いていけるし」

「そうなんだ、気をつけてね！」

「あいよ」

家を出てガレージに止まっている愛車のCB400のエンジンをかけ、しばらく暖機させる。

(はーあ・・・夏休み初日から1泊2日か・・・)

「あつ、翔平さんおはようございます 今日から合宿ですよね!？」

バイクにまたがりボケーつとそんなことを考えていると隣から聞いた声が聞こえてくる。俺は声のした方に振り返ると、憂が庭の花に水やりをしていた。前にも書いた通り家事全般をこなす姉の唯とは違い出来た妹である。

「おはよ、憂ちゃん。今日かららしいけど……唯はまだ寝てたりする？」

「あ、はい……。まだ寝てますけど……」

俺の質問に憂は少し苦笑いをしながらこたえる。このとき翔平の middle でほぼ 100% の確率で唯が遅刻するシナリオが出来る。

（入学式の時みたいなことになりそうだな……）

心のなかで思いながらもここは憂にお願いするしかない。

「まあ 10 時集合らしいからちょっとよろしく頼むよ」

「あ、わかりました。でも翔平さん早く出られるんですね？」

「いやあ、ちょっとバイト先に用があつてね……。まあ唯のこ  
とよろしくね」

「はいっ 翔平さんもお気をつけて」

憂に見送られ翔平は出発した。ちなみに昨日やり残した整備作業があつたのでバイト先に寄つたわけであるが、いざ着いてみるとほとんどの作業が他の人により終わっていて、しばらく休憩室で雑誌を読みながら時間をつぶした。ふと時計を見ると 9 時 50 分になっている。

（そろそろいくか……）

翔平は雑誌を閉じ集合場所の駅に歩いていく。駅に着くと律と漣、

ムギはもう着いていて話をしていた。心配していた唯の姿はもちろん見えない。律たちが翔平に気づき手をふって声を掛けてくる。

「おい！しょーへー、こっちこっち」

「おはようございます」

「あれ？唯は一緒じゃないの？黒田くん」

「うん、ちょっと用事あったから先にでただけど・・・まだ来ない？」

漣の質問に俺は あれっ？と、いった感じで返す。漣は焦った様子で、

「う、うん。まだ来てないけど・・・電話してみるね？」

漣はカバンから携帯をとりだし唯にかける。しばらく間があいて唯が電話に出たのか漣が少しこわばった感じで言う。

「・・・おはよう・・・」

（やれやれ・・・やっぱりな・・・）

翔平のシナリオ通り唯は寝坊をしてしまったが、憂が前日のうちに唯の荷物をまとめていたらしいので電車の時間はギリギリ間にあった。

「みんなごめんね！なんか明日が楽しみでなかなか寝付けなくて・・・」

唯が両手を合わせみんなに謝っている。みんなやれやれといった感

じで苦笑いをしているが・・・。

その後は電車の窓からの景色を楽しんだりお菓子を食べたりしているうちに1時間がたっていた。ちなみに翔平は電車にのって20分をすぎたところで寝てしまった。翔平が寝たのをみて、律がムギと唯に集合をかける。澪もなんだかんと言いながらも仲間はずれにされるのはいやなのかその中に入っていた。

「よしっ・・・唯、ちゃんと用意してきた？」

「ばっちしだよ！！律ちゃん隊長！」

律の質問に唯はガッツポーズをして答える。ムギもその様子を見て楽しそうに、

「唯ちゃん、ファイト」

ニコニコしながら唯にエールを送り、寝ている翔平を見て、クスツと笑う。澪は恥ずかしそうにしながらも、

「・・・おいつ、あくまでもバンドの練習合宿だからな・・・？」

盛り上がる3人に釘をさす。その後も律を中心に計画の打ち合わせは進み、そうこうしているうちに目的地の駅に着く。

「翔ちゃん！起きて起きて！着いたよ」

唯に起こされて翔平はあくびをしながら外の景色を見る。

「ああ・・・もう着いた・・・？」



「うんっ！早く行こうよぉ」

「張り切りすぎだろ！？」

唯はにこにこしながらぐいぐい手を引っ張っていく。

（なんかいつもの唯と違うような・・・）

心の中で翔平は首を傾げる。一方の唯も翔平を好きと意識して話したりしたことがないため正直あまり自信がなかった。けど、今考えてみると今まで翔平に抱きついたりスキンシップをとっていたのは、心のどこかで翔平のことが好きという感情があったんだと思っていた。

（が、頑張らなきゃ・・・！）

律と漑、ムギはすでに電車を降りて駅のホームで翔平と唯を待っていた。

「お前らなんでニヤニヤしてんの？」

「い、いやゝいい天気だなあゝって」

「ほ、ほんとですね」

「・・・？」

律とムギがこっちを見ながらニヤニヤしているのを見て翔平が聞くが、2人はごまかす。なにがなんだかさっぱり分からないなか、5人は駅を出てすぐ近くのムギの別荘まで歩いていった。ただ、その間なぜか俺の手をずっと唯が握っている。相変わらず律とムギ

はニヤニヤしているし、漑はなんか顔が赤いし。翔平が視線を送ると律とムギは真顔に戻る。

（なんなんだ？こいつら・・・）

「なあ、いつまで手持ってるんだよ？」

「あ・・・えへへ、なんか足が疲れちゃってさ」

翔平に笑顔で唯は返す。もちろんこれも律やムギに指示されてやっていることだが・・・。唯の持っている荷物を見ると結構重そうな感じだった。背中にはギターを背負い、肩には大きなトラベルバックをかけている。ギターを背負ってるだけでもフラフラする唯なので今は相当ヨロヨロ歩いている。

（なんか危なっかしいな・・・はあ・・・）

「唯、そのカバンもってやるよ。なんかコケそうだし」

唯のヨロヨロ歩きを見てこの後確実に転ぶだろうと判断した俺は唯に言う。すると唯はなぜか焦った様子で、

「い、いいよ！？翔ちゃんに悪いよ！？」

「はあ？」

なんでそこで焦るのかよく分からないので首を傾げる。結局唯は別荘につくまで俺の手を握ったまんまだった。

「おおっ！！！！すごい！！！！」

「うわあゝ!!」

「で、でかい!？」

「ほ、ほんとにこんなとこに泊まってもいいの!？」

琴吹家の別荘は想像してたものよりかなり大きく、裏にはプライベートビーチまである。ムギ以外は全員目を点にしていた。翔平ですら驚きを隠せないし、漣は自分が言い出したことにもかかわらずムギにもう一度確認をとっている。

「ほんととはもつと広いとこに泊まりたかったんだけど・・・一番小さいところしか借りれなかったの。ごめんなさい」

ムギは申し訳なさそうに謝る。

(これで一番小さいのかゝ!?)

(他にも別荘あるのかゝ!?)

律と漣が心の中でつつこむ。翔平も同じようなことを思いながら笑う。

(しかし・・・これが一番小さいとか大きいのはどんなんだよ・・・)

「あの、じゃあ中を案内しますね」

「・・・はい」

ムギを先頭に一行は建物の中に入っていく。まず入るとすぐに10人は余裕でくつろげるであろうリビングがあり、最新の設備が整ったキッチンがある。5、6人は入れる広さの浴室、客間は3部屋あ

るがどの部屋も相当広い。一行は驚きながらも釣竿やボート、バーベキューコンロなどが保管されているガレージに入る。ここで俺の目に珍しいものが飛び込んでくる。

「おっ！これってF？400じゃん！？」

「はい 父の趣味みたいで・・・乗っているところは見たことないですけど」

「状態すごいいいな・・・再塗装した後も傷もついてないし・・・しかも走行距離2000キロ！？」

翔平が珍しく興奮した様子を見て律たちが尋ねる。

「しょーへー、これってそんなにすごいもんなの？」

「そりゃあもうKAWASAKI F？400ってたら30年も前のバイクだし・・・型番見ても初期型だし。いままで何回か見たことがあるけどこんなに綺麗なのははじめて見た」

「へっ・・・さっぱり分かんない」

「でもたしかに綺麗だな」

「へっ・・・」

俺の説明を聞いてもあまり興味がないのか律はすこし不機嫌そうに受け流す。理由は単純に自分の計画を実行中にもかかわらず1台のバイクが先に翔平の心を掴むという結果になったからだ。こうしてガレージをぬけていよいよスタジオに入る。

「ここがスタジオです」

「すごいな・・・」

「うわっ！広い！！」

入った瞬間漣と翔平が歓声をあげる。これまた10人は余裕で寝れる位の広さはある。ドラムセット、キーボードもセットされていて、アンプなどの音響関係はBOSEシステムで統一されている。

「これ好きに使っていいの？」

「はいっ もちろんです」

翔平の質問にムギは笑顔で答える。ふとここで漣が あれっ といった感じで声をあげる。

「そっいえば・・・律と唯はどこに行ったんだ？」

「さあ・・・？」

確かスタジオに入るまではいた気がするが・・・俺が答えた瞬間スタジオのドアが勢いよく開き、いつの間にか水着に着替えた律と唯がビーチボールをもって入ってきて張り切って叫ぶ。

「よーしっ！！遊ぶぞー！！」

「おーっ！！」

「おいおい、ここに来た目的は遊びに来たわけじゃ・・・」

漣があわてた様子で言うものの律と唯にはまったく届いていない。

「とつげきーっ!」

漣の言葉をかき消し2人は海へと走っていった。

「私たちもいきましょうか」

「そ、そんな・・・ムギまで?」

いつの間にかムギも水着に着替えていて律たちのあとを追って走り出した。ここで漣と翔平が2人でポツーンと取り残された状態になるも漣が突然、

「私も遊ぶーっ!水着どこーっ!」

泣きそうな感じでカバンの中をゴソゴソしだす。やれやれと思いながらも翔平はそんな漣をおいてスタジオの外に出る。出てすぐの所で唯と律とムギの3人が荷物を漁っている漣を面白そうに覗いていた。

「あんまりからかってやんなよ」

「えーっ、だって面白いじゃん あれ?しょーへーは遊ばないの?」

「水着持って来てないし・・・そうだムギ?さっきのガレージにあった釣り道具借りても良いかな?」

「ええっ どうぞ」

「おーい!?!どうゆうことだしょーへー!?!」

「えゝ・・・翔ちゃんも遊ぼうよ」

律と唯が騒ぎ出す。最初は断ったものの、また唯が泣き出しそうな感じになり最終的には近場で見える位置で釣りをするという条件で落ち着いた。

そして・・・今俺は釣りをしていた。横を見ると唯たち4人が楽しそうに笑いながらビーチバレーをしている。

（やれやれ・・・静かだ・・・おっ！？きたきたっ！）

急いでリールを巻くと針には20センチほどのキスがかかっている。たまにはこんなのも悪くない。のんびりと夕方まで釣りを楽しんだ。ふと時計を見ると5時なっていたので竿をしまい、4人の方に歩いていく。

「おい、そろそろ練習したほうがいいんじゃない？」

砂浜で座り込んでいる律と唯にムギ、スイカを持って立っている漑に声をかける。

「何言ってるの、せっかく海に来たんだから思う存分遊ばないと・・・あーっ！！練習ーッ!?」

漑は完全に練習のことを忘れていたらしい。言い出したのは何処の誰だか・・・。

さすがに唯たちも十分遊んだのかまだ遊びたいということもなく素直にスタジオに向かったがここで次の敵が出てくる。

「なー漑、今日はもう止めようぜ・・・遊びつかれた・・・」

律の言葉に漣はため息をつきながらもなにか思いついたのかニヤニヤしながら律に言った。

「そういえば律、さつき海で遊んでるとき思ってたんだけど・・・最近ドラム叩いてないから太ったんじゃないの？」

「えーっ！？うわぁーん！！！」

漣の一言に律はドラムに走って行き泣きながら連打しだす。その状態を見て漣はニヤツと笑う。

「さてと・・・唯もやるぞ？頼むから前みたいに忘れたとかいうのはやめるよ？」

「えへへ　まっかせなさーい！」

翔平が声を掛けると唯は自信満々にギターを構え適当に弾く。1ヶ月ほどでここまで弾けるようになるとはさすがに思ってもなかった。ので正直びっくりした。

「やるじゃん」

「唯ちゃん上手になってる」

翔平が頷きながら言うと、ムギも手を叩いて喜んでいた。

「いやーそれほどでも」　翔ちゃんに教えてもらってから毎日練習したんだもん」

唯は笑顔でピースをする。漣も頷きながら言う。



「うんっ！後はチョーキングとか細かいテクニクを覚えたら完璧だな」

「チョーキング？」

「「違う！」」

律が後ろから唯の首を締め付ける。唯は降参した様子で律の腕をペチペチたたいている。それを見て澪と翔平のハモリツッコミが飛ぶ。

「チョーキングってのは音をだしながら弦を引つ張るんだ。そして音程が上がるわけ」

翔平が説明しながら実演して唯に見せる。ジャーン　と高い音が出る。

「おおー・・・さすが翔ちゃん先生・・・」

唯も真似をしてギターを弾く。ミョーン　となんか抜けた音が出るけどまあ出来ている。

「ぶっ・・・ミョーンって・・・あははははは」

「そこでつけるか・・・」

自分がだした音がツボにはまったのか大笑いする唯をみて翔平を含め4人は苦笑いする。

ここで律の提案で1回合わせて演奏してみようということになり各自持ち場につく。

「1、2、3、4!!」

律の掛け声で練習中のオリジナル曲の演奏が始まる。唯も途中とこ  
ろどころつまづくところがあったけどまあ上手くできていたと思う。  
そして演奏が終わる。

「ちょっとずれてるかな。．．．もうちょい各自練習してから合わ  
せてみますか？」

「そうだね．．．でも初めてにしては結構よかったよね!？」

「ああ!なんかすごく楽しかった!」

「うんっ!楽しかった」

翔平が客観的に演奏を聴いて言うのと他の4人も口々に感想を言う。  
初めてみんなと演奏が出来たのがよっぽど嬉しかったのだろう。唯  
はとても喜んでいた。

「それにしても．．．腹減った．．．」

「もう7時か．．．ご飯時だな」

「ご飯どうしましょう?」

律が天井を見上げたため息をつきながら言う。時計を見ると7時を過  
ぎている。

「はいっ!!私が作ります!!」

ここで唯が手をあげて言った。もちろんこれも律とムギからの指示

なわけである。ムギが言うには料理ができるのはポイントがあがるらしくこの機会でアピールしようとのことであった。もちろん律たちの計画なんて知らない翔平はかなり慌てる。

「おいおい！お前料理なんてできないんじゃないの！？」

「えへへ　大丈夫だよ翔ちゃん」

翔平に笑顔で言う唯。平沢家では憂が料理を始め家事全般を担当している。前に憂が唯が料理をすると仕事が増えるとか言ってた気がする。そんな翔平をよそに、

「よし！私の本気見せちゃうぞっ！！」

頬つぺたをペチペチ叩きながらキッチンへと歩いて行く。一行もとりあえずスタジオを出て、キッチンが見えるリビングに移動した。唯はキッチンでばたばたしているが・・・しばらくしてリビングでくつろいでいる翔平の横に来て、

「ねえねえ翔ちゃん？」

「ん、どしたの？」

「お米1合って何キロだっけ？」

「はあゝ！？」

・・・こんなやり取りがあった。もちろん漑たちには聞こえていなかった。突然声を上げる翔平にびっくりしている。とりあえず呆れながらも翔平は唯についてキッチンに入る。

「な、なんかあったのかな？」

「さあ・・・でもなんかいい感じになったな？」

「そうですね」

普段あまり動じない翔平が慌ててキッチンに入っただのを見て澁が心配そうに言う。しかし律とムギはニヤニヤしながら見ていた。一方そのころキッチンでは・・・

「で・・・なにを作ろうとしてたの？」

翔平が呆れながら唯に聞いていた。

「え、え〜つとね・・・カレーなんだけど・・・」

「カレーね・・・で、この切ってあるリンゴ（缶詰らしいけど）どうすんの？」

「え〜つとね・・・前にテレビでカレーのCMにリンゴが映ってたからその・・・」

「・・・」

（あーそれ・・・確実にバーモードカレーだな・・・）

キッチンに入った翔平がみた光景はなぜか調理台に散らばってる米とまな板の上にある切られたリンゴだった。なぜか唯はしどろもどろになっている。

（天然にもほどがあるだろう・・・）

俺は呆れながらも、仕方なく唯に言う。

「しょうがないな・・・ほらっ手伝ってあげるから！一合はこのカップ一杯分だから・・・とりあえず6号とって磨いで」

「は、はいっ！翔ちゃん先生！」

唯は敬礼をしてせつせと動きだす。リンゴもすこしはカレーに入れ  
たものの余裕で余りとりあえず冷蔵庫に入れとくことにした。翔平  
は唯に指示をだしながらテキパキとカレーを作りつつ同時進行でサ  
ラダも作っていく。

「なんか・・・いい感じですね 律ちゃん」

「そうかな・・・なんか唯と翔平の動く割合おかしくね？」

その様子をリビングから見てムギは目をキラキラさせて言うが、律  
は唯と翔平の立場が逆になってるとこに少し呆れていた。  
そうこうしているうちにカレーが出来てみんなで頂くことになった。

「・・・いただきます」

みんな一斉に食べ始めるが・・・

「おいしーい！これ唯・・・黒田くんが作ったのか！？」

漣がカレーを絶賛しながら一瞬唯と言いかけて翔平に言う。

「え〜っ！ 澪ちゃんひど〜いつ〜!!」

唯が ぶう〜 と頬を膨らませて言う。

「じゃあ唯は何をしたのさ〜？」

「え〜つとね〜・・・ご飯炊いたでしょ？ サラダにプチトマト盛り付けたでしょ？ それから・・・」

律がニヤニヤしながら唯に聞くと、唯は答えるもののみんな苦笑いしか出来ない内容だった。

こうして夕食はみんな美味しくいただき各自お風呂に入ることになった。ちなみに女子組は露天風呂で俺は内風呂だったけど1人に入るにはクロールも出来るくらい広い。ゆっくりくつろいだ。

（やれやれ・・・つかれた〜・・・）

一方露天風呂では・・・律とムギを中心に例の計画で話が盛り上がっていた。

「唯なにしてんだよ〜！ 料理逆に手伝ってたら意味ないじゃ〜ん！」

「うう・・・律ちゃんに怒られた・・・」

律がキッチンでの一件の説教を唯にするよこでムギは苦笑いしながらまあまあとなだめている。

「仕方ない・・・こうなったら後半戦にかけるか!!」

「おーっ!!」

律の掛け声に唯とムギが合わせる。いつの間にか澪も小さくだが恥ずかしそうにおーっとおわせている。  
律はそれを見つけ、

「あれ、澪も合わせてた!?」

ニヤニヤしながら澪を見る。澪は顔を真っ赤にして、

「いや、だから・・・黒田くんが部活に出る回数が増えたらいいかなって・・・」

あたふた慌てて言う。

「おーっ!澪が照れてるぞーっ!!」

「ち、ちがう・・・!!のぼせただけだ!!」

律が言うと澪はさらに顔を真っ赤にしてあわてる。その様子を見て、あはははっ　とみんな笑う。

(よしっ!がんばらなきゃ・・・!)

唯は1人頬つぺたをぺちぺち叩いて気合を入れなおしていた。





練習合宿！ (3) (前書き)

いよいよ合宿編最終話です！ここらへんはほぼオリジナルストーリーで話がおかしいところが多々あると思いますがその辺は気にしないでください (笑)

特に唯のキャラがかなり変わっていると思うので・・・。

練習合宿！ (3)

「暑いな・・・」

風呂を上がり翔平はジャージ姿で冷蔵庫を漁っていた。中にはミネラルウォーターがたくさん置いてあったので1本取り出し飲んだ。

(さ)てと・・・ギターの弦でもかえるか・・・)

翔平がケースからギターを取り出したところでリビングのドアが開き、唯たち4人が入ってくる。

「あれ？しょーへーメガネかけてたっけ？」

「コンタクトつけてるって言ってなかったっけ？」

女子組よりも早く入浴を終わらせてリビングでギターのメンテナンスをしている翔平に律が声をかけると、ギターの弦をなれた感じで張り替えながら翔平は律たちの方に顔を向け答える。

「なんかメガネかけると感じ変わるな」

「なんか翔ちゃんじゃないみたいだね」

漣がまじまじと翔平を見て言うと、唯も1人で頷きながら翔平に言う。

「そうかな・・・で、これからどうすんの？」

「あつ、そうそう！部屋割り決めようぜ」

翔平の質問に律が張り切った様子で　おーっ　とポーズをとる。

「いやいや！？さすがに俺は1人部屋だろ？」

「いやゝ、あいにく3人部屋と2人部屋しか空いてないらしくてな  
ー」

「マジかよ・・・」

「なんかごめんなさい。ホントは1人部屋を用意するはずだったんですけど・・・」

律の提案に翔平は少し慌てた感じで手を振りながら返すも、律は両手を頭の後ろに組んでなんかわざとらしく言うが、その後にムギが申し訳なさに頭を下げてきたのでこれ以上言うわけにはいかない。

（さあ言っちゃえ！！）

（唯ちゃんファイト！！）

律とムギが翔平に気づかれないように唯に視線を送り、唯はコクツと小さく頷く。

「じ、じゃあ・・・翔ちゃんと同じ部屋でもいいかなあ？」

顔を少し赤くしながら言ってくる。まあこの流れで考えれば唯と俺が同じ部屋になるのが1番無難なパターンだと思う。

「んゝ・・・仕方ないか・・・じゃあ唯と俺が2人部屋ってことで？」

翔平は頭をかきながら律と漑とムギに確認をとる。律とムギはなんか笑顔で、漑は顔を赤くしている。

「全然OK!!じゃあしょーへーと唯が2人部屋ってことでっ!」

翔平の言葉に満足げに律がサムズアップをして決定を下す。その後はムギが冷蔵庫にスイカがあるので外で食べようと提案し、縁側でスイカを頂くことになった。

「明日はちゃんと練習するんだからな」・・・」

「分かってるって」

スイカを食べながら漑が言うと律がそう返すもほんとに分かっているのかは疑問であるが・・・。

翔平も雑談を楽しみながらスイカを食べていたが、自分の皿からスイカが減っているのにふと気がつき隣でスイカを美味しそうに食べる唯を見る。唯も翔平の視線に気づいたのか、申し訳なさに笑う。

「えへへ・・・なんか冷たくって美味しくてつい・・・」

「別にいいけど・・・そんなに食べて大丈夫か?」

「うん 私いくら食べても太らないんだ」

「いやいやそうじゃなくて・・・」

すこし呆れながらの翔平の質問になぜか唯は片手でピースをしながら返してくる。

「えっ！？そうなのかつ！？」  
「うらやましい・・・！」

漣とムギがとてもびつくりした様子で唯に詰め寄る。ここら辺は女の子の事情なのであまり触れないほうがいいだろうと判断し翔平は聞いていない振りをしてしながらスイカを食べる。

その後はリビングで『人生まるごとすごろく！！』という人生ゲームみたいな感じのボードゲームを5人で楽しみ、そうこうしているうちに11時を回ったのでそろそろ寝ようという流れになり各自部屋に解散ということになった。

（結局今日2時間くらいしか練習してなくね・・・？）

そんなことを思いながら翔平は歯磨きをしていた。そのころリビングでは翔平以外の4人が集まり作戦の打ち合わせをしていた。

「じゃあ唯、そうゆう流れでっ！」

「り、了解です、律ちゃん隊長！」

「唯ちゃん頑張ってね！！！」

律がニヤニヤしながら作戦の流れを説明すると、唯は顔を赤くしながら頷く。そんな唯を横から見ながらムギは笑顔で応援していた。そして打ち合わせも終わり各自部屋に解散となる。

「それじゃあまた明日〜」

「「「おやすみなさい」「」」

唯は翔平がいる部屋に、律たちは3人部屋にそれぞれ向かった。こうして合宿1日目は終わったが……翔平には長い夜が始まった。

（あゝ……なんか寝れそうにないな……羊が1匹……）

小さい時はよく唯が家に泊まりに来て、並んで寝たりしたこともあるものの今は違う。翔平はベットに寝転び頭の中で羊を数えだしていた。それが30匹までいってウトウトしてきたときに、唯がドアを開けて部屋に入ってきた。部屋はシーンとしている。

（……翔ちゃんもう寝ちゃった？）

唯はそう思いながらも月明かりを頼りにベットに入るが……布団の中で何かに当たる。

「あれ……わっ！翔ちゃん！？」

「うわっ！？びっくりした……」

ようやく寝れかけたところだったのに、耳元で唯が叫ぶのでびっくりして ガバツ と起き上がる。

「えへへ……ごめんね翔ちゃん」

唯は頭をかきながら顔を赤くして謝る。翔平はとりあえずメガネをかけて部屋の電気をつけると、パジャマ姿の唯が同じベットにいた。

「びっくりさせんな……そっちのベットあいてるぞ」

俺はもう一つ窓側にあるベツトを指差すが、唯は隣に座ったまま動こうとしない。

「翔ちゃんもう寝るの?」

「もう11時半だぞ? お前明日絶対寝坊するだろ?」

「大丈夫っ! 翔ちゃんが起こしてくれるから」

「あのなゝゝゝもう寝ようぜー」

「えゝっ!? せつかくの機会だよ? もっとお話しようよゝゝゝ」

もう寝ようと言う翔平に対し、唯は駄々をこねる。ちなみにその間唯はベツトから動こうとしないし、俺の腕を両手で掴んでいる。さすがにいつもと違う唯に違和感を感じてくる。

(なんかいつもと違うなゝゝゝ?)

「ゝゝゝなんか唯おかしくないか?」

「えっ、そ、そんなことないよっ／＼／」

翔平がまじまじと唯を見ると唯は顔を真っ赤にして首をブンブンふりながら答えるゝゝゝが布団がずれてベツトの端にいた唯は床に滑り落ちた。

ドスンッ!! 「ひゃう!?!」

俺はその様子を見て呆れながらも笑ってしまった。

「おいおい・・・大丈夫かよ？」

「むっ・・・翔ちゃん笑うとかひどい!!」

唯は俺が笑っているのを見て頬を ぶっつ と膨らませるも えへ  
へっ と照れ笑いしていた。

その後はそれぞれのベットで寝転び他愛のない話をいっていたが、  
12時には唯は話ながら寝てしまった。

「ホント・・・翔ちゃんがギター教えてくれて・・・今日始めてみん  
なと演奏できて楽しかった・・・」

そしてスースー寝息を立てはじめる。翔平は寝転んだまま唯の方を  
見ると嬉しそうな顔で寝ている。

（やれやれやつと寝たか・・・合わせて演奏できたのがそんなに楽  
しかったんだな・・・）

そんなことを考えているうちに翔平も睡魔にのみこまれていった。

そして翌日・・・

「おい！起きろよ」

俺は朝に弱い唯を布団から連れ出すのに5分近く声をかけているも  
のの唯はなかなか起きない。

「むにゅっ・・・眠いっ・・・」



（こりゃあ憂ちゃんが苦勞するわけだな・・・）

その後も苦勞しながら唯を起こして1階に下りると、ムギたちが朝食をテーブルに並べているところだった。

「おつ！しょーへーおはよ！」

「おはようございます」

「おはよ〜」

律とムギと漑が挨拶してくるのをあくびをしながら返していくと、律がニヤニヤした感じで聞いてきた。

「おやおやしよーへーさん？寝不足ですか〜！？」

「別に？なんでニヤニヤしてんだよ」

「えっ？いやあ別に・・・」

翔平の普通の返事に律は あれっ？ といった感じで抜けた返事を返すと、ムギも首を傾げながら唯を見る。唯は律とムギの視線に気づくと、

「いやあゝあはは〜・・・」

と笑い出す。翔平には何のことかさっぱり分からないが朝食の用意が出来たのでテーブルに着くと、皿の上にはサンドイッチが綺麗に  
ならんである。

「へ〜・・・これ3人が作ったの？」

「もちろん！昨日は黒田くんがご飯作ったんだから今日は私たちがしないとな」

「その通りだぜ！」

律とムギ澪が声を合わせて言う。俺の横に座っている唯は頬をぶくっ　と膨らませて、

「ひどいっ！私も昨日手伝ったんだよ！」

と、言うがみんなに笑われてしまう。といっても唯も笑ってるんだけどな。

「さーて・・・いよいよ今日の夕方で合宿は終わりだから・・・悔いのないようしっかり遊ぶぞーっ！」

「っておい！？練習はどうするんだよ律！？」

「だから午前中遊んだら午後は練習するって」

朝食が一段落したところで律が声高々に宣言すると、澪がかなり慌てた様子で律に詰め寄る。律はここで午後からは練習するといいだが昨日の様子を見ると多分だめな気がする。

「黒田くんも何とか言ってよ？」

澪が困った表情で俺を見てくる。ちなみに唯は遊びたいオーラを出してるし、ムギもどちらかといえばそんな感じなので俺に振ってきただという訳だ。

「午前中は練習して昼から遊べばいいんじゃない？遊んだ後に片付けするのキツイだろ？」

「そうだぞ！どうせ遊びつかれた」とか言って練習しないだろ？だから練習が先だからな」

俺が返すと遷は ほらみる といった感じで律に言うが、なんか嬉しそうだった。まあ自分も遊びたかったんだと思うけど。律も翔平の意見を受けてしぶしぶ午前中は練習ということに納得した。

「分かったよ……じゃあ午前中は練習ってことで」

「その代わり翔ちゃん、今日は遊んでよ！？」

今日の流れが決まったところで唯が交換条件を出してきた。それを聞いた律とムギが続けてくる。

「そうだぞ！せっかく海にきたんだから1回くらいは海に入れっ！」

「絶対楽しいですよ」

「分かったよ。その代わり水着ないからひざ位までしか入らないかな？」

「全然OK……！」

「やったー」

まあ言われてみるとせっかく海に来たんだから1回くらいは入らないと損だ、と思い今日は海に入ることにした。

「よし！！それじゃあ早速練習だー」

「「「おーっ！！」」」

朝食の片付けも終わり、律の号令で早速練習が始まった。昨日と同じように各自練習を1時間くらいして1回合わせてみると昨日よりよく出来るようになっていた。唯もつまづく回数も減り、学園祭のステージに出ても良いくらいの感じになっていたので驚いた。

「へー、唯なんか昨日より上手くなったな？」

「へへへー 練習したんだよー！」

唯は嬉しそうにピースをしてくる。この日の練習はみんな満足の内容で終わり、昼ごはんを食べてから全員海に出て行くことにした。

「唯、これがラストチャンスだからな！？」

「唯ちゃんファイト！！」

「が、頑張ります！」

律とムギの激励にお気に入りのピンクの水着を着た唯は頷き、外に飛び出した。

翔平は、着替えを終えた4人と砂浜で合流したものの漣はなんか恥ずかしそうにしているし、唯は顔を赤くしてるし、律とムギはニヤニヤしている。

（なんなのこいつら・・・？）

「よーし！！ビーチバレーしようぜー！！」

「「「おー！！！！」」」

律の提案に俺以外の3人がはしゃぎながら賛成する。まあ反対ではないけど5人なので2対3になってしまうのでどうするか言おうとすると、律が先を見越したのか即座に口を開く。

「じゃあ、しょーへーと唯がチームでよろしく！！」

ニヤニヤしながら言ってくるのでなんか気にはなるものの、いつの間にか唯が隣に来ていていた。

「頑張ろうね翔ちゃん」

「じゃあそれですか」

こうして翔平&唯ペアVS律・漣・ムギペアのバレー対決が始まった。まず・・・律がサーブを打つと翔平がそれをトスする。

「よっしゃ唯！決めちゃえ！」

「任しといて翔ちゃん！」

唯は自信満々に返事をし、ネット際でジャンプするものの・・・ボールをめがけてふった腕はボールにかすりもせず空をきり、しかも着地に失敗してコケた上に落ちてきたボールが頭に当たるといったスーパープレーを見せる。これには律たちをはじめ翔平も笑ってしまった。

「えゝ！笑うとかひどゝい！」

「いやいや・・・面白すぎる！」

みんなに笑われ　ぶうゝ　と膨れる唯に翔平は笑いながら手を差し出す。唯は嬉しそうにその手を掴んで立ち上がる。その後も唯は見事な運動オンチぶりを発揮していくが、終始笑顔で楽しんでいた。翔平も所々で唯にトスの仕方などを教えていき、唯もだんだん上手くなってきた。

（やっぱり翔ちゃん優しいよ・・・／／／）

唯はビーチバレー中翔平をちらちら見ては顔を赤くしていた。こうして律たちの計画を含めた練習合宿は幕を閉じた。



## 顧問 (1) (前書き)

夏休みも終わりのよいよ学園祭が近づいてきたので、ステージを借りるべく生徒会室にいくもののまたまたトラブルがおきる！？  
顧問編は次回で終わるはずです・・・！



## 顧問（１）

長かった夏休みも終わり９月に入り２学期が始まった。いよいよ秋の学園祭が近づいてきたということもあり、文化系クラブの中では準備に入っているところもあるらしいけど・・・今日も軽音部ではいつも通りティータイムがあるものの、本番が近いので練習の時間が増えてきていた。

と、まあ律部長にもっともらしい理由をつけられ部活に出るとグダグダ言われたわけで翔平は学園祭まで１０日間バイトの休みを取ったというわけだ。

「  
」

そして放課後、いつも通りのお茶会が終わり各自楽器の準備をしていた。と言ってもムギは学園祭でステージを借りるための手続きで生徒会室に行っていたけど。翔平の隣でギターをケースから取り出している唯はなんか機嫌がいいのか鼻歌を歌っている。

（なんか最近やけにテンション高いな？）

心の中で翔平は思うものの口には出さない。しかし律はニヤニヤしながら唯に近づき唯の耳元で言う。

「もしかして唯　　しょーへーが毎日来るから機嫌いいのか！？」

律の言葉を聞いた瞬間唯は少し顔を赤くして照れている様子であるが、夏休み前のようにびっくりして焦るようなことはなくなった。なぜなら単純に律にそのことでいじられすぎてさすがの唯も慣れてきたというわけだ。

「でへへ．．．さすが律ちゃん隊長．．．あいたつ!？」

照れ笑いをしながらギターを弾いた唯が悲鳴を上げる。

「どうした？唯」

「また指がつつたか？」

律と翔平が唯のほうを見る。漑は唯の悲鳴を聞いた瞬間　ビクツとして唯のほうを見ようとしない。

「うう．．．手の皮がむけちゃった．．．」

唯はそう言いながら指を見せてくる。確かに指先の皮がむけていて微妙に血がでていた。律はそれを見て呟く。

「うわぁ．．．痛そう」

「うん．．．ほら見て漑ちゃん。漑ちゃん？」

「見えない聞こえない見えない聞こえない．．．」

唯がこつちを見てこない漑にも指を見せてようとするが、漑は耳を塞ぎ座り込み必死に自分に言い聞かせていた。

「痛い話がそこまで駄目なのか．．．？」

漑の様子を見て翔平は苦笑いをしながら呟く。五月ごろに翔平のバイト先に唯や漑たちが来たことがあるが工場のなかで誰かが手をケガしたりするのは日常茶飯事と言ってもいい。

（もしあの2日間でそんなことがあったら冗談抜きで気絶しそうだな）

そんなことを考えている俺の隣で律が目をキラーンと輝かせ、わざとらしく騒ぎ出す。

「ああ〜っ！！私もドラムの練習のしすぎで手のマメが潰れちゃったー！！」

「〜っ！！」

漑はさらに小さくなりガタガタ震えだしたが律はさらに無傷の手を漑の前に差し出し追い討ちをかける。

「まあその内指がかたくなってから切れることはなくなるよ」

「へ〜、翔ちゃん物知りだね〜」

律が漑をからかっている間に指の皮がかたくなると唯に言うと、すごく驚いた表情で返してくるので少し呆れていると後ろの方に誰かの気配を感じた。ドアの方に振り返るとムギが立っている。

「おっ、出張お疲れーっす　なんでそこで立ち止まってたの？」

「ムギちゃんどうしたの？」

「あっ・・・なんだか入りづらくって・・・」

「「？」「」

翔平と唯が入り口で立ち止まっているムギに話しかけるが、ムギは少し顔を赤くしながら答えるものの最後のほうはゴニョゴニョと聞き取れなかった。翔平と唯が首を傾げていると、ようやく律のイタズラが終わったのか机の方に戻ってきた。

「あー面白かったあ そうだしよーへー、これ見てみてよ！」

「へえー、卒アルじゃん？2002年って結構前のじゃん」

「あ、律ちゃんそれ前の卒アルだね」

漣をいじり倒し満足げに机にもどってきた律は机の中から一冊の卒アルを取り出す。翔平は始めて見るが、唯は前に見たことがあるのらしい。

「ほらこの軽音部の格好！ホントいつの時代のバンドなんだよって感じだよな！？」

律は笑いながら軽音部の写真を指差す。確かに一昔前のバンドといった感じである。

「ほんとにそうだねえー」

「今こんないたらちよつと引くな……ん？」

律の言葉に唯が一昔前と当たり前のように返していたことに翔平は気づき唯を見る。そういえば前に入部を断ると白い顔の怖い人がどうたらこうたら言ってたような……

「し、翔ちゃんの視線が痛い……」

翔平の視線に気づいた唯は恥ずかしそうに顔を背ける。写真の中に

は昔の軽音部が学園祭でライブをしているところもありその派手さにはちよつと引いてしまった。

「ここまであのステージでする勇氣はないなゝ・・・」

「あつ、そのことなんだけど学園祭でステージ借りるために申請しに行ったんだけど軽音部ってまだちゃんとした部活って認められないから断られちゃったの」

「へゝ、じゃあ大丈夫だねゝ・・・」

「あつ、この写真すごーい」

「えっどれどれ!？」

ムギの答え方がまったくいつも通りののんびりした感じで、軽く受け流した翔平だったが少し間があいて話の中身が分かった。唯と律にいたっては話を軽く受け流してすでに他の話題に入っている。

「・・・いまなんて？」

翔平の言葉で話の内容をようやく理解したのか律はがばつと立ち上がりムギの両肩をつかんだ。

「軽音部が部として認められてないってー!?!もつと緊迫感だして!」

「じ、ごめんなさゝい・・・」

「おつかしいな、4人部員がいたら部として成立するはずだろ？」

「そのはずなんだけどなあゝ？」

ムギが謝った後に翔平が律に聞くと、律も確かにその筈だと首をかしげながら答える。唯はしばらく部室の中をキョロキョロ眺めていた。

「ていうか部として認められてないのに・・・音楽室こんなに好き放題使ってよかったのかな？」

「さあ？」

唯の言葉に翔平は首を振る。確かに部として認められていないのに勝手に音楽室を占拠しお茶を飲んだりお菓子を食べたりしていたことは確実にアウトだ。律も冷や汗をたらしながら言葉に詰まるものの、

「い、今まで何も言われなかったからきつと大丈夫だよっ！うん！・・・多分・・・？」

最後のほうは自分に言い聞かせるような感じであった。どちらにしても部として認められていなければ学園祭のステージを借りることも出来ないでこれはなんとかしなければならぬ。

「とりあえず生徒会室に聞きにいこうぜ」

「はい、そうですね」

翔平がそう言うともギと唯が頷く。しかしすぐに唯が、あれっ？といった感じで、

「そっいえば澪ちゃんは？」

聞いてくる。翔平は部室の中を見渡して隅にいた漑を見つける。

「えーっと・・・まだそこで震えてるよ」

「帰ってこーい!!」

まだ震えていた漑を律が呼び戻し、ようやく帰ってきた漑を含め一行は生徒会室に向かった。

「たのもーっ!!」

先頭をきつて唯と律が生徒会室に突入していく。

（普通に入れよ・・・）

「失礼しまゝす」

その後が続いて漑とムギ、そして翔平が入っていく。すると生徒会室の中で事務作業をしていた女子生徒が顔を上げて言う。

「あら、唯と翔平じゃない」

「あつ、和ちやーん」

「ああ、生徒会の役員になったんだっけ？」

「へっ？友達なの？」

和と話す唯と翔平を見て律が尋ねる。

「うん 翔ちゃんとおなじ幼なじみなんだあ」

「どうも、真鍋和です」

唯が目をキラキラさせながら律に返すと、和もかしこまり軽音部一同にあいさつをした。

「和ちゃんって生徒会役員だったんだね」

「うん」

「えっ？今まで知らなかったの？」

「前に全校生徒の前で挨拶してたじゃん？」

「ホントに友達？」

友達のはずなのに和が生徒会に入っていることを知らなかった唯に律、漣、翔平が次々につっこむ。

そこで和が あっ といった感じで翔平に顔を向ける。

「そっいえば翔平、健太から聞いたんだけどバイクの免許取ったんだって？」

「へっ！？いやあそれはその・・・」

「校則では学校から許可を取らないと所得は禁止されているのよ」

「まあ・・・でもさ・・・」

「順番が逆だけど申請用紙に記入しなさい」

「・・・はい」



（おー・・・黒田くんがだじだじに・・・）  
（あのしょーへーがここまで焦るとは・・・）

和は真面目なので規則などには結構厳しい。和の口からその話が出た瞬間に普段全く動じることのない翔平が結構焦っている姿を見た律と澪とムギは心の中で思っていた。

「で、ちょっと聞くんだけど軽音部って部として認められてないの？」

翔平が申請用紙に記入している間に律が和に尋ねる。和は棚から一冊のファイルを取り出しパラパラめくっていくものの首を傾げながら返した。

「・・・うん確かに部活リストに軽音部はないわね・・・もしかして部活申請用紙を出してないんじゃないの？」

「部活申請用紙！？そんなの聞いて・・・」

律が驚いて返すが途中で何かを思い出したらしく言葉が途切れた。ここで澪が思い出したような感じで律に尋ねる。

「そつえば律、お前が部長するから私が出すとか言ってなかったか？」

「・・・忘れてた」

「やっぱりお前のせいかー!!」

漣が律の頬つぺたをグイグイ引つ張る。その様子を見ながら和は唯に言う。

「なんか・・・軽音部って本当に唯にピッタリの部だと思うわ」

「ほえ？」

唯はいまいち内容が理解できていない様子で首を傾げる。和は話を理解できていない唯を見て、今度は翔平に声をかけた。

「翔平が軽音部で落ち着いているってのも信じられないけどね」

「まあ・・・不本意ながら1回始めたことを途中で放り出すのもな」  
「」

和に返しながら翔平は近くにある引き出しに入ってた部活申請用紙を取り出す。

「ほらほら、部長さん」

翔平が用紙をピラピラさせながら律に渡すと、合わせて漣もボールペンを取り出し律に渡す。律はうっくと唸りながらもペンを走らせていくものの最後の欄で手が止まった。

「部長は私で・・・副部長は漣で・・・顧問は・・・誰だっけ？」

律の質問に翔平と漣が答える。

「・・・顧問なんかいないんじゃないの？」

「え〜っと・・・確か音楽の先生は・・・山中さわ子先生だな」

「山中先生は合唱部の顧問をしているわよ」

漣が音楽担当の山中先生の名前を出すと、和が部活動リストを見ながらもうすでに他の部の顧問をしていると口を開き、律は あら〜と呟く。

「さてと・・・顧問がないんじゃないかな」

「な、なら駄目元で山中先生にアタックだあ！！」

「「おおーっ！！」」

翔平が伸びをしながら律に言うと、律は言葉に詰まるもののすぐに次の行動に移る。こういうときの律の動きは早かった。律の掛け声に唯とムギが手を上に上げて合わせ一行は生徒会室からぞろぞろ出て行って、和と翔平がポツーンと取り残された感じになるが唯がすぐに戻ってきて手を引っ張ってくる。

「翔ちゃんもはやく〜」

「ああ・・・じゃあまた後で」

「ええ・・・まあ頑張って」

唯に片手を引っ張られながら翔平は和に声をかけると、和も苦笑いをしながら手をふってきた。

「山中さわ子先生。我が校の音楽教師である。その綺麗な顔立ちと

柔らかな物腰で生徒だけでなく教師の間でも人気が高い。さらに楽器の腕前や歌声も素晴らしく男子生徒の中にはファンクラブが存在するほど人気があるらしい……」

唯に引つ張られ他の3人と合流したときには、律がノートを丸めて目にあてナレーションを始めていた。

「あの……何言ってるの？」

「先生ッ！」

「……軽音部の顧問になってください……!」

いきなりナレーションを始める律に山中先生は戸惑っている。ここで律は一呼吸おいて声をかけ、その後には翔平以外の部員が一斉に頭を下げながらお願いをした。

（いつ打ち合わせしたんだよ……）

1人タイミングを逃した翔平は戸惑う山中先生と目が合ってしまった2人は苦笑いをする。

「ああは……」（き、気まずい……）

「まだ決まっていなかったんだ……。でもごめんなさいね、私合唱部の顧問もしているから掛け持ちはちょっと……ホントにごめんなさいね」

苦笑いしながら山中先生は丁寧に断ってきた。さすが柔らかな物腰だと翔平は心の中と思う。

「い、今まで声を掛けてきた男は数知れず・・・」

「だ、だから！おだてても無理です！」

まだ諦めきれない様子の律が再びナレーションを再開するも、今度はピシヤリと断られた。するとさっきからずっと山中先生を見ていた唯が先生に声を掛ける。

「・・・山中先生ってここの卒業生ですか？」

「そうだけど・・・どうして？」

「さっき見てた軽音部のアルバムに先生と似た人がいたから・・・」

「！？ そのアルバムはどこにあるの・・・？」

「？ 音楽室ですけど・・・」

「そう・・・ありがとう・・・」

口に指をあてながら唯が山中先生にアルバムのことを話すと急に先生が焦りだした。そしてアルバムが音楽室にあると知るとなぜか唯にお礼を言いダッシュで走っていった。

（あ、怪しすぎる・・・アルバムに写ってるの自分だって認めたよ  
うなもんだろ・・・）

綺麗なフォームで走っていく山中先生の背中を見ながら翔平は呆れていたが、

「やばいつ！追いかける！！」

律の号令で一斉にみんな走り出す。翔平もとりあえずついていくことにしたものの、どんどん引き離されてしまった。行き先は音楽室で100%間違いはないはずだ。予測どおり音楽室に近づくにつれギターの音が聞こえてきた。

（唯のギターの音だけであいつこんなに上手かったっけ？）

翔平はそんなことを考えながら音楽室のドアを開けた瞬間にギターの音がやみ怒声が響いた。

「・・・オメエらっ！！音楽室好き勝手に使いすぎなんだよーっ！！」

「「「ご、ごめんなさーい！！」」」

部屋に入るとなぜか唯のギターを持って仁王立ちした山中先生と、かなり怯えている様子で土下座している4人がいる。しかも唯にいたっては半泣きになっていた。

（なんなんだよこの状況・・・？）

「大体なあ！！・・・はっ？」

ここでもようやく自分の言動に気づいたのか、正座をしている唯たち4人と、ドアの所でつまっている翔平を見る。

「今の・・・見た？」

「うん……」

さっきまでの勢いがなくなり静かに聞いてきた。それに唯たちは戸惑いながらも頷く。そして今度は俺の方を向いてくるが、

「いやぁ……見たくはなかったんですけどねえ……」

その様子がおかしく思わず半笑いになりながら答える。その瞬間に山中先生は ガクツ と座り込む。

「……うう……先生になったらおしとやかキャラで通すって決めてたのに……あれはもう、8年前のこと……」

「いきなり語りだした!？」

座り込んだと思うと急に昔話を語りだした山中先生に律がつっこむ。それでも先生の話は止まらず5分ほど聞かされるはめになった。大体の流れとしては昔好きになった人に派手な人が好きと振られてからバンドでどんどん派手になっていき、再び告白したら派手すぎてひかれたという話だった。

(……自業自得じゃね?)

俺は心のなかで笑っていたが顔にはださない。

「……先生……」

一同何て言ったらいいかわからないかんじの中でただ1人熱心に話を聞いていた唯が声を漏らす。

「いいの・・・慰めの言葉なんて・・・」

「先生、顔を上げて・・・」

ここで律が完全に慰める感じで先生の肩に手を置いたが・・・

「ばらされなくなかったら顧問やってください」

完全に脅しにはいった。

「そ、そんなこと・・・」

律に脅され始めた先生が助けを求める目でなぜか俺を見て来る。律はしきりに目線を送ってくるが間違いなく俺からも脅せと心の中で言っているに違いない。

「まあ顧問になるだけなりましょうか？・・・ほら、先生のせいで生徒1人半泣きでしたよ？」

「み、澪ちゃん・・・し、翔ちゃんから黒いオーラが・・・」

「ま、まさか黒田くんも便乗するとは・・・」

律ほどではないが若干生徒が1人半泣きというところを強調して先生に返すと、唯と澪がそんな会話をしているのが聞こえてくる。もちろん半泣きだったのは唯だけでも。

「うう・・・わ、分かったわ・・・」

ここでついに山中先生が顧問を引き受けることを承諾した。その瞬



間唯たち4人ははしゃぎだしたが、先生から演奏を聞かせて欲しいと言われ演奏を始める。

「・・・・・・・・」

「って感じのオリジナルなんですけど・・・」  
「どうですか！？顧問として！」

「うーん・・・まだ所々ズレてるところがあるけど・・・まずボーカーは誰なの？？」

「「「あっ！！？」」」

山中先生の質問に漑が声を上げる。

（ええー・・・気づいてなかったのかー）

「・・・じゃあ・・・まさか歌詞もまだ・・・とか？」

「え、えーっと・・・」

漑が頭をかきながら答えるも途中で途切れる。ここで本日2回目の先生の説教が始まる。

「それでよく学園祭のステージに出ようって考えたわね・・・！音楽室占領して今まで何やってたの！？ここはお茶を飲むところじゃないのよっ！！」

「うう・・・翔ちゃーん・・・」

再び半泣きになった唯が俺の後ろに隠れてくる。今度はよく見ると  
涙も半泣きになっている。

「おいおい・・・」

ムギと律も縮こまってしまっているし、唯は完全に俺の後ろに隠れ  
る。

「それと黒田くんッ!!」

「はいっ?」

ここでなぜか怒っている先生から指名される。

「他人事のような感じだけどあなた副部長なのよっ!!?なのに週に  
2、3回しか部活に来てないってどういうことなの!??」

「へっ?いやいや!僕は副部長じゃないですよ!??」

「なに言ってるの!??ここに副部長 黒田翔平 ってちゃんと書い  
てあるでしょ!?!」

部活の出席簿をもった山中先生が怒ってくるが・・・ところどころ  
意味の分からないところがあったのでたまらず律の方を見る。

「・・・部長さん、副部長俺ってどういうこと?」

「い、いやあ・・・涙がやりたくないって言からさ・・・ほ、ほ  
らっ!副部長いないと部として認めてもらえないし・・・」

律は顔に冷や汗をかきながら言い訳を始める。が、山中先生がこの会話を止める。

「とにかくっ！！！」

「「「ひい！！！！」」」

「・・・はい」

耳がキーンとなる位の声だ。歌声もすばらしいってのはウソじゃないさそうだな・・・。

「歌詞を考えてボーカルも決めなさい！！・・・大体ねえ！！」

（まだ言うか・・・よく喋るな・・・）

女子たち4人はさらに縮こまる。中でも漑は・・・もうアウトだな。

「し、翔ちゃん・・・」

唯は俺の後ろに隠れながらガタガタ震えている。

ここでムギが口を開く。

「先生っ！！」

「ああん！？」

「ケーキ・・・いかがですか・・・？」

「・・・頂きますっ！！」

「はあ!？」

さっきまでの空気がウソのようにケーキを食べだす先生に翔平は啞然としている。もちろん他の3人もそうだが・・・

「んゝ おいしいねえ」

唯だけは美味しそうにケーキと一緒に食べている。なにはともあれ顧問も決まったのだが、歌詞をとりあえず考えると漣が言いこの日の部活は終わった。



## 顧問（2）（前書き）

遅くなりましたが・・・10話目です。

今回は打ち込むのに時間かかった気がする・・・。

次回はオリジナルを入れて作っていかうと思っております・・・それではどうぞっ

## 顧問（2）

翌日。

「「えっ！？もう出来たの？」」

律とムギと唯が声をそろえる。

「う、うん」

なんと昨日歌詞を考えてくると言った漣が一晩で歌詞を考えて持ってきた。なので今日の部活はまず歌詞の発表会から始まることになり顧問の山中先生を含め机に座っていた。

「じゃあ見せて見せて」

「えっ！？もう！？」

「いや・・・もうって」

「私も見たいな」

早速律が身を乗り出し漣に言うと、漣はなぜか驚く。唯も律に続き漣に歌詞の開示を求めるが・・・

「で、でもやっぱり恥ずかしい・・・」

「大丈夫だよ」 笑ったりしないし！  
「そうそう」

今度は律が漣の手から歌詞が書いてある紙を取ろうとするが・・・

「でも・・・あぁっ！？待て！」

「待てないっ！持って来たって事は見せるってことだろ？」

「漣ちゃんお願い・・・ちょっっただけ、こそっつと私に」

「あっ！！ずりい！見るなら私が先だろー！？」

「ええゝ何で？」

「なぜなら私が部長だから！！」

「むっ、ならばっ！私は漣ちゃんの心の友だから！」

「じゃあ私は漣ちゃんの心の友その2だから」

ここで律と唯の言い合いにムギが参戦する。

「こしゃくなっ！！私なんか漣の心の故郷だぞっ！」

「いや、いつからそうなった？」

律の故郷宣言に漣が冷静につっこむ。

「あっ、田舎のおばあちゃん元気かなあ？」

「いや、今関係ないから」

「あっ、去年年賀状出したっけ？」



「話をそらすなーっ!!」

ここでついに唯が話から脱線してしまった。翔平は、そんな口論を紅茶を飲みながら眺めていたがふと斜め横の山中先生が目に入った。最初の方は笑顔だったが、今は相当イライラしているのであるうかつつむきプルプル震えている。

(そろそろかなー・・・5、4、3・・・)

俺は心の中でカウントダウンを始める。

(・・・2、1、GO!)

「早くみせんかーいつ!!!!」

カウント通り山中先生がキレて、ガタツと椅子から立ち上が濡の手から歌詞が書かれているルーズリーフを取り上げた。

「あぁっ!?!」

その瞬間、律と唯が先生の両側から紙を覗き込むが・・・

「「うおおお・・・体が・・・かゆいつ!!」」

突然律と先生2人が体をかき始めた。そんな中歌詞の紙を手にした唯が目キラキラさせながら俺のところに来る。

「翔ちゃん、すごくいい歌詞だよっ」

「へえー・・・どんなの?」

「わ、私としてはいい感じに書けたと思うんだけど・・・」

漣が上目遣いにこっちを見てくるが・・・なぜかもうすでに半泣きになっている。

前からは半泣きの作者が感想を待っていて、横からは歌詞を大絶賛する唯が俺の感想を待っている。

（ふわふわタイム・・・マシユマロみたいにふわふわ？・・・くまちゃん・・・うさちゃん・・・）

「え、えーっと・・・」

「やっぱりだめかなあ・・・」

「いや・・・そうじゃなくて・・・なんか秋山さんのイメージと違ってたっていうか・・・」

いよいよ泣きそうな感じになってきてしまった。自分がこの歌詞の歌をステージで演奏している風景を想像すると正直ない・・・と思う。

（部長が反対するだろうし・・・とりあえず静観しとくか・・・）

焦りながらも俺はこの状況の中で1番無難な選択をして、あとは部長にまかせることにしたが・・・

「すごくいい・・・」

「マジでっ!?!」

隣にいた唯がキラキラと星を飛ばしうつとりとした表情で声を漏らし、その瞬間律が驚いたように唯を見る。

「私はすごく好きだよっ！この歌詞！」

「ほ、本当？」

「うんっ！！」

「……………」

唯が零の手を取り大絶賛する様子を見ながら律と翔平は啞然としていたが、律が最後の頼みといった感じでムギにも感想を求めた。意見が割れた以上最終的には多数決になるはずなのでムギがこっちにつけば結果的には先生も含め4対2で勝てるからだ。

「ム、ムギはどう思うこの歌詞？」

「ああ…………アウトだ…………」

「えっ？…………って超うつとりしてるっ！？」

律と同じくムギをみた翔平が半笑いになりながら呟く。ムギも唯と同様…………いや、それ以上の星を飛ばしている。

「ま、まさか…………ムギも気に入ったの？」

「はいっ！！」

「・・・正直にういつのあり?」

「うんっ!」

「・・・本当に?」

「YES」

「マジで?」

「ほんとにです」

「・・・」

「・・・」

律がムギに質問攻めをするものの、ムギは律の方をまったく見ずに答えていく。いったいどこを見ているのかムギの視線を追うと・・・その先には唯と澪がいる。

「すごいよ澪ちゃん!こんないい歌詞書けるなんて」

「あ、ありがとう唯」

唯が澪の手をとり澪をべた褒めしている。その様子をムギは、ぱっと見ている。

「・・・本人同士がいいなら、いいんじゃないでしょうか・・・」

「えっ?何言ってるの・・・?」

「・・・はい?」

ムギの言葉に律はかなり戸惑いながら返す。俺にもムギが言っている意味が少し分かった気がしたもの・・・

(・・・こいつやべえ・・・)

ムギの言ったことは聞こえなかったことにすることにした。

「ど、どうしようしょーへー・・・このままじゃこの歌詞で決まっちゃうよ・・・」

「ま、まだ先生がいるじゃん」

「・・・あつ！そうか さわちゃんっ！！」

「さわちゃんっ！？」

急に元気を取り戻した律が先生をあだ名で呼びはじめた。

「さわちゃんはこの歌詞ないと思うよね！？」

「えっ・・・そ、そうね・・・」

「だよねっ！！」

「さすが先生」

こうなればとりあえずこの歌詞はなしという流れになると思ったが・・・先生が急に腕を組んで考え始めた。

(・・・なんだ？)

「わ、私も……この曲好きかも」

「あれえ〜!？」

「えっ!? なんて？」

なんと急に先生が賛成に回ったのだ。さっきまでとは180度態度を変えキャピキャピしている。

「……ど、どうしよう、しょーへー……」

「……もうダメだな」

律が再び元気をなくして俺の方を見てくるが……どうしようもない。

結局……

「それじゃあもうこの歌詞でいくか……」

「「わ〜いつ」」

「よかったね漑ちゃん!」

律が漑が作詞した『ふわふわタイム』を学園祭のライブで演奏することに決定を下したが……翔平はあることに気づく。

「学園祭のステージ時間は20分だろ……1曲じゃキツイんじゃない？」

どうみても『ふわふわタイム』だけではもって5分くらいだ。1曲だけではとうていもたないだろう。

「漣ちゃん他に考えてないの？」

「えっ！？いや・・・考えてない」

漣の歌詞を絶賛する唯が漣に尋ねが、漣は慌てたように返す。この様子を見て律が待ったを掛ける。

「「ちょっと待てっ！？もう1曲？？」」

目をキラキラさせながら漣に作詞をお願いする唯に俺と律は焦る。このままの流れでいけば2曲ともメルヘンな歌詞になるのは間違いない。それはなんとかして避けたい・・・。

「み、漣に2曲も作詞任せるのもあれだし・・・そ、そうだよなしょーへー！？」

「そ、そうっすね・・・」

「えゝ、漣ちゃんの作った歌詞いいのにゝ・・・あつ、そうだ！翔ちゃんもギターケースの中に歌詞書いた紙入れてなかったっけ？」

唯が口を尖らせながら　ぶゝつ　と膨れるが、すぐに思い出したように俺に聞いてくる。

「え、そんなのあつたっけ・・・？」

「見せろしよーへー」

「黒田くんも作詞してたんだ・・・」

すぐに横から律と漣、ムギが覗き込んでくる。

唯の言葉に自分のギターケースの中を見ると確かに入っている。相  
当前に書いたやつで、無くしたと思っていた物だった。

「なんで唯知ってたんだ？」

「えへへ、前に翔ちゃんにギター教えてもらったときに覗いたんだ」

「へえ・・・」

唯がなぜか自慢げに ふんすつ とピースをしてくる。

（さてよ・・・この曲を2曲目に回せば・・・）

頭の中でそんなことを考えているうちに歌詞の書いてあるルーズリーフを律や唯の方に回っていった。むこうできやいきやい意見が出ているが・・・

「翔ちゃん！！これすごくかつこいいよっ」

「しょーへー！やればできるじゃん」

「なんか・・・黒田くんのイメージ通りっていうか」

唯がまたまた絶賛すると、律もナイス、といった感じでサムズアップをしてくる。漣とムギもなぜか嬉しそうに歌詞を見ている。

「それじゃあ黒田くん。1回ソロで演奏してみなさい」

「・・・へえ！？」

山中先生が笑顔で演奏しろと言い始めた。もちろんこれには唯たち



女子4人も賛成に回る。

「わかったよ・・・それじゃあ・・・」

結局何度も断ったものの、俺以外の全員が演奏を聞きたいと手を上げたので渋々語り弾きをすることになった。

「・・・」

ジャン・・・

演奏が終わった。

その瞬間拍手のすごいことすごいこと。

「これはもう2曲目はこれでいくしかないなっ」

「「「さんせい」」」

(マジか・・・)

賛成多数で学園祭ライブの2曲目は俺が作詞した曲に決定してしまった。こうして曲目はきまったものの・・・

「で、俺の曲は俺が歌うとしてふわふわはどうするの?」

「えっ?黒田くん歌うんじゃないの?」

「・・・はい!」

ふわふわタイムの作者のボーカルを誰がするのか質問すると、漣は意外そうな表情で衝撃の変事を返してきた。

こんな歌詞を全校生徒の前で歌ってしまったら……想像しただけで鳥肌が立つ。

「えっ？秋山さんが歌うんじゃないの？」

「わ、私は無理だよっ！！」

「……として？」

「だ、だって……こんな恥ずかしい歌詞なんて歌えないよぉ！」

顔を真っ赤にしながら漣は言う。

「おい作者っ！！」

ここで律が漣につっこむ。どちらにしても俺がこの曲のボーカルをするのは絶対にアウトだ。助けを求める目でムギを見ると、

「わ、私はキーボードの演奏で精一杯だから……」

笑顔で断ってきた。

（まあ……しかたないか……）

次に唯に目線を送ると、

「コホンッ、あゝあゝ」

（なに発声練習してんだよ・・・お前じゃあギター弾きながら歌えるわけないだろ・・・）

もう一度ムギに視線を送るが、笑顔で両手を振りながら断ってくる。仕方なくキラキラしている唯に声を掛ける。

「・・・歌う？」

「えっ、私！？で、でも私歌そんなに上手くないし、私なんかで務まるかどうか・・・」

ホントは歌いたくて仕方ないんだろぅが嬉しそうに断ってきた。

「・・・じゃあいいや」

「ウソです！！ 歌う！ 歌いたいです！！！」

「何なんだよ・・・」

今度は俺の腕を掴んで離そうとしない。そうなら最初から正直に言えよ・・・

「部長さん、唯が歌いたって言ってるぞ」

俺の言葉に律と澪が顔を見合わせるが・・・とりあえず1回歌ってみようという流れになった。

「それじゃあ、ちょっと歌ってみよう！」

「ラジャー！」

律の言葉に唯は敬礼をして、ギターを構える。

（ギター弾きながら歌えんのか？）

「君を見てるといつもハートドキドキ」

「・・・唯ギター弾けてないぞ」

「あつ そつか！忘れてたあ」

俺の想像したとおりギターを弾けていなかった。唯は てへへと笑ってもう一度やり直すが・・・

「・・・今度は歌えてないぞ」

次はギターは上手に弾けるものの、歌が歌えていなかった。ついに唯は床に両手について半泣きになってしまった。

「ううう・・・ギターを弾きながら歌、歌えない・・・」

「あらら・・・」

翔平は苦笑いをしながら首をふる。律と漣、ムギも同じような感じだ。

「黒田くん、唯ちゃんに教えてあげて？」

「うゝん・・・今からねえ・・・」

半泣きの唯を見かねてムギが翔平に声をかける。俺は頭をかきながら考えるもどう考えてもあと10日で唯が歌いながらギターを弾けるとは思えなかった。うゝん、と考えていると横の方から先生が声をあげた。

「しょうがないわね・・・先生が特訓してあげる」

「先生っ!!」

ムギと同じく唯を見かねて山中先生が唯にギターの指導をする展開になった。それを聞いて唯は パアゝ と明るい笑顔で先生の手をとる。

「それじゃあまず歯ギターの練習から・・・」

「それはいいです」

先生からの歯ギター練習のお誘いを唯は即答で断ったが、すぐに俺の方を見る。

「あつ、翔ちゃん先生・・・」

「いいからいいから 教えてもらえよ」

「翔ちゃん・・・」

唯が複雑な表情で呟く。まあ頭の中では俺に悪いのではないかと考えているんだろうけどな・・・

「先生のほうが教え方は上手なはずだしな。頑張ってきたら今度唯の家に遊びに行くからさ」

「えっ！？ホントに!？」

「ああ、今朝憂ちゃんに誘われたしね」

「じ、じゃあ私頑張るよ！先生、宜しくお願いします!！」

「それじゃあ振り落とされないようについてきなさいよ!！」

「ラジャーツ!！」

こうして唯と先生は音楽室を飛び出していった。後に残った4人だけが・・・

「唯ちゃん大丈夫かしら」

ムギが心配そうに尋ねる。

「まあ大丈夫でしょ・・・」

「先生よりか黒田くんのほうがよかったんじゃない？」

「まあ・・・確かに先生よりは・・・」

俺は大丈夫だろうと返したが、律と澪は先生より俺が教えたほうがいいのでは・・・と言い始めた。

どちらにしてもこうなったからには唯の特訓が終わるまで待つしかない・・・こうして今日からしばらく唯は学校が終わると毎日先生の家に通うことになった。



## とある1日（前書き）

山中先生の特訓が始まり早くも4日が経った。その間、部活は個人練習になっているわけだが・・・

今回は久々に翔平の妹の晴香が登場！唯のキャラも後半少しおかしくなっていますが・・・気にしないでください！（笑）



## とある1日

唯が山中先生からのワンマン指導を受け始めてから早くも3日が経った。毎日唯は学校が終わるとすぐに学校を飛び出していくのが日課になり、休み時間も1人机で黙々と先生から出された宿題であるうかコードの練習をしていた。

「うーん・・・こうじゃないんだよね・・・」

なかなか上手くいかないのか唯はひとり言を言いながら頭をかいている。

「ねえ翔平。唯どうしたの？」

「ああ、今山中先生にギター弾きながら歌う特訓してもらってたんだよ」

唯のいつもと違う様子を見て和が翔平に何事かと尋ねる。それに対して翔平は少し笑いながら返す。

「へえ・・・唯も頑張ってるのね」

昔から一つのことになかなか集中できなかった唯が頑張って練習している姿を見て、和は感心している。なんといっても和は昔から唯の保護者的存在だったもんな・・・。

この日も唯は授業が終わるとすぐに走って教室から出て行った。

「じゃあね 翔ちゃん、和ちゃん！」

「ああ、じゃあね」  
「また明日ね」

手を振りながら走っていく唯に和と翔平が同じく手を振る。そして唯の後を追うような感じで和も教室から出て行く。まあ生徒会で学園祭の準備が忙しいんだろっけだな。

（さてと、部活行くかな・・・）

翔平もカバンを担ぐと音楽室にむかって歩いていった。

「おっ！しょーへー遅いぞ！！」

「こんにちわ　今お茶淹れますね」

音楽室に入るとすでに律、漑、ムギの3人は席についていつも通りのティータイムを始めていた。

「唯は今日も授業終わってすぐ帰ったのか？」

いつも通りの向かい合った席についた翔平に漑が尋ねる。

「ああ、いつも通り」

「でも唯ちゃんいいわよね　先生の家で2人っきりで特訓なんて・・・」

翔平に紅茶の入ったティーカップを差し出しながらムギがキラキラした目で　ポア　と宙を見上げる。

「い、いいのかな？」

「・・・おいムギ、帰ってこい」

漣はムギの言葉の意味がよく分からないらしく首を傾げ、律は宙を見つめているムギを呼び戻す。

（やっぱムギはなんなんだろうな・・・）

この日の練習は各自パートの個人練習ということになり、下校時間にもなったので今日はおしまいとまった。

「いやあ〜今頃唯、さわちゃんと特訓してんのかね？」

律が伸びをしながら言う。最近律は先生のことを（さわちゃん）と、あだ名で呼び始めていた。

確かにそっちのほう呼びやすいけどな・・・

「うーん・・・まだしてるんじゃないかな」

「本番まであと5日か・・・もうそろそろみんなで合わせないとな」

「確かに・・・」

漣の言うとおり本番まであと5日。そろそろ合わせて練習しとかないとヤバイくらいになってきた。

（さてと・・・どうしたものかな・・・）

その時後ろから聞いたことのある声が聞こえた。

「あっ！翔平さんと漣さん、律さん、ムギさん、お久しぶりです！」

突然名前を呼ばれた4人は後ろを振り向くと・・・そこには憂と晴香が立っていた。

「おお！憂ちゃん久しぶりー」

「こんばんわ　・・・隣の子はお友達？」

律と漑、ムギが笑顔で答える。なぜかムギがワクワクした様子で憂の隣に立っている晴香を見て憂に尋ねる。すると晴香は俺を見てニヤツ　と笑いペコリと頭を下げる。

「始めまして　翔平の妹です。いつも兄がお世話になっています」

「えっ！？しょーへの妹！？」

「えっ！？そ、そうなの？」

「まあまあ・・・」

「ああ、まあね」

律と漑が驚いた様子でこっちを見てくる。ムギはというとなぜかキラキラした目で晴香と俺を見ている。

（こいつわざとらしいな・・・）

普段の態度とは180度違う晴香を見て心の中で思うものの顔には出さない。

「あれ？これから何処かお出かけ？」

「うん　憂と友達の家勉強しに行くよ。もうすぐ中間テストだし」

「へえー・・・まああまり遅くなんなよ」

「分かってるって！それで今日お母さんもないから晩ご飯自分のは自分で用意してよ」

「お前はどうすんの？」

「友達の家でゴチになります」

最初らへんは礼儀正しい姿を演じていたけど、最後の方は普段の言葉使いが出てきている。まあ、その後も律とムギが中心になって晴香に色々質問していたけど・・・中でもビックリしたのは晴香から律たちへの質問の中身だった。

「あつ、ちょっと質問なんですけど、部活中ってお兄ちゃんと唯さんはいい感じですかあ？」

「えっ！？しょーへーと唯が？」

「あらあら」

「／／／」

（何言ってるんだコイツ・・・？）

予想もしない晴香からの質問に律がびっくりし、ムギは顔に手をあててにこにこし、なぜか澪は顔を赤くする。憂もにこにこ笑っているけど・・・たぶん憂のなかでは（いい感じ＝仲良くしている）になっていると思うけど、晴香が言った意味は100%違っただろうと思う。

「そ、それはあゝ・・・しょーへー？」

「まあいい感じなんじゃない？なかなか練習しないけど」

「ま、まあそうだね・・・」

ここはたいていのことでは焦らない翔平、上手く切り抜ける回答を瞬時に作り律に答える。律も戸惑いながらも頷く。晴香は俺の普段通りの態度と返事を聞きつまらなさそうに口を尖らせるものの、友達との時間があるのだから話を切り上げた。

「それじゃあ失礼します」

「じゃあお兄ちゃん、留守番よろしくね」

憂が綺麗に礼をすると、晴香も頭を下げ俺に手を振りながら憂と歩いていった。話をしている中で憂が家を留守にしたら唯のご飯大丈夫なんだろうかと話題が出たが、さすがそこは出来た妹。学校から帰ってすぐ唯の分のご飯を用意しているらしい。

「い、いやあゝ、しょーへーとはあんまり似てないな・・・あつはっは」

離れていく憂と晴香を見ながら律が言葉に詰まりながらも笑い、ムギも似たような感じで笑っているし、澪は相変わらずなんか恥ずかしそうにしている。

「さてと・・・それじゃあ晩ご飯の買い物するんで」

晴香たちと別れて少し歩いたとこの丁字路で俺は3人と別れることにした。学校から帰ってすぐにご飯を作るのはめんどくさいので

適当に惣菜を買って帰ろうという無難な作戦である。

「それじゃあまた明日な」

「ばいばい」

律と澪、ムギは手を振りながらいつも通りの道を自宅に向かい歩いていった。

（さてと・・・なに買うかな）

そんなことを考えながら夕方の商店街を歩いていっていると・・・

「・・・あれ？」

信号待ちで止まった十字路の反対側の歩道で唯がカバンの中をゴソゴソしていた。相当焦っているようだったけど、最後は ガーンと効果音が聞こえそうな感じでガクツと頭を下げていた。

（何してんだ・・・？）

そんなことを思っているうちに信号が青になり、止まっていた人達が一斉に交差点を横断し始めた。

もちろん俺も歩き始めるが・・・唯は反対側の歩道で立ち止まったままだ。

ようやく信号が青になったのに気がついたのか唯も歩き始めたがなんかふらふらしていて・・・

「あっ！すいません！」

予想通り、後ろから歩いてきた買い物帰りのおばさんにぶつかった。唯は慌てておばさんに頭を下げて謝り、また歩き始めるが今度は電柱に頭をぶつけていた。しかもその間に信号は赤になっている。

「なにしてんだよ？」

「いたたあゝ・・・あつ！翔ちゃん！！」

結局信号が赤になり交差点をわたることが出来なかった唯に声をかけると、電柱にぶつけた頭をさすりながらこつちを振り向いた。

「今日は先生との特訓は終わったの？」

「うんっ　今帰ってる途中だよ・・・でも翔ちゃんなんでこんな所に？」

「ああ、なんか家に誰もいないらしいからご飯どうしようかと思つて・・・」

振り向いた後は　パァーッ　とすごい笑顔だったけど、晩ご飯の話が出ると急に唯のテンションが落ちた。

「さつき憂と晴香に会ったけど、憂が唯の分のご飯は家に用意してあるって言ってたぞ。良かったじゃん」

「・・・翔ちゃん」

「なに？」

唯が静かに言う。笑顔だけどなんかフリーズしている。



「忘れた・・・」

「・・・はい？」

「家のカギ・・・」

「おいおい・・・」

翔平は話の途中から薄々そんな気がしていたが・・・予想したことで現実があまりにも一致しすぎて思わず笑いが出てしまった。

「というわけで・・・翔ちゃん助けて！」

「助けてって言われても・・・カギないんだろ？」

「憂が帰ってくるまで翔ちゃんの家にいさせて・・・」

「はあ・・・そういうことか」

唯は俺の袖を握ったまま離そうとしない。俺もどうしたものかと考えていると・・・

（ぐうぐう・・・）「はっ！」

唯のお腹がなり、えへへ、と恥ずかしそうに笑いながら袖から手を離れた。

（やれやれ・・・）

「分かったよ。憂が帰ってくるまでおいてやるから・・・その代わりベットにダイブしたりすんなよ?」

「えっ、本当に!?」

その瞬間溢れんばかりのキラキラした笑顔になる唯。

「ありがとう 翔ちゃん」

「どういたしまして・・・ほら、ご飯買いに行こっぜ」

「うんっ」

こうして唯と2人でスーパーに來たわけだけど2人分なら買っより作った方が安く上がる気がしたので、

「なんか食べたいものある?」

唯に聞いてみることにした。唯は口に手をあててしばらく考えていたが・・・

「うーんとね・・・オムライスがいい!」

すぐにキラキラした笑顔で答える。この辺りは昔から全く変わっていないなあ〜と翔平は笑顔の唯を見つめる。

「あ、ああ。オムライスね」

「オムライスって美味しいよね」

「へえ……じゃあオムライスにしようか？」

「うんっ」

結局惣菜を買って帰る作戦は無くなり今日の晩ご飯はオムライスということに決まり、多分家の冷蔵庫にあると思っけどケチャップ、たまねぎ、卵を買って帰ることにした。

「いやあ翔ちゃん、なんかごめんね」

商店街から家までの帰り道、唯が頭をかきながら言う。

「全くだよ……家のカギなんか忘れんなよ」

「えへへ……カバンに入れたと思ってただけだね」

忘れ物をしたりするのは昔からよくあることなので俺はただただ呆れるばかりだった。

そうこう話をしているうちに平沢家が見えてくる。そのすぐ隣にあるのが翔平の家であり、昔からよく唯が遊びに来ていた……ベッ トにダイブしたり部屋を散らかしたりするのでそこが悩みの種なんだけだな……

「おじやましまっす」

「部屋散らかすなよ」

翔平が玄関を開けると唯が嬉しそうに家に入っていく。

（昔から変わんないなあ……）

苦笑いしながら翔平も靴を脱いで家に上がる。なにはともあれお腹がすいた・・・早くご飯を作ろうと台所に入ると、唯が腕まくりをしてついて来た。

「翔ちゃん！私が作るよっ」

「いやいや無理だろ!？」

「えへへ〜大丈夫だよ〜」

「合宿のときに（私の本気見せちゃうぞ!）とか言ってるあのザマだったくせに」

珍しく翔平がニヤニヤしながら唯をからかった。

（が〜んっ!〜!）

相当ショックを受けたのか唯は涙目になってしまった。

（ええ!??）

これには焦ってしまった。

「わ、悪かったって!そんなに落ち込むなって!じゃあ任せるからさ!？」

「えっ!?? いいの!？」

（しまった・・・!!）

さっきまでの涙目がウソのようにキラキラし始める。それを見た瞬間翔平はあることを思い出した。  
たしか前に憂が言っていた・・・

「お姉ちゃんが料理すると逆に仕事が増えるんですけどね」

台所で張り切って材料の準備をしている唯を見て嫌な予感がした。ホントに唯一人に任せて大丈夫なんだろうか。そうこうしているうちに唯は卵を割ろうとし始めたが・・・なんか卵の持ち方がおかしい。

「なあ唯、お前って卵割れるよな？」

「それはもちろんっ！」

高校一年生の女の子に卵が割れる？とか聞くのは普通失礼すぎるけどついつい聞いてしまった。唯は胸を張って えっへん といった感じで返してくる。

「前に憂からも褒められたんだ、お姉ちゃんが卵割ったら殻がいっぱい入ってるって」

「・・・ダメじゃん!？」

恐るべき天然・・・結局この後翔平がオムライスを作っていくことになり、唯は隣でそれを観察＆手伝いをするようになった。フライパンにご飯とたまねぎ、ケチャップを入れて炒めているのを見ながら言う。

「おお、さすが翔ちゃん先生・・・」

「おいおい、普通立場逆だからな？あの部長さんでも料理出来るってのに・・・」

前に律がハンバーグを作ったとか話をしていたのを思い出して言うてしまった。

（ガッンッ！！）

「・・・もう割るときカラ落したりしないからね・・・」

唯は卵を一つ持って台所の隅で座り込んでしまった。さっきから料理に関してはやたらシヨックを受けている気がする。

（この話題ではいじらないほうがいいかもな・・・）

座り込んだ唯の背中を見ながら翔平は苦笑いをしてしまった。

一方の唯は夏休みの合宿前に律たちからから聞いた言葉を思い出していた。

律：「いいか唯、男子っていうのは料理ができる女子が好きなんだぞー！ここはひとつしょーへーに唯の手料理を食べさせて落としちゃえ」

唯：「え・・・でも私に出来るかなあ・・・自信ないよ」

ムギ：「憂ちゃんがいるじゃない」

唯：「うーん・・・遷ちゃんはどっ思う？やっぱり料理できたほう

「が いい の かな？」

漣：「そりゃあまあ・・・／＼／」

律：「とにかくっ！絶対出来た方がポイント高いから」

唯：「分かったよ、律ちゃん、漣ちゃん、ムギちゃん！憂に教えてもらっつよ！」

（結局この後憂に教えてもらっただけどダメだったしな・・・はあ・・・）

唯はかなり落ち込んでいた。その時・・・

「おゝい、オムライス出来たぞ〜！」

翔平の声が聞こえたので立ち上がりリビングに行くことにした。

「うわあ〜 美味しそうだね〜！！」

テーブルの上にあるオムライスをみて唯は目を輝かせる。翔平はその様子をみて ホッ とする反面呆れてしまっていた。

「さてと、さめないうちに食べよっか」

「うん！いただきます〜す」

オムライスを口に運んだ唯の顔がキラキラ輝き始める。

「おいし〜い 翔ちゃんすごいよ！〜！」

「そりゃあどうも」

こうして他愛の無い話をしながらオムライスを食べていると玄関のベルが鳴った。

（ピンポーン）

「誰だろ？」

翔平が玄関を開けると憂が立っていた。

「おっ、憂ちゃん。どしたの？」

「あつ翔平さん、夜分遅く申し訳ありません・・・お姉ちゃんって来てますか？」

「ああ来てるよ。家のカギ忘れたらしくてさ・・・まあ憂ちゃんもあがりなよ」

「あつ、すいません。おじゃまします」

「あれ？晴香はどうしたの？」

「晴香ちゃんは友達の家泊まるって言ってましたよ」

「なるほど・・・」

憂は笑顔で言った。さすが出来た妹である。姉である唯を心配して早めに帰ってきたのだろう・・・晴香とは大違いだな。



「あつ憂　この翔ちゃんが作ったオムライス美味しいよ」

リビングに入った憂に唯が笑顔で声をかける。ここで翔平が憂に尋ねる。

「憂ちゃんは今のご飯食べてきたの？」

「あつはい、友達の家でいただきました。けど・・・」

「・・・けど？」

「私も翔平さんが作ったオムライス食べたいです」

唯と同じくキラキラした目で見てくる。さすが姉妹・・・ここまで似るモンなのか。

「それはそれは・・・じゃあ唯分けてやりなよ」

「えっ？」

仕方なく唯に言うと、すでに完食していてもご口を押さえながら抜けた返事を返してきた。

いつの間に・・・仕方なく翔平の皿から少し憂に分けることになった。

「美味しいです　翔平さん上手ですね！」

一口たべた憂も大絶賛する。その様子を横で見ていた唯も（そうでしょう？）と見ているが、

「お願い憂、一口分けて」

「いや、お前さっき食べたじゃん!？」

「しょうがないな。．．はい、お姉ちゃん」

翔平が思わずつつこみ、憂も苦笑いしながらも唯の口にスプーンを運ぶ。唯は あゝんとそれを頂き、

「おいしーい」

頬つぺたに両手を当ててまたまたキラキラし始める。

「あつ、お姉ちゃん。頬つぺたにケチャップついてるよ」

「えっ?どこどこ」

その唯の顔にケチャップがついているのを憂がみつけティッシュでふき取る。

「はいっ」

「ありがと憂」

これが平沢家の日常なのだろう。翔平は苦笑いしながらその様子を見ていた。

本番まであと5日である。





## 初めての学園祭!!（前書き）

前回の話から年末ということもありなかなか打ち込み出来ず、半月も経ってしまいました・・・

遅くはなりましたがもう12話目になります。今回もところどころおかしい所があるとは思いますが・・・そこらへんのとこ宜しくお願ひします！

## 初めての学園祭！！

「それじゃあボーカルは唯で、曲名は（ふわふわ時間）と・・・もう1曲の曲名は？」

「あつ、曲名考えてなかった・・・」

「なにしてんだしょーへー！」

「私もずっと前から気になってたんだけどな」

「あらあら・・・」

いよいよ本番まで3日後にせまったこの日、生徒会委員の和が音楽室に来て文化祭ライブの最終打ち合わせをしていた。そこで指摘をうけたのは・・・俺が作った曲の曲名が決まっていなかったところだった。

唯は今日さわちゃん先生と特訓をしていて部活には来ていない。和、律、澪、ムギの4人が苦笑いをしているが・・・俺の作った曲に曲名がないのをだいぶん前から気づいていたらしい。

（だったらその時教えてくれよ・・・）

「そうだな・・・じゃあMAX・RUN（全力疾走）でいいや」

「そう・・・それじゃあ2曲目のボーカルは翔平と。また詳しいこと決まったら報告しに来るから」

和は用紙に書き込み軽音部員を見回す。みんなは「い」と返事をしていくが唯の姿が見えないのが気になったのだろう。和は翔平の隣に行き尋ねる。

「唯はまだ特訓しているの？・・・ってか唯がボーカルで本当に大丈夫なの？いつそのこと2曲とも翔平がしたほうが安心なんじゃない？」

「それは絶対無理！！」

「そ、そう・・・」

翔平は和の言葉を聞いた瞬間に手を振りながら即答する。和はふわふわ時間の歌詞をまだ見てないのであるが、あの歌詞を大勢の前で男子が歌うのは作者には悪いけど想像しただけで無理だ。和は戸惑いながらも頷く。そして和がドアの方に一歩踏み出した瞬間に、ドアが勢いよくバァンと開いた。

「待たせたわねっ！！」

ドアを開けたのは山中先生。その後ろにはギターを構えている唯がいるけどうつむいているので表情はよく分からない。

「おおナイスタイミング・・・」

「みんな、完璧よっ！」

翔平が思わず声を漏らす。それに対し先生はサムズアップをして自信満々に報告する。

「ほ、本当に大丈夫なのか？」

「もちろんっ！さあ唯ちゃん・・・見せてあげなさいっ！！」

先生が自信満々なのに対し、一言も喋らない唯を見て不安になったのか零が再度確認をとると先生は大きく頷き唯に言う。唯はこくと頷きギターを弾き始めるが・・・

「ほ、本当に上手くなってる・・・」

「す、すごい・・・」

「なんて自信に満ち溢れた表情・・・」

「5日くらいでここまでいくか・・・」

今までとは全く違う唯のギターを聞いて4人はそれぞれ感想をもらす。そしていよいよ歌に入ってしまった。

「ぎみ”を”見”で”る”どい”づも”・・・」

「ええっ！？おとといまで声枯れてなかっただろ！？」

おととい俺の家に来たときには声は全然普通だったのに2日でここまで枯れるモンなのかと翔平が驚いて声を上げる。

「練習させすぎちゃった」

「“こえ”がれ”ちゃっだ”」

「かわいこぶつてもだめだー！！」

先生と唯が頭に手を当てて えへっ といった感じでかわいこぶるが、律が指をさしながらつつこむ。

「ほ、本当に唯で大丈夫なの？変更するなら今日までしかできないわよ？」



「えっ、そうなのか！？どうしよう・・・」

和がため息をつきながら変更が今日までしか出来ないと言うと漑が驚きながら口を開くが・・・ちらちら翔平に視線を送っている。おそらくボーカルを頼もうかと考えているのだろぅがそれは無理な相談である。もちろん翔平も漑の視線には気がついているものの気づいてないふりをすると言う。

「じゃあもう秋山さんがするしかないね」

「ええ・・・わ、わたし！？」

「そうねえ・・・秋山さんなら歌詞覚えているだろうし」

「そうだな、じゃあ漑よろしくなっ！」

「異議なっし」

翔平が腕を組みながら漑に言うと、山中先生も賛成に回る。それに続いて律がサムズアップをするとムギも笑顔で賛成に一票をいれる。そして最後に唯が頭をかきながらガラガラ声で言う。

「ごめ”ん”ね”ゝみ”お”ち”ゃん”」

「ふ、ふえええ・・・」

みんなからの視線を受けて漑の顔は真っ赤になり、ボンッ！と頭から煙を出して倒れてしまった。

（こんなんで大丈夫なのか・・・？）

そして10月に入り、本番の日がついにきた。いつもとおなじ校舎だけどいたるところに屋台が並びたくさんの人で賑わっていた。桜ヶ丘高校学園祭、通称「桜校祭」である。クラスごとでそれぞれ屋台を出しているのももちろん翔平に唯も出ている。ちなみに1年2組クレープ、パフェなどのスイーツ類の出店を出していて、もともと数年前まで女子校だったこともあり女子生徒客が多く教室内はすごいことになっていた。

「チョコレートクレープ2つお願いしま〜す！」

「イエッサ〜」

教室の窓際にはホットプレートなどの調理器具が並び交代でクレープなどを作っていて、今は翔平と健太、唯と他数人が調理場の当番をしていた。そこにお客からのクレープのオーダーが入りクレープ係の健太がへらへらしながら敬礼をして作り始める。

「翔平〜！もつとシャンシャン動けよ〜」

「なんでそんなに元気いいんだよ・・・あ〜あ出店でバイク屋とか出せたらいいのにな〜」

クレープの生地をのばしながら健太が翔平に言う。一方の翔平は先に注文を受けたチョコレートパフェの盛り付けをしながらため息をついていた。

「翔ちゃん、律ちゃんが来たよ〜」

そこに接客係の唯と律が調理場に入ってくる。唯も3日前と比べればかなり声の調子もよくなってきたがまだすこしかすれていた。で本番では計画通り漣がボーカルをすることになっていた。まあどっちにしる途中で変更がきかないんだけどな。パフェの盛り付けをしている手を止めて翔平が律の方を見る。

「部長さんどしたの？」

「おっ、しょーへー！大変そうだなー、ってか本番前に少し合わせたほうがいいんじゃない？」

「そうだな・・・まあまだ当番だしな・・・」

律の提案にはもちろん反対意見はないけども、この状況で調理場を抜けるのは厳しいだろう・・・と思いながらお客でこった返す教室内を見回している翔平にクラスの女子たちが声をかける。

「黒田くんここはやつとくから平沢さんと練習行ったらいいじゃん」

「そうそう！あとで聞きに行くからさ」

「えっ？いいの？いやゝなんか悪いね」

「いいからいいから」

少し離れた所でその様子を見てた律が隣に立っている唯に話しかける。

「おおー・・・やつぱしょーへー人気者だなあ」

「そつでしょ」

律が腕を組みながら言つと唯はなぜか自慢げに答える。

「えっ？唯いいの？」

「えっ？いいって何が？」

「いや、しょーへーが他の子に取られちゃってもいいの？」

「・・・へっ！？あわわわっどうしよう律ちゃん」

唯の返事に戸惑いながら律がまた質問をするが、唯にはまだ律が気にしていることが分からないらしく不思議そうに首を傾げる。最後は呆れながら律が言つとようやく唯も話の内容が分かったのかおどおどし始める。そんな唯をみて大きくため息をつく律だった。

やがて翔平の着替えも終わり3人は音楽室へ移動を始めた。階段を上がっていくと・・・ドアの前でムギが音楽室の中を覗いていた。

「ムギちゃん何してるの？」

唯が不思議そうにムギに尋ねる。

「あつ、ちよつとね ほら・・・見てみて」

「？」

なぜか嬉しそうなムギがドアのガラス部分を指差す。律と唯、翔平は首を傾げながら中を覗くと・・・遷の後ろ姿が見えた。手には歌

詞が書かれたルーズリーフを持っていた。

「1人で練習してたんだろうな・・・」

律も嬉しそうに微笑む。そしてドアを勢いよく開ける。

「漣ー！！おまたせーっ！」

「練習おつかれーっす」

律に続いて翔平たちも音楽室に入っていく。よっぽど集中していたのだろうか、漣は驚いて後ろを振り向く。

「・・・みんな遅いぞ！」

「ごめんね、漣ちゃん。クラスの当番があつて・・・」

（お前なにもしてなくね？）

少し怒っている漣に言い訳をする唯をみて、翔平は心の中で思う。そうこうしている間に律はアンプなどの機材の所に行き手をパンパン叩く。

「それじゃあ・・・みんなそろったことだしステージ脇にこれ運ぼうぜーっ！・・・よろしくっ、しょーへー！！」

「これ全部！？無理に決まってる・・・」

アンプなどはもちろんのことキーボードやドラムもまとめておいてあった。翔平は渋い顔をしながら手をブンブン振って断るが・・・

「何おー！！前にバイトの時普通に鉄の塊持ってたじゃん」

「いや・・・それとこれは違うくない？」

そして5分後・・・

「はあ・・・」

結局アンプなどの機材を運ぶ係りになった翔平はため息をつきながらアンプを運んでいた。とは言っても別にアンプが重くてため息をついている訳ではなかった。原因はその横で同じくアンプを運んでいる人物だった。

「おいおい・・・あと俺が運んどくからもうそこに置いとけ。他の軽いやつ運べよ」

「わたしっ！！・・・全然大丈夫だよ！」

アンプを持ってフラフラ歩いている唯を見かねて翔平が言うが、唯は相変わらずフラフラしながら自信満々に大丈夫と返事をする。

（一体その大丈夫の根拠は何処にあるんだか・・・）

「唯ちゃん、黒田くん、頑張って」

仕方なくフラフラ歩く唯にペースを合わせて歩いていると同じくアンプを担いでいるムギが声を掛け、そのまま先に行ってしまった。しかも翔平よりも歩くのが速いしいつもの笑顔である。

「わあゝ！ムギちゃん力持ちだねゝ」

「これ結構重たいのにな・・・」

そんなムギに唯は目をキラキラさせながら感心し、翔平はその横で驚いていた。結局この後フラフラしながらアンプを運ぶ唯にペースを合わせているうちにムギは3回ステージ脇と音楽室を往復していた。

ちなみにその間唯が人に6回、物に5回、合わせて11回もアンプをぶつけそうになったがこれらは全部翔平の気配りにより未然に防ぐことができたものの、本番前はかなり疲れてしまった。

（はあく・・・あのまま1人で行ってたら間違いなくアンプ壊れたな・・・）

「あうう・・・う、腕が・・・」

「1回運っただけで何でだよ？」

ようやくアンプをステージ脇に置き唯と音楽室に戻ると、ムギがちょうどお茶を淹れていた。机には律と澪も座っている。そんな中全く疲れた様子のないムギを見て翔平は啞然としていた。

「皆さん、お茶淹れましたよ」

「ああ・・・ありがと・・・」

（こいつ疲れてないのか・・・？）

ムギの言葉に翔平は苦笑いをしながら席につく。唯も床に突っ伏していたけど、机の上にクッキーとかが並んでいるのを見て ガバツと起き上がり席に着いた。

「それにしても漑、なんか落ち着いてるな」

「んっ？」

「だってあんなにボーカルするの嫌がっていたのに」

「そんな子供じゃないんだし・・・いつまでも動揺しちゃあいられないわよ」

律の言葉に漑は笑顔でティーカップを持ちながら答えるものの、手の方ではティーカップがカチャカチャ音を立て今にも紅茶がこぼれそうになっていた。

「「めっちゃ動揺してんな!？」」

翔平と律が同時にツツコミを入れる。

「もうやだ・・・律! 私とボーカル変わって!」

「じ、じゃあドラムはどうすんだよ!？」

「私がやるから!」

「ベースはどうすんだよ!？」

「それも私がやるから!!」

「おーやつてもらおうか!? 逆に見てみたいわ!」

さっきまでの笑顔がウソみたいに涙目になった漑が律にボーカルを



変わってくれと言い出した。しかもベースとドラムを1人ですと言い出すなど、今の漑は相当混乱しているようだ。そのときまたドアが開いた。

「みんな、いるわね!？」

「あつ、先生?どしたんです?」

入ってきたのは上機嫌な山中先生、それを見て翔平が紅茶を飲みながら声をかけた。

「ふふふ・・・ 不本意ながらも軽音部の顧問になったことだし何か手伝えることはないかなあゝって思つて・・・ 皆の衣装作つてきました!！」

「ノリノリだつ!？」

「地味にクオリティ高いな・・・」

また律と翔平が同時にツツコミをいれるが、すぐに翔平が先生に言う。

「先生・・・ 気持ちはありがたいんですけど・・・ タイミング悪いね?」

「えっ?」

山中先生はどういうことが分からないらしく首を傾げる。その先生に翔平は無言で後ろを指差す。  
そこには・・・

「あ、あんな服着てみんなの前で歌うの？」

ついに動揺がピークに達した様子でガタガタ震えながら呟いていた。それを見て律も呟く。

「確かに・・・タイミング悪かったな」

「そっか、この服はお気に召さなかったか・・・」

すこし落ち込んだ山中先生がため息をつきながらふんふん頷くと、漣もブンブン首を縦に振る。ここでこの話は終わるだろうと思ったものの、先生が再び笑顔になった。

「あつ！　じゃあ私の昔の衣装はどう」

「・・・あーっ！　やっぱりさっきの衣装着たくなってきたー！！」

先生の提案を聞いた瞬間、漣は叫ぶ。

（まあ今の時代にあんな格好でステージには出れないわな・・・）

前に見た卒業アルバムの写真を思い出し翔平は寒気がして震えてしまった。その横で律が立ち上がり先生に言う。

「さわちゃんストップッ！　こんな衣装着るの漣じゃなくても恥ずかしいよ！」

「律・・・だ、だよね！」

律の言葉になんか安心したのか漣も笑顔になり頷く。先生はまた考

え込むが律や翔平の後ろを見て口を開く。

「そうかなあ・・・頑張って作ったのに・・・それに唯ちゃんたちは喜んでるわよ」

「・・・えっ？」

「お前らー!!」

山中先生の言葉に3人が振り向くと・・・先生の作った衣装の中から唯はスクール水着、ムギはナース服に着替えていた。今この音楽室の中には翔平が普通にいるものの全くの恥じらいなくはしゃいでいた。

その姿をみて律は怒鳴り、普段はあまり動じない翔平も年頃の気恥ずかしさ顔を赤くし下を向く。

結果的には律と澪も観念し山中先生から衣装を受け取ったものの、翔平の衣装には部員全員啞然としてしまった。

「黒田くんはバイクに乗ってるからあ・・・こんなのに見てみました」

山中先生が翔平用に取り出した衣装はなんと一昔前の暴走族が着てそうなライダージャケット上下セットだった。バックプリントにはドクロのプリントがされてるなど、ここまできたら作者のセンスを疑ってしまうようなものだった。受け取った翔平は冷や汗ダラダラになり、澪、律、唯、ムギの4人も苦笑いをする。

「さ、さわちゃん・・・これはいくらなんでもないでしょ・・・」

「えっっ、けっっこうワイルドな感じで黒田くんにピッタリだと思うんだけどなあ」

「いやいや・・・僕は暴走とかはしてないですからね!？」（これはこれで失礼だろ・・・）

これはさすがに見かねた唯が言うと、先生は翔平をみながらピツタリだと言いつけ、翔平が苦笑いをしながら先生に衣装を返した。結局、翔平の衣装はバーテンダーみたいなものに変更になった。

そして・・・各自着替えを済ませ5人はステージ脇に集合していた。その中で白がメインの衣装を着た唯は舞台袖から観客席を覗いていた。

「うわぁ、人がいっぱいいるよぉ・・・」

「そうだな、今こそ練習の成果を発揮するときだぜっ!」

「うんっ!」

「はいっ!」

唯の言葉に頷きながら律が片手を上にあげて音頭をとると他の4人も合わせる。ちなみに律とムギは黒がメインの衣装を着ていた。

「りっっ・・・な、なんでこんな格好で平気なんだよぉ!？」

「可愛いですわよー澪ちゃん」

よっぽど恥ずかしいのかカーテンにくるまっている澪の言葉に、律はニヤニヤしながら返す。そんなことをしているうちに順番が回ってきた。

「次は、桜ヶ丘高校軽音楽部によるバンド演奏です」

司会者の声が響くと律が全員の顔を見て頷く。初ライブでワクワクしている唯とムギ、いつも通り表情に全く緊張のかけらもない翔平、極限まで緊張したのか足がガクガク震えている澪。

「よしっ！みんな行くぞーっ！！」

「「「おーっ！！！」」」

「澪ちゃん、まだ緊張してるの？・・・あつ　澪ちゃんだって分からないようにメイクしてあげようか」

「いつ・・・行つてきまーす！」

緊張している澪を見て山中先生が提案をするものの、澪は走って行ってしまった。

そして全員が舞台の配置につき照明が点く。その瞬間観客席から歓声があがる。これに澪は完全に飲み込まれてしまった。

「あ・・・あ、あ・・・」

「澪ちゃん！」

緊張で震える澪に隣にいた唯が声をかける。すると澪は緊張が和らいだのか笑顔で唯の方を見る。その後ろには翔平がギターの裏で観客には見えないようにサムズアップをしている。ムギも澪に大きく頷く。

そして律がスティックを上にした。

「1 / 2 / 3 / 4 . . . ! !」

カウントに合わせて各自演奏を始めた。ギター初心者唯もいい感じで演奏をし、ボーカルの漑も途中から吹っ切れたのか本調子に戻っていた。もちろん翔平の作った2曲目も無事終わり、会場は観客の大歓声と拍手につつまれた。それを見て漑が嬉しそうにはしゃぐ。

「み、みんなー!! ありがとうー!!」

(やれやれ . . . 無事終わったな)

翔平も笑顔ではしゃぐ漑を見ながら深呼吸をする。唯も始めてのライブで成功したのが嬉しかったのかステージ上を手を振りながらピョンピョン飛び跳ねている。

しかし . . . 拍手のなかステージから退場しようとしたとき事件はおきた。

「きゃっ! ?」

「んっ?」

「漑ちゃん! ?」

「あらまあ . . . 」

漑がマイクのコードに躓いてステージの上で転んだ。漑の悲鳴に驚いて4人は振り向く。翔平は顔を手で押さえながらため息をつき、唯は漑の所に駆け寄るが . . . この時観客席側には漑のスカートの中のものが完全に見えていた . . . が漑はまだ気づいていない。

(カシャ!)

しばらくして会場の中ほどでフラッシュが光り、シャッターを切った音が響いた。その瞬間零はどんな状況なのか理解したのだろうか零の悲鳴が会場内に響き渡った。

「イ、イヤアアアアア・・・！！！」

「うう・・・！ま、待てー！！」

それを見た律がステージから飛び降り写真を撮ったであろう観客のところに走っていこうとするが、すぐに翔平が律を呼び止める。

「まあ待て！今から追いかけても見失うだけだ。それに・・・」

「それになんだよ・・・しょーへー・・・悔しくないのかよっ・・・」

「

相当悔しいのか律は涙目になり翔平の方を振り向くが、翔平はいたって冷静だった。律に話しながら目でチラッとフラッシュが光った所を見ると、律の声に驚いたのか2、3人が走って会場から出て行くのが見えた。

「・・・あいつら何処の人が知ってるし」

「えっ！？そうなのか、しょーへーっ！？」

「まあね、屋台にお客で来たし、話の中で東山高校とか言ってたし・・・ご丁寧に帰りの電車の時間も話し合ってたからね」

東山高校は桜ヶ丘高校の北東にある共学の高校である。この言葉で律も闇雲に犯人を追いかけるのを止めて、この場はステージから退

場することになり、ショックで放心状態の澪を律と唯、ムギが囲み音楽室に戻っていつていた。

「あれっ？翔ちゃんと律ちゃんは？」

「あら？さっきまでいたと思うんだけど・・・」

音楽室に入るまでは後ろにいたはずの2人が消えたことに唯が首を傾げながら言うと、ムギも紅茶をカップに注ぎながら首を傾げる。一方、澪は部屋の隅に座ったままブルブル震えていた。

「はあー！お姉ちゃんと翔平さんかつこよかったね」

「唯さんがあんなにギター上手いとかビックリしちゃった。・・・でも最後のあれ大丈夫なのかな・・・？」

「そうだね・・・でもお姉ちゃんも翔平さんも律さん、ムギさんもあるしきつと大丈夫だよ！」

「うーん・・・そうかなあ」

会場から出て色々な屋台が並んでいる中に休憩所としてベンチが並んでいるところがあり、そこに唯の妹の憂と、翔平の妹の晴香が座って話をしていた。憂の言葉に晴香も笑顔で返すものの、最後の方は暗い表情で言う。憂も一瞬暗い表情をするものの、すぐに明るい笑顔で大丈夫だと言った。晴香はそれでも心配そうに「うーんと首を傾げる。そのとき憂が遠くでなにか見つけたのか立ち上がる。

「あれっ？律さん・・・」



「えっ？ああ・・・さっきのドラムの人だ」

憂の言葉に晴香も立ち上がりその方向を見る。遠目で見てみると、律の前には高校生であろう男子が4人並んでいて、なにか言い合いをしているみたいだった。

「晴香ちゃん、行ってみよう！」

「ええ！？ち、ちよつと憂〜！」

その様子を見て嫌な予感がしたのか憂は晴香に言う走りだした。晴香は戸惑いながらも一人にされるのは嫌らしく憂の後についていく。律たちに近づくにつれ会話の内容も2人に聞こえるようになってきた。

「・・・だからっ！！相当ショックを受けてるんです！撮った写真すぐに消してくださいっ！！」

「ああ！！何言っただよー！人を犯人扱いしやがって！」

「だいたいなあ、証拠とかあんのかよ！？」

「ぶ、部員の1人が見てたんで・・・」

「はあ？そんなことで犯人扱いされたらたまねえわな！」

律が震えながらも4人の男子に抗議をしていた。相手も相手に確実に不良で、律も相当怖いはずである。

しかし4人の不良も最初はヘラヘラしながら適当に受け流していたものの、律のしつこさについにキレて腕を掴んで離さない律を振り

払おうとした。

「お前しつこいんだよっ!!」

「ああ!!」

律はもちろんのこと、憂も晴香も思わず目を覆った。しかし・・・

「・・・暴力はだめだろ。写真屋さん」

「なんだお前!？」

後ろから急に現れた翔平が律を振り払おうとした腕を押さえた。

「し、しょーへー・・・話が違っじゃんかよー・・・」

「いやあ・・・ごめんごめん、忘れ物しちゃってさ」

かなり怖かったのだろうか、律は泣き出してしまったが翔平にツッコんだ。それに対して翔平は頭をかきながら謝る。

「お、おにいちゃんっ!？」

少し離れた所で晴香が驚いていた。でもまだ終わったわけではなかった。

「お前さっきのバンドの中にいたやつだな・・・」

「女の子の前でかつこつけちゃって」

「どっか行けじゃまだじゃま!」

不良4人組が翔平のむなぐらを掴み、囲みこんだ。律もその様子を見てガクガク震えているし、憂も晴香も顔が真っ青になっていた。あまりの出来事に誰もその場を動くことが出来なかった・・・が、翔平だけはいつも通りの涼しい表情だった。

「まあまあ落ち着けて。東山高校3年2組 池原真吾君」

「えっ！？な、なんで・・・！？」

「いやあゝみんなに知られちゃったら恥ずかしいよねこれ」

「お前っ・・・！！ふざけんなよっ！！」

ついにキレた4人がついに殴りかかる。横から見ている律たちにはどう見ても翔平が不利に見えた。

が・・・相手の攻撃をいなす形で次々に相手をさばいていき・・・

5分後には4人の不良頭を下げながら自分で写真をとった携帯を翔平に差し出していた。

「す、すいませんでした・・・」

「ああもういいよ・・・もしこの学校の生徒に仕返ししたりしたらこのことばらしちゃうからね」

写真を消したことを確認した翔平が笑顔で携帯を返しながら言つと、4人は首を縦にブンブンふり返事をする。

「は・・・はあい・・・」

そして走ってその場から去っていった。

「ほらほら部長さん、写真も無事消せだし打ち上げといきましょうか」

放心状態で座り込んでいる律に翔平が笑顔で言うと、珍しく律が静かに返す。若干頬が赤くなっているようである。

「な、なんかありがとね」

「いいっていいって、さ、行こうぜ」

「・・・うんっ!」

律と翔平は音楽室に向かい歩きだしたので憂と晴香は2人のとこまで行くことが出来なかったものの、笑顔だった。

「はあ・・・翔平さんがいてよかったね晴香ちゃん!」

「うんっ そうだねっ」

こうして初めての学園祭ライブは無事(?)終わっていった。



## クリスマス会！！（前書き）

13話目にしてようやくクリスマス会編に入ります！

基本は原作に合わせていますが、所々オリジナルになっています！

## クリスマス会！！

「あつまま、雪が降ってきたよ！」

「あら、本当ね」

昼間から雲行きが怪しかったのだが、ついに雪が降り始めた。時計を見ると、12月24日 午後4時をさしていた。翔平のバイト先であるここ、ホンダウイング桜ヶ丘東店の外はクリスマスイブなので家族連れやカップルなどで賑わっていた。とは言っても店の中にはお客は誰もいない。まあ、この寒いのにバイクでツーリングに行く人なんてめったにいないだろうけどな。

「あらら・・・とうとう雪降り出したか・・・」

「まさにホワイトクリスマスってことですかね」

店の外を眺めながら店長と翔平が話していた。今日の仕事はもう大方終わったので愛車のCB400の洗車を久々にしていたもののやつぱり寒い。

「今日はもう帰ったらどうだ？多分閉店まで誰もこないパターンだと思うし、バイクで帰るんだろ？」

窓から見える外の人ごみを見ながら店長が言う。それを聞いてバイクを拭く手を止め翔平も外を見ると、さっきより雪が強くなった気がした。確かに路面が凍結したら厄介になるだろう。

「そうですね・・・じゃあ、お先に失礼しますわ」

「気をつけて帰れよ」

外に出ると雪は若干弱くなっているものとにかく寒い。

(うう・・・寒い・・・クリスマスパーティーね・・・)

バイクのエンジンをかけ暖気をしていると携帯が鳴った。ポケットから携帯を取り出すとサブモニターに部長とでている。

「はい？」

「おー、しょーへー!!!! もうバイト終わったのか!？」

電話に出た瞬間に耳が キーン となるような声が聞こえたので思わず携帯を落としそうになってしまった。

(ああ・・・耳が痛い・・・)

事の始まりは12月22日になる。

その日は2学期の終業式があり明日から冬休みということになる。部室では翔平以外の4人がいつも通り紅茶を飲みながらまったりとくつろいでいた。その4人に背中をむける形で椅子に座り俺はヘッドホンを装着しバイク雑誌を読んでいた。

(ん・・・バランスからいうと逆輸入のCBR600RRかな・・・いや、いつそのこと隼にするか・・・?)



そんなことを考えながら雑誌のページをめくっていると後ろから肩を叩かれた。  
ヘッドホンを外し振り向くと・・・律だった。なんか紙切れを一枚もって笑顔だ。

「なに？」

「しょーへーもいいよな！？ クリスマス会」

「ええ・・・」

律が手に持っていた紙を半ば強引に押し付けてくる。

（今度は何を言い出すかと思えば・・・）

仕方なく渡された紙を見てみると・・・

ハ クリスマス会 ヽ

12月24日 午後6時スタート

会費 1人1000円

場所 唯の家

・・・会費とるのかよ。

「へえ・・・」

「そういうことだから間違えても私ん家に来るなよー」

「最初は私の家でするみたいだったんだけど、その日は都合が悪くて・・・」

律の横でムギが申し訳なさそうにしているし、

「翔ちゃん！料理は任せてね！」

「大丈夫なのか？」

（やれやれ・・・卵も割れないくせにな）

「大丈夫　憂が作ってくれるから！」

ムギに続いて唯がピースをしながら笑顔で言うと、漑が苦笑いしながら唯に尋ねる。それに対して唯は　ふんすつ　と自慢気に答える。どっちにしろ9割方は憂が作るんだと思うけどな・・・まあそれ以前にその日バイトが入ってるんだけどな。

「っていうか・・・その日バイトなんだけどな」

「「「・・・えっ！？」「」」

普通に言っただつもりだったけどなんか場の空気が急に重くなった・・・って言う前になんで俺が参加する流れになってるんだろぅなあゝ　と頭の中で思っている間に律が唯と漑とムギに集合をかけて向こうでコソコソ話をしだした。

（ヤバイ・・・この流れは・・・）

「まあ待て、しょーへー！」

「翔ちゃん、絶対楽しいよゝ」

「ええ・・・」

結局この後、予想通り唯と律の説得が始まり・・・

「翔ちゃんも来ようよぉ・・・」

最後には唯が袖をつかんで上目遣いにこっちを見てくる。このパターンになるともうダメだ・・・

（ここで無理って言ったら間違いなく泣くな・・・はぁ・・・）

「分かったよ・・・バイト終わったら行くからそれでいいだろ？」

「ほんとに！？ やった」

「よしっ それじゃあしょーへーも参加ってことでけっぺーい！

」

「うんっ！ やっぱり軽音部の全員が集まらないとな」

「楽しみですね」

「なぁ・・・しばらく言ってなかったけど翔ちゃんはやめてね・・・

」

最終的にまた翔平が折れる形になり、その瞬間さっきまでとはうって変わって溢れんばかりの笑顔になる唯。その横で律もクリスマス会の参加者欄に翔平の名前を書き込み、後ろでは零とムギが盛り上がっていた。

「じゃあさ！あれやろうぜあれ！プレゼント交換ッ！」

「あっ、いいですね」

「やろうやろう」

かなり張り切った様子で律が言うと、ムギと唯も賛成する。それを見て律はニヤニヤしながら続ける。

「漣、変なもの持ってくんなよー？」

「そ、それは律だろ？小学生の時ビックリ箱渡されたんだからな」

（しょうもないな・・・）

漣はため息を吐き、呆れながら答える。まあ律の普段の言動を見れば普通に想像がつくけどな。

「と、いうわけでしょーへーもプレゼント用意しとけよ！」

「へいへい・・・」

結局この後練習はなく、クリスマス会の計画を立てただけでこの日の部活は終わった。

――――

「翔ちゃん、美味しい料理出来てるから早くおいでよー！」

「はいよー・・・」

ピッ・・・

こうして唯の家に行くようになったものの、とにかく寒かった。

（１回家に帰って着替えるか・・・）

今日は暇だったから仕事着は汚れてないけど、この格好で行ったら唯や律にいじられるの間違いない。ので、１回家に帰ろうとしたものの・・・

「あつ、翔ちゃん！ お帰り」

（おいおい・・・なんで外で待ってんだよ）

唯の家と翔平の家は隣なので帰り道は唯の家の前を通過することになる・・・が、なんと玄関先に唯が出て待ち伏せしていた。そして唯の声が聞こえたのかドアが開き憂も中から出てくる。

「お疲れ様です。翔平さん」

「さあさあ！ 翔ちゃんどうぞ中に！」

さっきまで料理を作っていたのだろうか憂はエプロンをつけているけど・・・姉の唯はいつも通りの普段着だった。しかもハポリスマンってプリントが入っている。

（いつも思っけどこんな服どこで売ってんだろっね）

「なあ・・・もしかしてずっと外で待ってたの？」

「いえ、さっきまで家の中にいたんですけど、お姉ちゃん急に外に飛び出しちゃって・・・」

「それはね憂！ 翔ちゃんの気配がしたから！」

バイクにまたがったまま唯に聞くと憂が笑顔で答え、その後唯も続く。

「いや気配って何だよ？」

「翔ちゃん、気にしたら負けだよっ！」

「へ？」

言っていることがよく分かんないので聞きなおすと、今度は片手を前に出して俺の言葉を遮る。憂も横で苦笑いしてるし・・・そんな会話をしているうちに唯が大きなクシャミをする。

「うう・・・へつくし!!！」

「ああ・・・お姉ちゃん、風引いちゃうよ」

「おいおい、鼻水でてるぞ・・・」

まあ外にそんな薄着で出たら寒いわな・・・。憂もそれに気づいたのか、

「とりあえず翔平さんも上がってください・・・あつ、バイクはうちの庭に停めてていいですよ」

「そうだよ、早く上がりなよ」

憂に鼻水をティッシュでぬぐってもらいながら唯も続く。しかしどう見ても姉と妹逆だな。

「じゃあ停めさせてもらいますわ」

「寒いゝ・・・翔ちゃん、早く入ろうよゝ」

「分かったから・・・」

バイクを平沢家の玄関先に止めて唯たちについて家に入ると、テーブルの上には七面鳥やケーキなどがずらりと並んでいた。そのテーブルを囲む形で律と漑とムギが座っている。

「おつ、やっと来たか！お疲れさん」

「でも外寒かっただろ」

「ああ、お疲れゝ・・・でもすごい料理だな」

翔平がリビングに入ると律が声をあげ、漑もちらつと窓の外を見て言う。テーブルの上に並んだ料理を見ながら律たちと話していると、憂が声を掛けてきた。

「翔平さん、上着預かりますよ」

「えっ？ああ・・・ありがと。この料理って憂ちゃんが作ったの？」

「え、ええ」

「私も作ったんだよッ！」

「そうなの？」

憂に尋ねると、何か気にいらないものでもあったのだろうかと思つたのか遠慮げにこくと頷き、その横にいた唯が続けて言う。翔平

が少し驚いた様子で返す。それを見て唯はテーブルの上に置いてあるケーキを持った。

「このケーキ！」

「マジで!？」

「・・・の上にイチゴを乗せました!」

なぜか誇らしげに報告する唯を見て、翔平は苦笑いをしながらため息をつく。

「へえ・・・他には？」

「えっ、えっくとね・・・」

すると出来た妹の憂が必死に姉である唯のフローをする。

「で、でもお姉ちゃんホントによく頑張ってくれたんですよ! 掃除しようとしてくれたり、飾りつけしようとしてくれたり、それから・・・」

「でへへ・・・」

その様子をみて翔平をはじめ律や澪たちも自然と笑顔になるが、1番笑顔になってるのは唯だった。

しかし本当に出来た妹だな・・・と思いながらホンダウイングのバックプリントが入ったジャンパーを憂に手渡し席についた。そこから憂が戻ってきて全員分のジュースを配り終わると律がコップを持ち上げた。



「それじゃあ・・・メリークリスマス!!」

「「「かんぱい!!!」」」

律の言葉に続き全員もコップを持ち上げ乾杯をしていく。

「いやあ、今年も終わっちゃうね」

「やあ、ね、オヤジくさい」

「「「・・・・・・・・」」」

律の言葉によく聞く声の返事が返ってくるが・・・よくよく考えるとその人はこのクリスマス会には招待されていないので、シーンとなる。

「これ美味しいわ、お代わりもらえるかしら？」

「どわーっ!? さわちゃん!?」

「な、なんでここにいるの!?!」

「だ、だれですか!?!」

「あゝ・・・顧問の先生だよ」

普通に憂にお代わりを要求している山中先生を見て律と唯が驚き声を上げると、憂も驚き戸惑いながら先生ではなく翔平に尋ねる。それに対して苦笑いしながら翔平が答えた。

「全くもっつ!顧問を忘れるなんてどういう事!?!」

山中先生は憂からお代わりをもらい一口食べるとぷんぷん怒りながら言った。

「あゝいや・・・忘れてたわけじゃなんですけどその・・・」

「さわちゃんのか・・・」あつ、憂ちゃん、これお代わりいいかな

「

「えっ！？ あ、はい」

律が目を逸らして言いづらそうにしていると唯がにこにこしながら口を開くが・・・すぐに翔平が割り込み唯の言葉を妨げる。今まで唯を見てきてとんでもなく天然だということが分かっているのでのこの後出るであろう禁句がすぐに分かったのだ。憂も空気が読めたのか苦笑いしながら頷き翔平の皿を受け取る。

（ナイスしょーへー・・・）

（あ、あぶなかった・・・）

山中先生と唯以外は心の中で ほっ とため息をつくが山中先生は唯の言いかけた内容が気になるらしく食いついてきた。

「ちょっと！唯ちゃん何を言おうとしたの？」

「いや、さわちゃん・・・」あゝ！憂ちゃんこれおか・・・『黒田くんづるさい！！』

「・・・すいませ〜ん」

それが禁句であることを全く理解していない唯がまた口を開くと翔平が再び妨害しようとするが、今度はピシヤリと先生に止められてしまった。唯は不思議そうに翔平を見る。このとき翔平を始めムギや澪も必死にアイコンタクトを送るが・・・唯は先生を見てにっこり笑って言う。

「さわちゃんは彼氏と予定があると思って、呼びませんでした」

（（ああ・・・やっちゃった・・・））

唯を除く全員がそう思った。シーンとなるなか下を俯きブルブル震えていた山中先生が唯に襲い掛かり頬を引っ張りだすが、唯は訳が分かっていないような表情をしている。

「そんなことを言うのはこの口かぁー!!」

「ふえあゝ!?!」

「2回もチャンスがあつたのに・・・さすが天然・・・」

「はぁ・・・」

その様子を見ながら澪が呟くと、翔平も額に手を当ててため息をつく。

「罰として唯ちゃんはこれに着替えなさい!」

「なんでそんなもの持つてるんですか!?!」

山中先生がカバンの中からサンタのコスプレ衣装を取り出すと、禁句は分からなかった唯がまともなツツコミを返す・・・が先生にリ

ピングから連れ出されていった。

「じゃじゃーん」

「!？」

サンタの衣装に着替えた唯がリビングに戻ってきて笑顔でピースする。簡単にいったらへそだしファッションのコスプレ衣装だった。それを見てサラダを食べていた翔平は少し顔を赤くして咽てしまい、唯はそんな翔平を見て首を傾げていた。

「翔ちゃん、どうかしたの？」

「・・・まあ着替えたら？風邪引くよ」

コスプレ衣装の唯に珍しく慌てた様子の翔平を見て律とムギはニヤニヤしていたが・・・

「可愛いけどダメね！ 唯ちゃんには恥じらいが足りないわ！」

「ガーンッ・・・」

唯のコスプレ姿を鋭い目で見ていた先生が腕組みをして言うと唯は座り込み、その頭を憂がよしとなでていた。

「やっぱりこれが似合いそうなのは・・・」

「ひいつ!？」

唯から回収した衣装を持った山中先生が部屋の中を見回し澪の見る

と、澪は悲鳴を上げて逃げ出した。

「ほーら 逃げないで」

「い、嫌ですよー！」

山中先生から逃げる澪が部屋を飛び出し、その後を追って先生も行ってしまった。2人が部屋を出て行った後は玄関の方から澪の悲鳴が聞こえてくるなか、部屋の中はシーンとなっていた。しばらくして同じ服のままの澪と山中先生と、いつの間に来たのか和もリビングに入ってきた。

「みんな、こんばんわ」

「あれ？和じゃん」

「あっ！和ちゃんいらっしやうい」

「あれとはなによ？唯たちに招待されたのよ」

「そっかー、そいえばしょーへーには和来るって言ってなかったっけ？」

「おいおい・・・」

翔平が少し驚いた様子で言うと和は口では怒っているものの、少し笑いながら答える。それを聞いて律が思い出したように言う。その後は和も加えてまたクリスマス会が再開し、見計らっていたように律が声を上げた。

「よーしっ！気を取り直してプレゼント交換でもするか！！」

「「おーっ!!」」

律の言葉に唯とムギがワクワクした様子で声を合わせる。ここであることに気がついたのか翔平が先生に尋ねる。

「先生はどうすんの？」

「大丈夫よ！ちゃんと持ってきたわ」

「おーっ！さわちゃん準備いいなー」

先生がカバンの中から綺麗にラッピングされた箱を取り出すと律がサムズアップをしながら先生を褒めて、部屋の中が明るくなったもののすぐに先生がそれをぶち壊した。

「本当は今日彼氏に渡すはずのものだったんだけど・・・」

（（お、重たい・・・））

（この人何しに來たんだよ・・・）

その言葉に部屋の空気がズドンと下がり、先生以外の全員は心のなかで同じようなことを思っていた。禁句が分からなかった唯ですら俯いている。今思えばさっきの唯の言葉は嫌味以外の何者でもなかったな・・・。

「それじゃあ始めるわよっ！みんなプレゼント出してー！」

やけくそになった山中先生の言葉の言葉に全員戸惑いながらも各々プレゼントを取り出しテーブルの上に置いていく。それを先生が一

箇所に集めていくが・・・テーブルの上に並んでいた食器をカチャカチャ音を立ててどけていった。

（（ああ・・・））

それを見て憂と翔平が心の中でため息をつき、律や唯も呆然と見ていたがやけになった先生はまったく気づいていない。

「はいっ！！ ジングルベル ！！」

先生の掛け声で溻に先生の手からプレゼントが手渡され、溻から和へと次々プレゼントが回っていく。

「・・・スズがなる」 今日楽しい・・・クリスマス・・・  
う、うう・・・」

（（（プレゼント交換ってもっと楽しいものじゃなかったけ・・・）））

（か、帰りたい・・・）

プレゼントを回しながら先生が歌うが、途中に感情が抑えきれなくなったみたいだった。唯や溻はみんな気まずそうな表情でプレゼントを回していく。

「・・・はいっ！ ストップっ！！」

歌が終わり先生の掛け声でそれぞれ自分の手元にあったプレゼントを受け取った。翔平の手元には黄色の可愛いラッピングがしてあるプレゼントが来ていた。

「あつ！ それ私のプレゼントです」

「へえ、これ憂ちゃんのか」

翔平の手元にあるプレゼントを見て憂が笑顔で言う。それに対して翔平も笑顔で返す。他のみんなもそんな感じで盛り上がっていたが・

「さあ、なにが入っているのかしら・・・すごく素敵なものの予感がするわあ」

『ビリビリリ・・・』

「つて、さわちゃん開けるのはやつ!？」

「開け方雑だな・・・」

部屋の中で誰のプレゼントか盛り上がっている中でただ1人包装紙を破ってプレゼントを開けている先生がいた。それを見て律と翔平がそれぞれツツコミを入れるが先生にはまったく聞こえていない。

「さつ！ 何かしら」

「せ、先生ツ！ それは!!」

そして先生が箱を開けようと上の蓋を持つが、それを見て湊が手を上げて箱を開けるのを阻止しようとするけど、箱が開くほうが速かった。

「ほがつ!？」



箱が開いた瞬間、中から丸い顔が飛び出し先生の眉間に当たった。そういえば小学校のときに律からビクリ箱を渡されたことがあるとか言ってたからその仕返しでもしようとしたのだろうか。

「まさか漣がビクリ箱を用意するとは・・・」

「なんか以外だったな・・・」

「ち、違うんだ黒田くん！・・・その・・・律に渡すつもりだったんだけど・・・」

「漣ちゃん、気にしたら負けだよッ！」

「これは気にするだろ・・・」

部屋の中がシーンとなる中律と翔平がボソツと呟くと顔が真っ青になった漣が手をブンブン振って必死に否定する。それを見て唯が漣を励ましている？のdarouが、言っている意味がよく分かんなかった。

そんなやりとりをしている間に下を俯いていた山中先生がプルプル震えていた。

（あゝ・・・またキレるかな・・・）

「クッククッククツ・・・あーっはっはっはっ！！ 最高のクリスマスだわーっ！！！」

「うわあーっ！ 先生が壊れたあー！？」

「もう見てらんね・・・」

前に先生に怒られたときに耳が痛くなるくらいの声を出されたので

翔平はさり気なく両耳を押さえる・・・が、ショックのあまり笑いが出た先生だった。それを見て澪が悲痛な叫びを上げ、その横で翔平も目を押さえる。ちなみにさつきから憂や和は無言のままだけども明らかに先生を一步引いた目で見ていた。

「さっ・・・私のはなになー」

気を取り直した律が自分のプレゼントをあけていくと・・・中には味付け海苔のパックが入っていた。

「あ、味付け海苔・・・」

「あっ、それ私のだわ」

「相変わらずお歳暮チツクな感じだな」

律が気持ちガツカリした感じで呟くと和がそれを見て声を上げ、翔平が苦笑いしながらツツコむ。

その次は澪が包みを開けるとクッキーなどが入った箱があった。

「これ・・・ムギの？」

「わあ！ 澪ちゃんいいなあ」

「はい いつも買っているお店で取り寄せたんです。なんか手を抜いてしまつてすみません・・・」

唯がそれを見て目をキラキラさせて羨ましがり、ムギは手抜きで申し訳ないと苦笑いしながら返すが・・・

「み、澪、これ・・・値段・・・」

「!?!?」

隣にいた律が値札を見つけたのか目を点にして澪の肩を叩く。澪もそれを見たのか尋常じゃないくらい驚いていた。

「じ、じゃあ次はしょーへーいつてみようか!」

「んゝつと、憂ちゃんのだな」

「はい　　気に入ってもらえるか分かりませんが・・・」

気を取り直した律が言うと、翔平が包みを開けていく。その横で憂がドキドキした様子でそれを見ていた。全員の視線が集中する中・・・

「わあゝ　　可愛い手袋ゝ。いいなあゝ翔ちゃん」

「おゝ・・・手袋かあ。ちょうど買おうかと思ってたんだよ　　あ  
りがとね憂ちゃん」

「気に入ってもらえて良かったです」

箱の中に入っていた白い手袋を見て唯がまたまた目をキラキラさせて羨ましがる。見た感じは女の子用だろうけどまだ翔平にも着けないことはない。翔平からお礼を言われ　ホッ　としたのか憂も笑顔で答えた。この後もプレゼント交換は続き、和が先生から受け取ったプレゼントは変なCDで、ムギが律から受け取ったものはマラカス・・・といった感じで盛り上がっていった。

「じゃあ最後は唯だな！・・・え〜つと、しょーへーからか」

「わあ〜 翔ちゃんからかあ〜！」

「いいなあ〜唯ちゃん」

「なんか箱大きいな」

「まあ・・・大した物じゃないけどさ」

最後に指名された唯が目をキラキラさせながら箱を開けていき、ムギモ ポーッ とした様子でそれを見ていた。そして唯が箱のフタを開けると・・・クマのぬいぐるみが入っていた。

「わあ〜可愛いッ 翔ちゃんありがとね〜！！」

「だから抱きついてこなくていいから・・・」

ぬいぐるみを箱から出してそれを眺めた唯が パァ〜ッ と溢れんばかりの笑顔でそれを抱きしめて、勢いのまま翔平にも抱きつこうとするもののすぐに止められる。

唯が抱きついてこようとすることはあらかじめ予測できていたものの、翔平も少し赤くなる。

この後もクリスマス会は続いていったが・・・

「すきありっ！」

「わっ！？」

ちなみに翔平は、結局唯一一瞬の隙をつかれ抱きつかれてしまいそのままクリスマス会が終わるまでず〜っと密着されたままとなって

しまった。

「えへへ」

「離れるよ……はぁ……」

顔を赤くして慌てる翔平と抱きついて幸せそうな笑顔の唯、その様子を見て律とムギはニヤニヤし、和と憂は苦笑い、漑は恥ずかしそうに下を俯き、山中先生は1人なんか落ち込んでいた。

こうしてクリスマス会は盛り上がり、夜は更けていった。





## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0749y/>

---

平沢唯の幼なじみ ～高校生活～

2012年1月10日20時46分発行